川柳塔

平成十五年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九一二号

日川協加盟

No. 912

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個　人　一口1/9頁　二、〇〇〇円
　　1/6頁　三、〇〇〇円
　（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団　体　次の四種といたします。
①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円
②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　5月23日

〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
TEL06-6629-6914
川柳塔社

第27回 全日本川柳2003年香川大会

日　時　六月十五日(日)　午前十時開場
会　場　マツノイ・パレス（クリスタルホール）
〒761-1705
香川県香川郡香川町川東下一八七八
TEL　087-879-3411

宿　題　第一部　締切りました
第二部（当日投句、11時20分締切）
「公　園」　吉岡茂緒選
「休　む」　佐藤美文選
「宝」　福岡竜雄選
各題2句　当日配布の句箋に記入

第二次選者
吉岡　龍城・今川　乱魚・礒野いさむ
竹本瓢太郎・大木　俊秀

会　費　4、000円（昼食・記念品含む）

表　彰　文部科学大臣奨励賞　1名
参議院議長賞　1名
川柳大賞　1名
大会賞　11名
ジュニア部門三賞の予定

問い合わせ先
〒761-8078
高松市仏生山町甲二五二四―一
村尾孝峰　方
日川協香川大会事務局宛
TEL・FAX　087-889-3385
㈳全日本川柳協会大会委員長　礒野いさむ
全日本川柳香川大会実行委員長　吹田朝児
TEL・FAX　087-898-1177

黄金の町 堺

河内天笑

十五世紀の後半、室町幕府は、その頃栄えていた明と貿易を始めました。大きな利益を生む遣明貿易は幕府の財政を豊かにしました。しかし大きな船をしたて、わが国の特産物を積み込んで明へ行くには莫大な資金と危険を背負う事になります。堺の豪商は勇敢にもこれを請け負って取引をしました。堺の商人たちは益々力をつけて繁栄をつづけるかたわら、全国から有力な商人たちも堺に集まり黄金の町「堺」を築きあげて行きました。ザビエルに代わって、キリスト教をひろめにきたガスパル・ビレラは、本国に送った手紙に

「堺の町は、はなはだ富んでいて、住民も多く豪商がひしめいている。町の西方は海で、他の三方は堀。幅広く深いお堀はいつも水がたたえられ、町はベニスのような自治政治が行きとどいている。」

と記され、また「日本国中でいくさが行われていても、この町では敵も味方もなく、みな友人のように話しあって戦うことが無いので、日本全国で堺の町ほど安全な所はない。」とも記されています。

事実、応仁の乱がおこり、京都をはじめ、あちこちが戦場となった時も、堺の町だけは別天地の如く富み栄えたので各地からどんどん商人が集まる事になりました。東洋のベニスと言われたゆえんです。

信長も秀吉も堺の繁栄ぶりが気になり圧力を加えました。秀吉が大阪城をつくった時、堺商人の力を弱め大阪の町を盛んにしようとして、堺の商人をたくさん大阪に呼び寄せて住まわせました。今も大阪市の地名にある堺筋がそれです。これを見習うようにして全国の大名たちが、自分の城下に堺の商人を呼んで住まわせたのです。姫路、倉敷、広島、高知、北九州、長崎、京都、岸和田、大和郡山の各市には今も堺町の地名が残っています。そのほか堺町がいつのまにか栄町に代わったところもいくつかあるようです。

江戸に幕府をひらいた家康も堺の商人を江戸に招いて、商業を盛んにしようと考えました。江戸に移り住んだ堺の商人たちは、昔から堺の町に多くあった柳の木を堺からとり寄せて植え、ふるさと堺をしのびました。だから銀座のあたりが東京の堺町だったと考えられています。

堺の町は応永の乱（一三九九）と元和元年（一六一五）の大阪夏の陣による戦火を二回も受け、特に夏の陣では二万もの家が焼かれ町は一面焼け野が原となりました。その後三〇〇年程は大過なく過ぎましたが、昭和二十年には太平洋戦争による爆撃で焼かれました。私が疎開先から脱走して家に帰ったのが六月三十日。その十日あとの七月九日夜十時半すぎに空襲警報が出ました。警報は一旦解除されほっとしましたが、十日午前一時半ごろ急に大阪湾から堺に入ったB29は、五、六機ごとの編隊で約百機が襲い、雨のような焼夷弾の下を姉と海岸へ逃げまどった生々しい記憶があります。

座右の句

人恋し人煩わし波の音

私の句

飾っても貧しい心光らない

（琛）

左右田　泰雄

川柳塔　五月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　黄金の町　堺……河内天笑…(1)

日だまり……牛尾緑良…(2)

川柳塔（同人吟）……河内天笑選…(4)

自選集……奥田みつ子選…(51)

水煙抄……東野大八…(56)

麻生路郎物語(17)……波多野五楽庵選…(80)

愛染帖……政岡日枝子選…(83)

誹風柳多留二四篇研究　54……(86)

茴香の花……(88)

日だまり

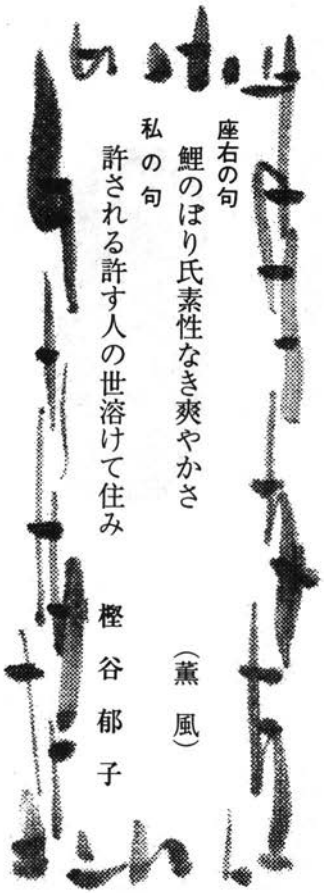
牛尾緑良

父を送ってから一年、母のひとり暮らしに不安があったが、スープの冷めない距離に迎えたこともあって、妻やヘルパーさんの支援で静かな日々を過ごすことが出来ています。何を語るでもなく横顔を見つめていると、その昔の良き日がよみがえってきます。

終戦で父がシベリアに抑留され、終戦直後から小学校の四年までを、私は島根県の母の実家で暮らしました。皆が貧しい時代でしたが、小学唱歌に唄われた「ふるさと」や「村まつり」に似た心豊かな時代でもありました。心の形成は幼年期に形成されるとは後年学んだことですが、何も無い中で「人間」に最も関心を持った時代でもあったと感じています。

小学校の一、二年を担当したS先生は母より少し若くて教育熱心、人気のある先生でした。教科書での勉強よりふんだんにある自然を相手にしたもので、鎮守の森も近くの小川も生きた教材になりました。二クラスで五十人程でしょうか、仲間にはお寺の息子、造り酒屋の息子、呉服店や写真館の娘といった坊ちゃ

「　正　」……村上信子選…(90)
一路集「けれども」……安達はじめ選…(90)
「　種　」……保田絹子選…(91)
初歩教室「休　み」……三宅保州…(92)
秀句鑑賞┌同人吟……久保正剣…(94)
　　└水煙抄……高田美代子…(96)
■エッセー　切れ字を使って詠む川柳……井上桂作…(97)
四月本社句会……(98)
各地柳壇（佳句地十選／山本半銭）……(102)
柳界展望……(117)
五月各地句会案内……(118)
■編集後記……楓楽・義子…(120)



座右の句

鯉のぼり氏素性なき爽やかさ　（薫　風）

私の句

許される許す人の世溶けて住み　樫谷郁子

んや嬢ちゃんもいましたが、大多数は制服も無く袖を鼻で光らせた、今では絶対に見られない光景がセピア色に浮かんできます。

そのS先生と連絡が取れたのは二十年程前のことでした。私が転校を重ねたこともあっていつしか交流も途絶えていましたがクラス会の話が縁でした。

先生との思い出に作文があります。当時の多くの人々のテーマであった抑留された父への作文コンクールに応募することになった時、何日も残って仕上げた記憶がありました。後日、文部省から賞状と万年筆が届きましたが、母の「大きくなるまでしまっておきます」とのひとことで、万年筆のゴムが痛むまで大切に保管されることになってしまいました。

先生からの手紙を読むと母は懐かしそうです。耳が遠くても五十年前の記憶は確かで、足を怪我したときは一時間も背負って学校へ通った話も出てきます。畳表を織っていた姿や石臼で米を挽くところ、藁葺き屋根、掘り火燵、石見神楽……母から浮かぶ故郷は遠くても鮮やかなものがあります。

日脚の伸びた居間の中には父の遺影。小さくなった母の静かな姿に幸せの行く末を垣間見たようで、安心したような少し寂しいようなひとときでした。

河内天笑選

踊り狂い木の葉はやがて地にかえる
石段の途中で空を見ぬことだ
大空を強い味方と思いたい
何が何でも染井吉野の彩が好き
ジャンケンをする顔みんな光っている
ごみの山急に鳴り出すオルゴール

米子市　澤田千春

介護日誌から時どき吐息洩れ
一つ生まれひとつ滅んでゆく輪廻
はなやかな虹とは少し距離をおく
愚かさに気付いた橋のど真ん中
幸せな別れもありぬ子の自立
カタカナ語消化吸収せぬ胃腸

吹田市　山本希久子

時々は団子買わずに花を買う
ダイヤモンド無駄の極みは美しい
目を入れて卑しい顔になるダルマ

橿原市　居谷真理子

寝ころんで時の過ぎゆく音を聴く
私の柩をかつぐ婿と飲む
やわらかく受話器を置いてもう逢わぬ

竹原市　小島蘭幸

結婚式の招待状が来た二月
出席にマル　ほのぼのとお茶を飲む
花嫁さんばかり想像して春よ
伯母さんの笑顔に続いてる絆
父よ母よ父よ母よと鐘が鳴る
先輩としての助言はありません

藤井寺市　鴨谷瑠美子

お花見の口約束は美しい
アーケード終る辺りに夜がある
掌の土鈴いくさ嫌いの音がする
わたしから愛想づかしの電話切る
日が少し長くなったな主婦の午後
竜宮へ行きそびれたる鯛を買い

阿弥陀くじ寄り道好きの僕に似る
揺さぶると隙ある音のする私
歩道橋渡る真下を霊柩車
カレンダー鶴首する日と消したい日
隙間家具そんな姿で輪に和み
神様に聞きたいことのあるみくじ

枚方市　海老池　洋

合掌の指が時々揃わない
横断歩道走らなくてもいいんだよ
孫の声聞けば女房よく弾む
迷い猫僕の心を嗅いでいる
棺の中自分の髭は剃られない
寝そびれし妻の身じろぎ蜿々と

広島県　福島万年

ぽかぽかと地蔵いねむりしてござる
かあさんの愛がうるさい変声期
気配りの過ぎる夫といて疲れ
裏切られてもこりぬ私はお人好し
楽しさは猫十匹と朝ごはん
ていねいな言葉で痛いとこを突く

藤井寺市　楠　昭子

前略ではじまり一句書いてある
リストラで裏を支える手が足りぬ
万札を崩すと泡のように消え

砂川市　大橋政良

街角の寸劇霊柩車が止まる
片隅でふと見た善意ほほえまし
天国もリストラ　ブーメランかえる

宝塚市　嵯峨根保子

やわらかい風ジーパンの曲線へ
感性はすべて花粉へ向くばかり
紳士から折目正しくチョコ返る
布施つつむ痛いけれども春の使者
草引きのシルバーさんは歳が上
嗚呼と言う男の弔辞美しい

鳥取県　新家完司

もう二度と聞けぬキンター！という呼名
いい話天眼鏡で覗き見る
犬も食わない猫も食わない口喧嘩
お互いにテレビの方を向いてメシ
春嵐などには負けぬ猫の恋
春一番ぼくの頭を掃除する

弘前市　高瀬霜石

いい眺め田んぼに水が張ってある
シャッターチャンス笑顔は長く続かない
二次会の途中でいなくなる紳士
空気ってこんなにうまい雨上がり
赤ちゃんがくれるちいさな南風
ああ不況社長の鼻が低くなる

竹原市　三宅不朽

子らと掌を重ねる父母の冬の墓
椿落つ安楽死など考える
おみくじの嘘ばっかりや不合格
ぴんと髭たてすらすらと碑の漢詩
親切でゆずった時間もて余す

竹原市　森井菁居

虚勢張り過ぎだと神に言われたり
川下る和船日本の春乗せて
わめいても介護保険の被保険者
だんだんと骨になる日が近くなる
孫が来る予感へチョコを買うて待つ

竹原市　時広一路

口はまだ満足しない腹八分
病名の数指折ってまだ元気
平凡に暮し百点など要らぬ
玉手箱開けても困らない髪だ
酔うほどに衣を脱いでゆく言葉

竹原市　正畑半覚

献身の妻にどう応えたものか
心安らぎこころときめく妻である
お茶をわかして妻が帰りを待っていた
妻の手をにぎらぬうちに月が出る
雲はるか終着駅のないふたり

竹原市　石原淑子

草むしり迷惑そうに出るカエル
初産の期待と不安春おぼろ
春の陽に愛を満たしてチューリップ
骨と皮おかげで病気寄りつかぬ
ああ眠い無呼吸症候群かもね

広島県　藤解静風

ささえあう人という字がくずれかけ
少年の瞳で降りてくる観覧車
心象風景いまも変らぬ古里よ
人間が住めば陋屋息をする
パソコンに置いてけぼりをくって老い

宇部市　平田実男

医療費が上がると患者減る不思議
加害者を弁護するのも民主主義
手八丁口八丁で筆不精
負けてよし勝てばなおよしタイガース
寿命より貯金の減って行く早さ

熊本市　永田俊子

プライドを捨てて気楽な竹とんぼ
うら表ない富士山の雪真白
幸か不幸か一喜一憂しなくなり
そうですかと受け流す平和主義
何もかもありがたい付録の人生

唐津市　久保正剣

足ることを知らず汚職の闇を這う
原発がくれた便利にある不安
言い足りぬままに別れて募る思慕
配給の時代を知らぬゴミ袋
年金で気兼なく買うたからくじ

唐津市　山口高明

日本の国技支える異人さん
犬猫を飼うて旅行も儘ならず
愛犬の老後頼むと遺言書
美人秘書侍らし面会謝絶とか
会長の庭の手入れに狩り出され

今治市　月原宵明

食べるのと見るのと角力忙しい
春風が好きと嫌いの杉花粉
友情にある日しんみり泣かされる
お隣も向いも布団叩く音
古寺に誰もくまないはね釣瓶

松山市　宮尾みのり

方丈の暮らしに合った羽根となる
交替の人事勝者の顔ばかり
正直な拳が汗をかいている
平穏無事誰も探しに来てくれぬ
捨てきれぬものに気付いた回り道

松山市　古手川光

やぶ椿ポトリと土に還る音
北国へ白鳥冬を連れて去に
撃ち合いは為政者だけでやって欲し
モラル無い親を映している鏡
バブルとは儚いものよシャボン玉

松山市　丹下美津子

ほどほどの酔いでサヨナラする勇気
まだ続きありそう友の愚痴を聞く
絵草紙を祖父こっそりと掘りコタツ
五十年今更短所突かれても
極楽か地獄か一歩出る度胸

松山市　高橋宏臣

再診のカルテに度胸決めて待ち
食べ残すくせ目移りのバイキング
追伸の小さな針が胸を刺す
攻めるだけ攻めてころりと妥協する
足元を見よと厳しい石の顔

愛媛県　中居善信

鍬の柄の使い慣れてる握り癖
深追いも脱線もして六十五
殺したいと思ったことは白昼夢
自爆テロよっぽど骨があるんだな
色あせた思い出だから取ってある

東かがわ市　清川玲子

無口の子クレヨン画ではクラス一
残すもの何にもないが子等やさし
全世界に届いて欲しいＮＯＷＡＲ
カラスにも生きる権利のゴミあさり
笛吹の上手な姑に踊らされ

東かがわ市　神保坊太郎

姑さんのほんとに上手い手前味噌
年金が通るだけです預金帳
政治家が持つ秘書という避雷針
虫さえも食わぬ野菜を食わされる
嘘吐けぬ鏡よお前白内障

東かがわ市　原賢

世渡りが下手で冷たい風に遭う
死神の死角で余命ながらえる
年金が背伸びをしたいときもある
ほどほどが好きな親父の無位無冠
背伸びして組んだローンが重すぎる

東かがわ市　伊勢八重子

顔見せぬ友に不安をつのらせる
下手な字が宝に見える子の手紙
不況風甘い言葉が寄って来る
躓いた時だけ電話掛けてくる
幸せに見せて心はホームレス

東かがわ市　成重放任

お好み焼き舞台に踊る花ガツオ
一本のうどんに秘めた職の技
欲得は言わない今日も職探し
優勝は運と技術をもち合せ
啓蟄に心の虫も動き出す

東かがわ市　川崎ひかり

私が美人に見えたら酔うている
合併で消える最後の住所書く
お多福はお多福なりの夢芝居
悔しさを今は我慢でいる拳
夫婦共コップに入れ歯つけている

高知県　赤川菊野

保育器のこぶし無限を抱いている
拉致家族日本の心とりもどし
日記帳好い事だけを書いとこう
独り居はなんにも秘めるものがない
上げる人ないのに今日も編んでいる

黒石市　相馬一花

平凡な顔を非凡にする黒子
素顔では気後れのする舞踏会
愛想よいレジにお客が殺到す
皺数を年輪という褒めことば
ご自慢の美肌もくすむ大都会

天からの春の便りの名残り雪
青い地球砲火の匂い漂わせ
北国も八十八夜春闌ける
木蓮の芽が射るように天を指す
スランプが徐々に薄れる春の森

弘前市　今　愁女

恍惚と流れ着きたい向う岸
鈍行で掴むいのちのリズム感
しのび寄るものに気付かぬ痴呆症
ペン軸の色にもあった好き嫌い
自適とは言えぬ定退後のくらし

弘前市　高橋岳水

あらそいも妥協も早い三兄弟
冬眠の蛙にすまぬ耕運機
風ばかり読んで娘が嫁き遅れ
妻の留守うっかり鍋を黒くする
東京に兄ちゃんがいるホームレス

弘前市　須郷井蛙

春一番爺も白髪をそよがして
雪溶けの水大童　おらが春
頑張らにゃ春は草木に恥をかく
補聴器にみんな集れ春の音
大地無言雪を下から溶かしてる

弘前市　蒔苗果林

喜寿過ぎて軋みがきつい肩と腰
孫と爺百円ショップへ誘い合い
純白の富士に心を洗う朝
霜の下菊の新芽が夢を呼ぶ
イラクから日本へも来る大津波

さいたま市　八田敏

カトレアの白祀られる一周忌
一周忌やさしい言葉有難い
まだ整理出来ぬ遺品に囲まれる
電球に腕届かずに切れたまま
弱点をさらけ輪の中　心地良い

横浜市　清水潮華

追伸へびっくりさせることを書き
はにかみのお辞儀を見せるランドセル
退院の妻を迎える花を活け
再職へ華やかな過去伏せておく
一呼吸おいた返事に策がある

横浜市　菊地政勝

東京でボツボツ戻る遊び癖
仮りの世を何処に住もうと私です
塔誌着き黙祷します訃報欄
ケイタイが脆い絆に力藉す
プリペイドカード都バスも乗り馴れる

東京都　岸野あやめ

東京都　後藤早智

約束の花見狂わす寒戻り
適齢期もう追い付けぬ子の歩幅
振り向いた素顔が少し他人めき
横波を受けて踏んばるヤジロベー
妻で母そしてまだまだ女です

東京都　播本充子

頂ける物があるなら御供する
やりましょう取って食われる訳じゃない
親展で届くとんでもない話
安眠の秘訣か布団乾燥機
どんじりが反省会を盛り上げる

静岡県　薗田獏沓

折合おう孤立無援が怖いから
爺ちゃんを何やかんやとあてにする
三月の風に花粉のマスク掛け
記念樹よ同窓生も大分減り
颯爽と朝青龍のお国入り

富山市　舟渡杏花

たわむれの媚薬おんなをもて余す
好きな男に似てるかれいの一夜干し
そんなこと照れずに答えられますか
しあわせを天中殺が裏返す
人並みにわたしも使うゴマすり器

富山市　島ひかる

争いが絶えぬ地球の地獄絵図
この山を越えねば明日は越えられぬ
夢売りに誘われ降りた無人駅
原石に泣いた昔をふと想う
激流を下った石と丸く生き

愛知県　早川盛夫

一雨が春をこんなに近くする
猫飼って寒さを凌ぐホームレス
ウソがあるから人間は面白い
牛丼と男どこまで安くなる
町内を仕切るこまめなスニーカー

京都市　高島啓子

風薫る夜の百足に刺されけり
新米のセールスが来る木の芽時
柳の芽縁切り寺のあたりにも
犬を飼う心得読んで諦める
八時間眠る男で頼りない

大阪市　西出楓楽

出血サービス返り血を浴びそうな
ボーッとしていい一日が少し欲し
転んだら蹴飛ばされると思うべし
年金が出てホテイチで買うおかず
春うらら言いたいことを引っ込める

大阪市　前　たもつ

梅桃桜　大阪城のフルコース
独り住む生家の老母に春が来る
最終の高小卒も古稀を過ぎ
書きにくい文字の一つにわが名前
ゆとりある人で時々隙見せる

大阪市　鶴田遠野

カタカナを睨みパソコン触れてみる
八方美人とうとう味方いなくなり
再診の連絡前に浴びる酒
大小の器も入社横並び
プチ整形で描く娘の肖像画

大阪市　川端一歩

献杯は君に貰った盃で
三度目の定年王手した気持
顔よりも後姿にある魅力
捨てたゴミ　ダイオキシンになって化け
勝負する前夜は軽い本がいい

大阪市　古今堂蕉子

楽しくて孫のくる日の長い首
怒れずにお腹の虫を寝かしつけ
ある暇とないお金とを編んでます
あの人はスペアー妻は私です
くぎ煮来る春告鳥の一羽です

大阪市　神夏磯典子

春盛ればみんな銘器に見えてくる
チューリップに腰の歪みを諭される
雑魚ばかり仲良く泳ぐ春の川
波高しすべておニューの始発駅
よそ事のように聞いてる核査察

大阪市　板東倫子

短足の子犬　毛糸の服着てる
孫よりも祖母はしゃいでる雛祭
うちの孫天才犬語がわかります
終章は呆けよう生き恥さらすとも
ブランドの名ならいやほど知っている

大阪市　川久保睦子

兄嫁に注文がある鬼千匹
好きな花手向ける姑の十三年
妖精を乗せて宇宙へシャボン玉
温い部屋藁人形は気を許す
ダイエットガラスの靴が履きたくて

大阪市　鈴木トヨ子

愛しいが抜かねばならぬ春の草
内裏びな禿げ傷のまま飾られる
坪庭も春陽さんさん浴びている
奥様の趣味世話焼きに大正琴
色恋は無しで相手の欲しい後家

女すぐ愛の深さを聞きたがり
母の知恵上手に火種ちらつかせ
うにイクラ海老蛸ダメと言う数字
年月や被告の髭も白くなり
目薬をさす時なぜか小指立て

大阪市　大川桃花

病む母にお粥炊いてる太い指
古希すぎて店に頑張る紺がすり
妻は留守メモとおでんが置いてある
混浴も遠慮を知らぬ歳になり
初恋の女と遍路に巡り合う

大阪市　奥村五月

夕やけのお山に寺はよく似合う
観覧車うなだれている寒の入り
ふり向くのもう止めにする転ぶから
踏まれても雑草春へ花芽抱く
綺麗でしょシクラメンから声かかる

大阪市　星野きらり

その花は見たこともなし芹を買う
要らぬのに頂くことになる戒名
息子等は小さい私に似ずに伸び
寄り添うて立雛最後まで二人
声帯の老化に抗しアイウエオ

大阪市　玉置英子

追伸が本文よりも身にこたえ
たてまえが座禅をくんで並んでる
雨や風言い訳にして手ぬきする
専用車もう用なしの顔をされ
丁寧な挨拶される選挙前

大阪市　熊代菜月

気休めで言った言葉が仇になり
春雪に思わず首を引っこめる
苛立ちを静めてくれる春の雨
頬杖をついても話まとまらず
逆風に気合を入れて一歩出る

大阪市　西川更紗

近道は遠くに替えて花疲れ
大男ミクロの花粉もてあまし
スイトピーさくらご一行様お着き
頭だけバリアフリーの伏せ屋なり
肩こりやアトピーいろいろ七重丸

大阪市　浦田綏子

生きる知恵自然の輪廻見て学ぶ
劣等感抜けぬ自分に鞭を入れ
強がりを裏から見ると震えてる
自転する地球に生きて自覚ない
浮き上り共感湧かぬ饒舌家

大阪市　岩崎公誠

大阪市　杉澤汀

逝く春に追いつきたくて駅に行く
いつからか席譲られる歳となる
撫子も薊もいます専用車
山茶花に晩婚の娘の幸想う
今はもう嫁からだけのチョコレート

大阪狭山市　矢野梓

志大きく持てぬ入社式
試験場に遅れる夢で目がさめる
肥えているだけで気楽と思われる
如才なく落度は年のせいにする
老姉妹同じ悩みで笑い合い

和泉市　中川楓

同窓会校歌違えぬ定年後
ブランドの服にもメイドインチャイナ
もう一つ地下に街あり迷い出る
花見する皆善人の顔をして
ＦＡＸが吐き出している娘の惚気

池田市　岡本吉太郎

散歩の時ふんだタンポポ咲いている
フセインよ己を押さえ世界平和に
我れ老いて油断ばかりの日日送る
石だらけの海岸テント張り寝し日
自画像をえがいて見れば良いとこなし

交野市　森本弘風

乱視かな妻が美人に見えてくる
統廃合預けた銀行何処やった
今日禁酒明日検査を受けるから
頑張って母をしてると娘のメール
独酌が淋しい性の七十歳

河内長野市　山岡冨美子

まだ愛の痛みを知らぬポップコーン
パソコンにお為ごかしを見抜かれる
春雷やどこへ向かうか株価欄
寿司ネタも土俵も既にグローバル
響き合う仲間の中にいる余生

河内長野市　加島由一

どんな夢みたのか妻が笑ってる
お母さん本からお札でてきたよ
不意打ちの親ぎょっとする娘の下宿
風向きを読んで結局動けない
カーナビも恋も未熟で遠まわり

河内長野市　村上直樹

砂塵舞う戦に欲しい削除キー
拉致や核　地獄の沙汰も金（キム）次第
逆さから絞ればひょいと知恵も湧き
島唄に酔ってとろりと昼寝する
不況風にも悠然と鯉のぼり

自転車で三人抜きをした昔
ママの分残してほしい食べ盛り
子子孫孫残す野山に苗木植え
しばらくは面白いから熱が入り
残さずに食べたお皿へシェフ感謝

岸和田市　原　苑子

菜の花の供華に安らぐ先祖様
掛声をかけて起き出す春の朝
他人事で済まぬ地下鉄火災事故
出揃った発芽愛しいチューリップ
大赤字リゾートパークが泣いている

岸和田市　井伊東吉

反骨もおとなしくなる骨粗鬆
地に足のつかぬ飛行機乗れません
蟷螂が手招きをする遍路みち
一円が溜ってはずむお賽銭
フラフープ鍛えた腰が笑いだす

岸和田市　木村正剛

さわやかに豆棋士の言う負けました
長生きの母は粗食のままがいい
古稀すぎて妻が敬語を使いだす
だからよせばよかった夫との旅行
順調なら次はわたし野辺送り

堺市　志田千代

小さな嘘心の隅でうずき出す
美辞麗句嘘もきれいに丸められ
出かかった愚痴飲みこんだ苦笑い
出来ますと啖呵を切ったからしんど
七十年運がよかったなと思う

堺市　宮本かりん

童心にかえり白酒雛あられ
白酒へ猫はくしゃみをして逃げる
天麩羅の揚り具合も春の彩
物忘れくらいおたおたするじゃない
しっかりと土俵を掴む足の指

堺市　山本半銭

歯並びを褒められ笑顔多くなり
スターの歯みな一様の美しさ
食いしばる歯があるうちは頑張れる
この歳になって歯磨き指導受け
花占いするよな恋はせずじまい

堺市　矢倉五月

些かの晩酌で今日満ちている
触るなと言える他人の吹出物
サンダルで失業保険いただきに
にんげんに般若心経空回り
単色の山に桃の木だけ唄い

堺市　和田つづや

堺市　齋藤　さくら

おっとりとしている友で癒される
赤いバラ一つふんわり咲いてくれ
政治家は金の成る木を追いかける
妻の愛押し付け気味な薬だな
おトイレへひっついてくる万歩計

堺市　西村　りつえ

店先に春いっぱいの花匂う
あざやかにバイオで咲いた花の艶
キナ臭い風向き嗅く山ざくら
残り火に春風入れる好奇心
猫かぶり時時爪も出る介護

堺市　河内　月子

そして春花嫁さんがやってくる
三月の満月春はもうそこに
花粉症雨降ってきてほっとする
陽の当る廊下で猫は眠りこけ
地下鉄に乗るとキョロキョロしてしまう

吹田市　大谷　篤子

ハーモニカ遠い記憶にたどりつく
雛の月久しく逢わぬ娘たち
雪の音池の緋鯉が聞いている
退屈な時間押し潰されそうだ
お話に入れてもらったうちの猫

吹田市　穴吹　尚士

次の世も添おうと妻にゴマをすり
手を挙げてダンプを止めた三輪車
お馴染に女将仄かな媚びを見せ
くどくどと昔の浮気責められる
アリバイにうるさい妻の取り調べ

高石市　浅野　房子

流れ弾に当らぬように生きている
効きすぎた薬今更吐き出せぬ
蕁麻疹の出る話ならお断り
蹴った石跳ねてわが身に落ちてくる
あの嘘を見抜けなかったのを悔いる

高槻市　乙倉　武史

タイミング逃し挨拶有耶無耶に
見様見真似男料理の春厨
土俵より先ず気がかりな客の入り
タイガース今年ゃ余裕で見られそう
忘れてた棚で芽を出すチューリップ

富田林市　中井　アキ

看取る日日仏と鬼のせめぎ合い
悠悠自適思いもかけぬ現在地
モノクロの恋のひとつに来る訃報
吹っ切って春の音符と踊り出す
有頂天の私へ飛んでくる矢弾

富田林市　藤田泰子

私に酷似していて愛せない
一枚ずつ日めくりを剥ぐ冬を剥ぐ
命綱風が吹く度揺れている
太陽の代りはできぬ乾燥機
究極は独りになった消去法

豊中市　吉田あずき

無責任なタクトへ右往左往する
蛹から蝶々神のジョークかも
健康のレシピレシピへ溺れそう
イカナゴに神戸の心意気をみる
魂のつっかい棒が老いてくる

豊中市　安藤寿美子

お賽銭一寸多いめの受験月
ばあちゃんはおろおろするしかすべがなし
思ったよりやわらかい手で握手され
桜開花地球の愛だなと思う
写経するいつしか心おだやかに

豊中市　山門タミ

弥陀と行く浄土に幸せ待っている
杖とられ今日から独り言い聞かせ
二人三脚結んだ紐が切れました
名残り雪梅は何度もくしゃみする
啓蟄だオタマジャクシもかえる頃

富田林市　片岡智恵子

陽が落ちて鬼も仏も眠くなり
不景気へ儲かる電話よくかかる
大岡に裁いてほしい昨日今日
諍いの時だけ別れたい夫婦
一等地都市に眠っている不況

富田林市　中崎深雪

やわらかい言葉やさしい心から
雨が降るごとにわくわくする緑
障害の子との明け暮れにも慣れる
神を信じていながらもなぜ戦
エアコンをつけては切って貧乏性

松原市　小池しげお

安物の筆しか置いてない事務所
太い字の辞書はやっぱり使いよい
結論を出さずに雨がやんでいる
堪忍袋忘れて歳やなと思う
自転車で通るなかなか建たぬ家

松原市　國見蘭香

気づかずにまた身勝手を許してる
一笑で消え去る話なら要らぬ
犬の目に癒されてます冬籠り
見上げたらとても乗れない観覧車
コーヒーとクリープ馴染むまで見てる

寝屋川市　堀江光子

どの枝も冬芽しっかり雪の下
白酒をとろりと注いで女の輪
目移りの雛に半日松屋町
流し雛今本流へ消えてゆく
身一つで暮す日日にも旬のもの

寝屋川市　籠島恵子

未年もう駆足になっている
面取りがまだまだ足りないな　わたし
ガタピシとやっているのに気付かない
外面の笑顔で隠すうちわもめ
苦手から逃げて苦手を抜け出せず

寝屋川市　江口度

病院の横に住んでて病気せず
背を向ける札束追わぬことにする
願いごとなるべく高い樹に吊す
北向き神社祈りを聞いてくれそうで
カタカナをひらがなにする春一番

寝屋川市　冨山ルイ子

弟と行く四国路は花ざかり
誰とでもお喋りしたくなるいい日
褒められた言葉素直にうれしがる
のりかけたおいしい話刺だらけ
やわらかいお手々やなんてくどかれる

寝屋川市　森茜

未体験ゾーンきらきらさせておく
春を待つうれしい雨にして伊勢路
きなくさいメールに隙を見せられぬ
仁王さんの後ろに冬が立ち止まる
ならず者国家と思いたくないが

羽曳野市　安芸田泰子

いそいそと出掛けぐったりして帰る
春一番花粉症という苛めっ子
譲られた席へ着ぶくれ遠慮がち
冬の日に追いかけられて万歩計
松手入れ居間に日差しを呼び戻す

羽曳野市　吉川寿美

世渡りの笑顔一つを持ち歩く
悔いも愛も曳きずり旅はまだ半ば
ポイ捨てのモラル落ちてる此処かしこ
泣きに来た娘に無い袖そっとふる
胸の奥まだ汚れない海を抱く

羽曳野市　徳山みつこ

元気です今年も味噌を仕込み終え
あれこれの末に母さんしたように
反戦の文字は読まないブッシュの眼
御破算で願いましては新年度
爽やかな風に会いたし鯉のぼり

羽曳野市　酒井一壺

見え透いた野心ちらつくプレゼント
私に似合わぬ場所が空いている
毒を持つ男と暮らし強くなり
毒を飲み薬も飲んで生きている
俎板の魚往生際を見せてくれ

羽曳野市　三好専平

カタカナ語増えて漢字が振ってある
キャッシュレスやはりなんだか味気ない
おばさんの笑顔を買いにゆくパン屋
神頼みしないと武蔵書きのこし
肩書を捨てた名刺が美しい

羽曳野市　川口信子

いのち燃ゆ老いと言う字を切り離す
誕生日せめてひとりの胸にバラ
胸の奥花が咲いたりしぼんだり
運命と気軽に言える他人ごと
かけ橋になってあげよういい話

東大阪市　北村賢子

やわらかい陽へ母あそばせる車椅子
枯れ草を分けて生まれてくるパワー
造られた笑顔で踊るチマチョゴリ
恋ごころ密かに抱いて知らんぷり
命日は粉雪の舞う雛まつり

東大阪市　安永春

過信した体力医者に諭される
母はまだ火種一つを秘めている
明快な答弁に座が盛り上がる
勝ち負けで人の評価はしてません
隅っこで仲間をふやす蟻でいる

東大阪市　笠井欣子

一寸した坂も気遣うフルムーン
だんだんと脳細胞が間延びする
いやなこと知らん顔して聞いている
ご主人を散歩さしてるブルドッグ
ジーパンの破れ気になる老婆心

東大阪市　谷口義

せいてせくことはなさそう遺言状
木の芽和えドルもユーロも縁がない
お幾つになられましたかお月様
友だちにうつしたらしい怠け癖
節電は考えてない熱帯魚

東大阪市　中岡妙

万歩計ちょっと足りずを振って足す
いつ行くも隣の仏花新しい
もっと減る予定にしてたローンです
さえずりについ道草をしてしまう
一筆に川柳添えて封をする

藤井寺市　中島志洋

あの人が歌うといつも座が白け
お爺さん昔話もほどほどに
包丁が欠伸している共稼ぎ
張り込んだ土産言い訳詰めてある
バイトした孫から嬉しプレゼント

藤井寺市　髙田美代子

歳やなあまた阿呆なことしてしもた
嫁に出し嫁を迎えてホッとする
イエローカード今日のわたしが解らない
春のゲームにすみれタンポポ咲き競い
どの人も自分を守るのに必死

藤井寺市　太田扶美代

気の弱い男で酔ったふりをする
モカ香るひとりぼっちもいいものだ
そろりそろり膝のあたりに冬がある
陽だまりの猫になるのも悪くない
酒の匂いがする四月のカレンダー

枚方市　寺川弘一

入院をするので家を大掃除
完全介護されてもやっぱり家がよい
わたくしも鬼になれますすぐにでも
人間も好きだがポチを愛してる
年相応の節度時々外してる

枚方市　安達忠央

解けぬ意地米寿のしゅうと古希の嫁
地球いま腫れものができうめいてる
恋文を紙切れなどと割り切れず
隙見せて付き合える友二三人
お茶するときも老僧すきみせず

箕面市　出口セツ子

気づかないふりして核心避けている
難しい適度親子の車間距離
義務感か愛か疲れてくる仮面
送信ができず溜まって行くメール
肝心なことは何にも言えぬ舌

箕面市　岩津ようじ

骨のない魚子供によろこばれ
骨のない首相ブッシュによろこばれ
一升の下剤を飲ます癌検査
霊柩車の前を横切る救急車
病院の夜の窓から見てる娑婆

八尾市　生嶋ますみ

ワコールの売場へ足が遠のいて
病む身でも爪は勢いよく伸びる
煮つまった昨日のおでんも食べ余す
落選の顔いつまでも曝されて
スキップで花の便りがやって来た

八尾市　山本宏至

盛り付けで百円の皿生きてくる
詰め込んだ非常袋が重すぎる
気楽さがたまりすぎたか皮下脂肪
忘れること知ってゆとりが出はじめる
頭打ち木っ端微塵の自尊心

八尾市　宮西弥生

元も子もなくす危ない橋避ける
見返りを望まぬ愛でまだ他人
独身の夢見つづける花の下
爛漫の春と遊んでいる孤独
人生のおまけを生きる低い腰

八尾市　宮崎シマ子

道草の二人が消えたウッフッフ
花エプロンで夫手伝う台所
子は出さぬもしも戦になったとて
美辞麗句の音は何とも耳ざわり
花を探して森の虜になったらし

八尾市　内海幸生

黒猫の倖せすぎる夢二の絵
野の花に唆かされるカメラアイ
求められ一言言っただけなのに
そやさかい黙っていたのに怒るなよ
運がいいだけだと言われているらしい

八尾市　髙杉千歩

昭和の知恵へ大正出しゃばらず
家中をアトリエにして立ち直る
スケッチを待ってくれないチューリップ
豊かさを錯覚してる春の鬱
仏さんの灯りをつけてちょっと留守

八尾市　神原まさと

大の字に寝て満足のマイホーム
大仏のあぐらの中にある宇宙
騒がれて秘書は自白を覚悟する
胡坐かく鼻正座さす美容外科
流感が恐くて医者に通えない

八尾市　井尻民

ぽっくりと逝きたいための万歩計
生きている証拠と思う物忘れ
嫁入りブトン捨てて押入れダイエット
コスモスに嫉妬の炎まんじゅしゃげ
白い歯で心おきなく吐く本音

八尾市　村上ミツ子

幸せな友から元気もらってる
ジャンケンホイ後からだして負けている
逆転の発想霧が晴れてくる
命令は通用しない娘です
守らねばならぬ娘がいてがんばれる

大阪府　籾山隆盛

憂き世には帰りたくない花の下
見守っている仏さん裏切れぬ
嫁ぐ娘の馴れ初め知った披露宴
一卵性姉妹の好みちがう恋
太極拳大気の中を泳いでる

大阪府　米澤俶子

寝る前の明日へネジを巻く日記
横着に即席うどん力貸す
母さんに抱かれたような沈丁花
みのもんた主婦総なめの昼さがり
菜の花に料理の皿も衣替え

生駒市　飛永ふりこ

小雪降る梅の小枝が首竦め
竹踏みをすると張る好奇心
同情の言葉の裏が肌寒い
打たれても笑い飛ばすが肩は凝る
春が来た合鴨親子ハモッてる

香芝市　大内朝子

初恋のひとに逢いたい春の風
トンネルを抜けた笑顔で友と会う
意地悪をしはる心が寒むそうや
ふる里を捨てた六十路にある訛り
恋多き女が覗く万華鏡

橿原市　安土理恵

酔い醒めの水を頼んで縮こまる
他人の眼になって眺めるわが夫
人形を育てる老母の子守歌
口紅水仙初めて化粧した少女
あっさりと別れ話を決めた嘘

奈良市　米田恭昌

回り道人間大きくなってくる
事故現場他人の不幸覗いてる
自信などないがとマイク放さない
カラオケの狂った節も御愛嬌
あこがれの君の歯ぎしり聞く夜寒

奈良県　渡辺富子

スニーカーへ春の音符が弾み出す
菜の花の海で溺れているふたり
紅一点主役のチャンスかも知れぬ
節くれた妻の指にもある野望
薬みなやめて調子のよい体

尼崎市　春城武庫坊

癌と闘い四つに組んで寄り切られ
あまえたで父母のもとへと急ぎ行く
寿命にも運不運あり春余寒
一ト月前の花見の話闇に消え
お四国さんを宙から詣れ弟よ

なんでなんでと弟の死を受け兼ねて
茫然としばし阿呆になりました
生きている者の都合で事運ぶ
許されよ夫婦の義務と情けなど
仏壇の引き取り手なし家絶える

尼崎市　春城年代

駅裏にムッシュと呼ばすヘアサロン
ひとまずは同感ですと逃げておく
真っ先の楯にされてるのは弱者
無味無臭そんな男はつまらない
宅配でくぎ煮が届く春の使者

尼崎市　山田耕治

時々は昭和になおしかぞえてる
凶引いて顔見合わせている二人
時刻む音が聞えるほど無口
わら葺きに赤い車が止めてある
昼休み受付嬢の笑顔よし

尼崎市　田辺鹿太

百歳の表彰台は無理みたい
街に出て時間の浪費でもするか
舶来のセカンドバッグから春に
雑草といえど美学を心得る
熟年に警備の職は寒すぎる

尼崎市　林昭三

銀行と言えば信用してました
親娘ほど違う婦警に搾られる
良縁の親の思いがパスされる
公園に犬が読めない札を立て
春一番暦一枚めくり去る

川西市　西内朋月

しんしんと雪の降る夜は熱燗で
致死量にまだならないと吸う煙草
捨てられず納戸に残る夫婦雛
込んできてなじみの客はほっとかれ
手を抜いた風呂場のタイルかびが増え

三田市　久保田千代

寒中にこんな好い日もある散歩
無駄をそぎ落した後の美しさ
いやな日だシャープの芯がよく折れる
パソコンでペンだこぐっと優しなり
再会を信じて熱いさようなら

三田市　北野哲男

正一位お稲荷さんの位でしょ
寄り道は大将になる屋台店
増税の度にタバコを止めている
子の球根家より大きい花が咲き
合い鍵を土産袋と取りかえる

西宮市　山本義子

ひと頃は手々噛む鰯とれた浜
無人駅まんざらでない風淡し
少々の敵ござろうとまた楽し
隅っこにいるから見える面白さ
都会にも過疎はあります老所帯

西宮市　門谷たず子

来年のことは思わず花を活け
ニュージーランドの毛布ふわりと子のぬくみ
人指したおぼえはないが指痛む
やさしさの仮面だんだん重くなる
所詮おわりはひとりと思うめし茶碗

西宮市　牧渕富喜子

陽の光り内に蠢めくものがある
まる文字に箍はがされるオットット
春になるはげしさで降る杉花粉
なんでだろう不幸に見えているらしい
目立たない人に思わぬいぶし銀

西宮市　長谷川淳

灘に住み京の酒呑むご免やす
若き日の春愁巡り桜咲く
紙芝居テレビに食われ五十年
遺伝子が親の癖まで継いでいる
きのう今日アクシデントにハプニング

西宮市　西口いわゑ

浮世かな思わぬ人に助けられ
一枚のビラ女心を突いてくる
ゆとりなど無いが大きな愛といる
代議士に秘書という名の隠れ蓑
窓越しに花の笑顔を見て飽かず

和歌山市　牛尾緑良

母の背　春一歩ずつ押してくる
封切ればクラス写真の多言症
サクラサクお祝い持って来いという
振り向いてもいいよ私のためになら
戦争前夜良くない夢を見たようだ

和歌山市　福本英子

鳶が舞う空がとてつもなく広い
わたしでも暗証番号持ち歩く
二月堂一度浴びたいお松明
モンゴルのやる気が欲しいチャンコ鍋
西大寺ほどよく茹だる男たち

和歌山市　西山幸

自分とのいくさの昨日きょう明日
螺子を巻く萎えたこころの螺子を巻く
塩砂糖控え目にする終の章
誤解から始まる劇のおもしろさ
どの顔も亡母に似てきた三面鏡

和歌山市　松原寿子

心ゆたかに春の教室から挑む
葛藤のあるてのひらでしかと生く
味付けをされて没句が生き還る
さくら彩に溶くパレットへ夢を盛る
開け放つ胸から本音零れ出る

和歌山市　桜井千秀

ホテルのロビー紳士淑女のすまし顔
新緑の山で若さを呼び戻す
決められたハードルわたしには苛酷
小雨しょぼしょぼ日がな一日テレビ漬け
非の打ちどころ探せばあるよ何方にも

和歌山市　木本朱夏

ロザリオをまさぐる指に春浅し
転た寝の夢がころがる春のソファー
待ち侘びた春に冷たくされている
病院の椅子で行く末思うなり
春風に委せて生きる考えぬ

和歌山市　福井桂香

沖に出て連れ戻される雛流し
未練まだ断ち切れないか黄砂降る
切り干大根むかしは白い肌でした
笑い皺おんなの勲章かもしれぬ
ときどきは行方不明の語彙捜し

和歌山市　古久保和子

パックから皿に移しただけのこと
キュッキュッキュこけしの首も凝っている
若いっていいな言葉を選ばない
レコード盤の小さなキズもブラームス
夫以外の男とならば洋画館

和歌山市　楠見章子

澄んだ空見せてあげよう雛納め
乗り越えたらしい声にも張りがある
踊り子の指を流れてくる音譜
着飾ってみても愛想のない鏡
春のうつ紛らす旅の紙コップ

和歌山市　山口三千子

悟らねばあなたの策に嵌められる
腹の虫抑えコメント避けている
手鏡に心の鬼が顔を出す
黄昏れて体の箍が緩みだす
相棒と言えど許せぬ事もある

和歌山市　田中みね

疎まれているとは知らぬ減らず口
口うるさいがボクに大事な妻である
身勝手な電話を聞いた不整脈
川柳塔届くたんびに会う訃報
虐待のニュース痛まし辛すぎる

和歌山市　吉村さち子

和解して明るくなったカレンダー
壁に吊る明日約束の一張羅
タイトルに魅せられ春の紀ノ国屋
弾む毬弾まぬ毬もいて仲間
手を合わす家族が揃う春彼岸

和歌山市　武本碧

大欲は捨てて幸せ釣り上げる
願わくば賞罰なしの人生譜
こだわりを千六本に切り刻む
利き酒へ自慢の舌が主張する
春霞金子みすゞとげんげ畑

海南市　三宅保州

髭を剃るそれが男というものさ
死ぬことはないのにと言う外野席
仏さまに足向けて寝る四畳半
ダンスでもいたしませんか仁王様
タレントの名前を思い出しゲーム

海南市　谷口義男

血の絆遺産絡んで縺れ出す
煽てられる間は何処か役に立つ
器量良いけれど見識高過ぎる
少子化で町内子供の声まばら
言い訳はしない自分が蒔いた種

和歌山県　中後清史

母ちゃんとおててを繋ぐ五月晴れ
人並に生きる航路の波高し
寅さんのような気分になりたいね
素うどんで昼をすませる二日酔い
よく通じ合う同病の語り合い

鳥取市　武田帆雀

波風は立てぬ主義ですお静かに
留守電にして達磨絵を書く日なり
ほろ酔いの具合がちょうどよい機械
灰皿を洗い初心を整理する
あの娘よりこの娘の方がおもしろい

鳥取市　録沢風花

夫逝って空しい風の中に住む（急逝の夫を送って）
娘の言うがままに動いて葬終る
身辺を突如狂わす乱気流
ひとり哭きひとり笑って月おぼろ
刻というくすりに頼り経を読む

鳥取市　冨山檳榔樹

無理ばかり重ねせかせか生きている
空想がヒントを生んで特許取る
足老化飾ったままの万歩計
こだわりは捨てよと川に諭される
ぬかるみできれいな虹の夢を抱く

結び目が緩んですきま風が吹く
年金のダムが底つく奇数月
愛あれば料理も愛の味になる
色々な夢も御破算古稀の坂
卒園式先生だけが泣いている

鳥取市　岸本孝子

言い訳も三回目には無視される
欠点を除けば長所まで消える
金もないけれど買いたい物もない
気前よい軽い返事が頼りない
手術医が算盤持てば怖かろう

鳥取市　岸本宏章

僕たちに地上の星の応援歌
活入れるラッパは先に吹いておく
就職に仕事選んでいられない
マスターキー　性善説の上に立つ
揚げ足を取られることに気を遣う

鳥取市　福永ひかり

平和するうれし涙の真珠湾
誰ひとり振り向く人のない異国
小鋏のひとつ出国許可の乱
コバルトの海に浸してきた五体
あれ以来辞書を疑うようになり

鳥取市　徳田ひろこ

説法もオモロイ話なら聞くか
心から喜ぶ人へ福が来る
目標はめっちゃ楽しいものにする
悪いとこ含め自分を好きになる
時々は流れのままに流される

鳥取市　春木圭一郎

喜寿の坂タイムトンネルくぐらせる
食糧難蛙や蛇に世話になり
サーベルを下げて徴用免れた
ピカドンが落としてくれた目の鱗
角帽が思い出させる寮のスト

鳥取市　西村黙光

電子辞書気前よく買う税戻り
クイズ出す五年も前の歳を書き
病院の廊下モップといつも会う
食事にも寝るにも飽きて退院す
駅前のティッシュへどうもだけは言う

鳥取市　有沢せつ子

アンテナに噂ばなしがひっかかり
旅に出る何か聞こえて来るようで
豪快なジョークで本音まるめられ
生きてゆく砂のトンネル掘りながら
裏腹の握手笑顔が出て来ない

鳥取市　倉益一瑤

合掌の形で草の芽はのびる
ご近所も呼び賑やかに雛まつり
どんぐりが並んで会が面白い
しばらくは憂さを忘れて花の春
アイラブユー記念日の今日いま一度

鳥取市　植田一京

一番で卒業したが職がない
北の国　求心力が恐ろしい
ガン告知まだ生きたいと飯を食う
メリハリがない国会にグロッキー
春の乱生活レベル切り下げる

鳥取市　中村金祥

白髪へお若いなんておだて過ぎ
やっと喜寿呆けが静かに忍び寄る
流行が一巡する日待つ筆筒
二病息災薬でのばす生命線
回り道無用の用を身につける

鳥取市　美田旋風

飯三度食う幸せに気づかない
食べている時は悩みのない顔だ
蟻の列食いっぱぐれは無いだろう
手術医のぼんやりガーゼ胃に残す
きまぐれな暖と寒とが舞う舞台

倉吉市　最上和枝

包丁を研いで大根ためし切り
思うことあって剃髪したらしい
渡米した夫畳を恋しがり
一工夫したら形になってきた
辛酸をなめた男で味がある

倉吉市　米田幸子

川柳の五十五年をふりかえる
編集の経歴若い日々である
八十の俺カラオケで恋の唄
AM10孤老に朝の食事どき
あと十年生きるつもりのマネープラン

米子市　本吉宗光

楼蘭の壁画が夢をかきたてる
芽を出せと雨がやさしくふりかかる
徳利もいらなくなった夫の老い
イヌフグリ空地も春の彩になり
おいしいパン聞いて郊外まで走り

米子市　青戸田鶴

お隣の蕾がのびて気にかかる
明るい春が落ちてきそうで手をひろげ
広びろと菜畑あかりなどいらぬ
雑草を抜いて自然に敵わない
やまい癒え自慢ばなしになってゆく

米子市　白根ふみ

米子市　木村冨美子

かすむ窓その日その日を拭いて生き
ばあちゃんの童話が夢で空をとぶ
熱くなりハリーポッター五冊読む
迷い橋だれもが泣いた道だろう
あと少し残った橋だ油断せぬ

米子市　林瑞枝

大山の霊気が罪を拭き清め
若き日の母は小町で孫も美女
青蛙いつか天女にプロポーズ
行き摺りの縁に守られ生きて来た
笑いころげて恋は手の平往来する

米子市　光井玲子

いい知らせ胸が小躍りしてやまぬ
計り知れない孫たちの未来地図
あの空の続きに戦火絶え間ない
この先の憂いがだんだん強くなる
留守しても庭の草花うたっている

米子市　野坂なみ

アメリカの驕り過熱は許されぬ
淡々と空のこころを彫っている
リオのカーニバル二人の旅を夢見てた
花々に囲まれ私も花になる（誕生日）
古時計気ままに生きていいのだよ

鳥取県　原みさを

世渡りのノーにこれだけ汗がいる
後出しのジャンケンポンで世を渡る
大国へ風の流れを読んでいる
消費税観測気球に風がある
テレビ欄今日の予定を狂わせる

鳥取県　佐伯やえ

無人駅夢のつづきを見におりる
もぐらよ生きていたかわたしも生きてるぞ
ジンバソが採れて豊かな里の海（ジンバソ＝海草の名）
ゆがんでも手書きの文は温かい
欲ばらず人間らしく終わりたい

鳥取県　石谷美恵子

ひな壇がひと間乗っとり賑やかい
聞いているポーズで眠るのがうまい
幸せとはこんなもんかと湯にのぼせ
もう一度見直す家の無駄遣い
荷崩れのままで我慢の夫婦坂

鳥取県　石尾かつ乃

思い出を五月の風にふくらます
打ち明けて胸すっきりと発車ベル
よろこびを内緒にしたい温めたい
シベリヤの話時々聞かされる
原点に戻り余生を楽に生き

春らしく玄関飾る桃の花
水仙が並んで姑の忌が巡る
激流へ踊って消えた流し雛
獣性を研ぐかのように蟹捌く
正午から五時へ居眠りばかりする

鳥取県　西原艶子

梨の芽が春の陽気に衣脱ぐ
胃が無くも故郷四季の味恋し
人間の軽さ知らせた札の束
亡父の歳十年越した私の幸
大根が甘味を増やす雪の下

鳥取県　平井栄翁

生年月日しっかり言える父が居る
初節句曽孫を抱きに宮崎へ
わくわくが止まらず買った輪島塗り
ケイタイを睨み吉報読んでいる
菜の花がきれいハミングしたくなる

鳥取県　田村きみ子

忘れ去ることもできずに溜まるウツ
七色の人生今は黄あたり
人間らしく生きる自問がまだ続く
気配りが効いた女将の花一輪
家計簿はぴったり余る金がない

鳥取県　小谷孝美

霰降り花輪をたたくおとむらい
音もなく牡丹雪舞う一人酒
不況知らずに県債が売り切れる
ボランティアの教室開きまだ二年（川柳教室）
教室は明治大正揃い踏み

鳥取県　上田俊路

濃淡の芽吹きを抱いて山笑う
そこはかの憂い漂う春の川
造成地杭半ば朽ち蕗の薹
お八つ絶つことから始むダイエット
北朝鮮もイラクも平和欲しかろに

鳥取県　林露杖

水一杯はやる心をしずめさせ
親切を貰った昔綴じている
書く文字も大きくなってゆく老化
障子から目覚めの刻を知らされる
後ろから黒い雪雲追ってくる

鳥取県　鳥羽玲子

赤飯がうれしさ更に盛りあげる
前向きに生きれば音もまだ出せる
弱音など吐かず余生をふくらます
まあまあと一杯ついで愚痴も聞く
老眼鏡かけて楽しみ追っている

鳥取県　鳥羽直市

泥濘に弁当落とすそんな国
知人逝くガンを恨んだ顔のまま
テポドンや日本海の波高し
その時は妻も娘もテロリスト
腹時計ぼくの確かな時刻表

鳥取県　谷口次男

春が来て集中力も散漫に
飲んで食うだけの楽しみ老友会
小銭ですむ慰安旅行について行く
軍艦マーチ　テロ宣伝をする車
エックスを一杯持ったボラの群

鳥取県　土橋睦子

孫二歳声で止まらず追いつけず
段違いと言われ姉とは写らない
何道も極意もたぬが評論家
残高は極々僅かまあいいさ
もったいないもったいないと食べすぎる

鳥取県　垰寛子

四国路へ渡る景観瀬戸の橋
梵鐘に暮れる長閑な花の寺
遍路笠桜吹雪を背に貰う
補聴器が春の足音つれてくる
歩み寄る心やさしい風が吹く

出雲市　小白金房子

気負わずにさくらに逢える花暦
聞く耳を持たないと言う梅雨の欝
空と海碧さを競うエンドレス
誘惑に甘んじている風媒花
弾まない毬も私も陽に翳す

出雲市　園山多賀子

今日満願大きな声で経を読む
満願の佳き日に匂う桃の花
こころの目ひらき善人美しい
少しずつブレーキしめて坂下りる
寒大根せっせと吊って食べている

出雲市　吉岡きみえ

二人とも善人なのに気が合わぬ
小春日に心の爪も切りました
あの星へ届くつもりの豆の蔓
どの豆も欲しくて鳩の目が動く
朝がたの夢にはっきり亡夫の声

出雲市　青山久子

祭壇を前に絆を確かめる
また一つ楔が欠けて軋みだす
悲しめぬうちに葬儀の二三日
内壁が一つ乾いた音で落ち
歳月が他人行儀にさせる里

出雲市　竹治ちかし

出雲市　佐藤治代

アルバムの中に桜もばらも咲く
仕合わせの真ん中に立つ太い足
おいしいと喜ぶ顔へ立つ厨
猿芸に劣る夫婦の独楽まわし
脹れっ面みっともないと言う鏡

出雲市　城多喜

寒風に晒すわたしの丸い顔
咳一つ部屋にこもってひとりぼち
おいでって目で言ったのに逃げた猫
愛情をかけると踊り出す豆腐
ドクターに頭の中を見てもらう

出雲市　岸桂子

母逝って経を詠むのがうまくなる
私を一番知っている他人
知らぬふりしてくれていてありがたい
礼儀正しい人と一日いて疲れ
神さまに時々嘘をついている

松江市　銭山昌枝

いいとこが誰にもあって人が好き
辻褄を合わすわたしの棚下ろし
包丁の収集癖が直らない
百均で家中飾る安普請
夜行性の妻だが朝もちゃんと起き

松江市　川本畔

流せない葦一本に夕暮れる
ストーブが燃えて背中を急っつつく
虹の橋逢いたい人の住む辺り
プイプイと電車が捨てていくお家
風の音本気になれと言うことか

松江市　佐野木みえ

売り言葉買ってストレスなくなった
わだかまり解けてあの山青く見え
贈る言葉じんと心にしみこんだ
娘の誘い都大路を歩いてる
沈丁花咲いて一枝仏前に

島根県　森茂美

水量はたっぷりあるよ雪解川
年度末やっぱり道路掘っている
禁煙の文字がけむたい休憩所
妻入院孫にも電話しておこう
残雪が今朝も輝く山の襞

島根県　多々納テル子

手抜きして西へ東へ毬はずむ
湯が沸いてテーブルにみな寄って来る
霜やけが治って春が笑ってる
もういいかい風に目覚めた猫柳
丈ほどの力漲る福寿草

手も足も動く幸せ豆を煮る
母老いて寺へ行く日が繁くなる
病む夫にわたしの長湯覗かれる
病夫のメモ見ながら春の種を蒔く
のっぴきならぬ話を聞いたさくらもち

島根県　伊藤寿美

まだ弾む毬が心の隅にある
トンカツの文字にひかれる空きっ腹
検査室私を脅す不整脈
それからは菜食主義の片手鍋
早起きは美徳信じている手足

倉敷市　井上富子

土壁と草葺き屋根と四季日本
墨糸のゆがむ話が耳底に
切れ味が自慢の天下砥石研ぐ
家を建てたりするものでない槍鉋
子弟子孫弟子みんな可愛い形見分け

岡山県　小林妻子

明日よりも今を大事に生きている
五十年二人三脚うまくなる
合掌の指の先から欲こぼれ
はきなれた靴が明日を向いている
恋の詩詠んで若さを失なわず

岡山県　大石　あすなろ

花吹雪かわの流れに身を委ね
散歩みちお地蔵さんの歳を聞く
メイクした野ぼとけ亡母のように見え
筋通す議員だ何か裏がある

竹原市　古谷節夫

花粉症猫ももらって帰るなり
三月の雪よロマンが生まれそう
春の靴宝くじでも買いに行こ
均一セールさあ春ですよ春ですよ

竹原市　岩本笑子

あんな日もあったと思うしだれ梅
梅林のロングコートが邪魔になる
懐しい行進曲の幼稚園
野良猫の天国浜は四温なり

広島市　森田文

謎解きが下手で仮面が外せない
煩悩を断てばシナリオ変わるかな
鏡拭いて見ても真実には遠い
卑怯だが三猿主義に徹し切り

美祢市　安平次弘道

あざらしが住民登録する平和
手を焼いた卒業生に拍手する
物わかりが良いとは妻のことらしい
正装で見栄張りに行くクラス会

唐津市　樋口輝夫

喉までの言葉夫に先越され
安全を保証している虫食い菜
六度目の干支で生き方分かりかけ
お昼寝も日課に入る老いの旅

唐津市　市丸晴翠

有難うとことんついて来る女房
大丈夫酒もタバコもまだ旨い
パソコンに振りまわされて減る思考
ワークシェア傘寿を越えた夫婦仲

唐津市　井上勝視

薬より野菜が効くと言うお医者
遺伝子のおかげであなた美人なの
何万円の竿で釣るのは雑魚ばかり
氷川きよし見る時母の瞳が生きる

唐津市　宗水笑

師を見舞い過去振り返る帰途の道
デフレ服外出着にも散歩にも
柳友の情報知れる美容院
蘭七本立って福神ふと思う

熊本県　岩切康子

諍って出て来た散歩吠えられる
温い雨春は忘れていなかった
風邪ひくなひくなと主治医口癖に
ときどきは妻に白旗上げてやる

熊本県　高野宵草

生涯を詰めて我が城四畳半
卒寿越え城に籠る日多くなる
サークルの教え楽しい頒布会
妹の車で楽しい墓参り

高知市　北川竹萌

もう何もないとポケット開けて見せ
余命期限の自己更新を
不思議にも腹立つことが消えている
古稀までの遠い私を振り返る

高知県　小澤幸泉

定退に会長席をあけておく
若い医師老いの悩みに遠すぎる
七曜の折り目うすれてゆく無職
群れの輪を出ると他愛のない無力

香川県　瀧井勝

朝食を残さぬ老母にほっとする
ドラマ観て涙を流すのは夫
タクアンをぽりぽり妻はまだ元気
タイガースの元気もらってパパ元気

香川県　池内かおり

コンビニの骨抜き魚喜ばれ
鈍行でのんびりと行く古希の旅
若い娘にミニもロングも良く似合い
冗談を本気にしてるお人好し

十和田市　阿部進

輪の中で虚勢を張って生き延びる
人脈の尻尾で吠えている野心
口コミで並んだ角のラーメン屋
会計が済むまで酔えぬ幹事です

弘前市　福士慕情

ヨーグルト手作り味に魅了する
桜さくらおんなヘピント若返る
ウグイスの花見や恋か透る声
道連れの山門に聴く浄土みち

弘前市　岡本花匠

浄土門開いてもらう般若経
老人のプライド守る磨き砂
人間の価値観削るスキャンダル
夢幻なり散骨の海ギラギラと

弘前市　一戸ツネ

八戸に惨い仕打ちのある山背
凶作は語るに耐えぬほど惨い
えんぶりが来ると春になる八戸
大燎豊作願う摺り熱く大燎（にわび）

弘前市　櫻庭順風

伏線を読めず未来が遠ざかる
選挙戦ひとつの椅子に割れる村
経験の深さ買われるスケジュール
発端はガラスコップの中の乱

弘前市　相馬銀波

樹々はもう芽吹く形を整える
内裏雛と白酒交わし季を送る
飛ばされぬように深めの春帽子
きらきらと春の小川はみな許す

弘前市　宮崎ヒサ子

この一瞬確かに生きている尿だ
北国の梅は恥じらうように咲く
何となく妻の手を取るさくら道
世去れ節りんごの花がそっと散る

青森県　西谷大吾

あきらめた涙が赤いリトマス紙
熱燗の底には愚痴を詰め替える
変身の過去には触れてならぬ傷
明日もまた重荷を担ぐ蟻でいる

青森県　小寺花峯

大脳を空っぽにする花日和
忘れましょあなたに愚痴は似合わない
性格の違う伴侶に学ぶ術
悠長な答えに眉間いらつかせ

横浜市　保田絹子

招んどいて手に温りがない料理
ビー玉で試す手抜きの安普請
一食を抜いて変りのない肥満
検診に行く度増えてゆく薬

横浜市　小野句多留

富士宮市　渥美弘秀

ヘルシーな料理メモする老妻弾む
ふみはずす階段夢は遠く逃げ
わだかまりなく返事するペンネーム
極楽へ行く点数が未だ足らぬ

静岡市　安本晃授

春風に老いも浮きたつ花祭り
生き甲斐のための力は惜しまない
古傷をかばうと未練追ってくる
広場では自由に乗れる無免許車

滋賀県　中宗明

町中に求人ビラの夢を見る
最高のパートナー得て奮起する
古希迎え苦楽体験自分史に
神前に何を祈るかもみじの手

亀岡市　井上森生

炎には勇気も慈悲も二月堂
早春賦奏でる保津川川下り
真面目にも二つ　真剣と深刻と
ＩＴが過ぎて携帯電話(ケイタイ)が金一円

京都市　都倉求芽

盛り場の過激な明かり闇を産む
合併は麻薬　町も銀行も
一度見てみたい防犯カメラの中の僕
回りすぎる舌で慰めにはならぬ

京都府　稲葉冬葉

一端の親になるのも難しい
二番煎じを笑ってはなりませぬ
三度目は恐いと知っている躾
六道の世界は知らぬともこの世

京都府　丹後屋肇

目と鼻の爛れる春がやってくる
荒天にアーチをかけるレインボー
ストレスが溶ける詩吟の薬効果
母の日を豪華に飾るかすみ草

大阪市　川原章久

物買える金が無いのが淋しいね
綾取りの糸を渡って今傘寿
面接は大事な髭を剃って行く
尻から火追うて会社の人減らし

大阪市　伊藤博仁

おこぼれを狙う烏が輪の外に
人の事だから歪みもよく見える
選良は居眠り付きの五日制
二階から見下ろされてる天保山

大阪市　寺井東雲

折角だから命大事に生きている
筋書きのないドラマ始まる甲子園
誕生日御祝孫は後恐い
妻の顔誰とも比較せんことに

大阪市　榎本舞夢

差上げる人もないのに買ったチョコ
めがね買い整形した気で歩いてる
脳味噌が錆びつき人の倍かかる
雨の日は楽しみ方を替えて見る

大阪市　中澤伽羅

助っ人が無いと出来ないことが増え
先送りしてきた事に追われてる
ツーショット撮ってもらってからの友
縁談も彼氏もいらん臆かじる

大阪市　榎本日の出

バラの花浮かべてひとり浮世風呂
見馴れたらがらくたとても愛おしい
割れていい少々飽きのきた茶碗
軍隊の元気な姿飢餓の国

大阪市　津守なぎさ

少年は鋭い刃物持っていた
よくもまあ巨乳集めた週刊誌
一年生もう親ばなれはじまった
梯子酒してきた分をよう眠り

大阪市　津守柳伸

オペ予感コーヒゆっくり立てている
ピーナッツポリポリ氷雨降り止まず
蕗の薹　探す岬もアスファルト
過ちは二度繰り返さない自衛

大阪市　松尾柳右子

神様におまかせしてる余生です
ただいまに飛んで来るのはポチだけだ
形変え山に寄りそう白い雲
駐輪場我が自転車はどこだった

大阪市　町田達子

命日の墓参墓石と対話する
戦没者の慰霊碑にも懇ろに
輝け日本油絵展を見る
探梅の足大阪城へ辿り着き

大阪市　小泉ひさ乃

幸せに慣れてぬるま湯好きになる
あやす子がにこりともせず諦める
ちぐはぐな言い分夫なにかある
タンス預金ロボット犬に見張らせる

大阪市　安達はじめ

ためらって居るのに開く自動ドア
待ったなし時計は回り日が暮れる
栄転の別居に悩む宮仕え
人は人　自分を知れと天の声

大阪市　小糸昭子

下請けのパワー小さな町工場
腎移植ドミノ移植と言うスリル
西タマオ粋な戸籍が出来上る
一面の菜の花畠に癒される

貧しいがやさしい愛の灯がともる
母米寿耐える袋をにぎりしめ
春うらら浄土もきっと花ざかり
おさんどん今日は極楽旅の宿

大阪市　津村志華子

お水取りみちのくは雪那覇は初夏
春近し旅行のプランばかり立て
朝寝妻　夫黙々ごみを出し
義理チョコを貰って困るホワイトデー

大阪市　中村叡子

優しい顔で女は強い釘をさし
春が来たよと舞うてきたのは風花で
次々と新手でワルは良い頭
天辺で派手に踊って踏み外し

大阪市　本間満津子

埋められて川がきらきら光れない
情報の海で経済春がすみ
アメリカに鼻もちならぬときがある
めずらしく腹空く日々よ春近し

大阪市　渡部さと美

皆勤の子をウイルスが休ませた
今日はいうて別れて誰やった
満開の梅にやよいの雪しきり
モンゴルの力士　パワーにあふれてる

大阪市　中田あい子

文楽座　寡婦にことよせ入り浸り
付き添いの姉にも見舞うちらし鮨
節約を旨に明治の凛として
上村三代見上げて今日もゼロの数

大阪市　清水絹子

説教の底に悪意は見当たらず
一歩ずつ寄り合えそうな初対面
開示用カルテが別にあろうとは
ライラック五月の風を薫らせる

池田市　栗田久子

余生追う悠々自適ともならず
素うどんが好きで香川が僕の里
自画像に何時か謀反の相があり
変化球投げてもみたい今日のウツ

和泉市　西岡洛酔

この地球裏と表に不況国
犯人はどこへも来れるご用心
企業家になるにゃ遅いか九十一
四代がスキー一流とは血筋

和泉市　岡井やすお

アーメンが声小さいと棺の友
またかいなどと介護の情がない
もしやテロ狙うか平和ボケ無気味
いまさらに女雛を右と揉めずとも

泉佐野市　山本蛙城

家計簿の隙間で好きなコンサート
日向ぼこ孫が千代紙持ってくる
目覚めると雨で寝直す定年後
知らんふり寝たふりもして身を守る

茨木市　藤井正雄

川柳も吊ってほしいと桜の木（桜の通りぬけ）
カメラ連れ大阪城の梅林へ
城の門佇む僧にカメラマン
モンゴルで白馬どうどう朝青龍

交野市　山川日出子

だんだんに分厚くなった川柳誌
物のない頃を思えば今百均
涙して聞くアッツ島兵士の死
六十年お国のためも過去になり

河内長野市　植村喜代

検診で一番恐いガンの二字
割り勘で話が弾む丸い酒
ブレーキが無い人生の下り坂
欠伸までそっくり我が家の三代目

河内長野市　井上喜酔

グッドラックいっぺん言うてみたいけど
静観をしよう時間が解決す
闇夜から抜け出た思いローン済む
お米屋さんサラリーマンになりはった

河内長野市　水谷正子

老人の心の扉孫があけ
ヘソクリで宝石店の扉あけ
厚化粧湯殿で記念写真とる
ユニークな答がぱっと見つからず

岸和田市　原さよ子

気の抜けた時をねらって風邪の神
抜けてても銭勘定は合っている
損得を抜きにつきあう俺お前
思い出が残る母とのよもぎ餅

岸和田市　宮野みつ江

何しよう快晴の今日予定ゼロ
温めた殺し文句が使えない
泣くことが出来たら楽になるだろう
良い人と言われ脱げない猫の皮

堺市　村上玄也

酔っている振りで思いの丈を吐く
人間が檻に入って見るサファリ
ひとり食う鍋にも慣れた赴任先
美酒に酔う夢へ鍛える春キャンプ

四条畷市　吉岡修

芋判のアイラブユーをめった捺す
なけなしの虎の子だから壷の中
悪いことも出来ずぼやいてばかりいる
いつだって愛しい人の傘になる

吹田市　岩屋美明

褒めるとこ探して伸ばす豆の蔓
吾輩も猫でケータイ持たされる
モンローのルアーで釣った回遊魚
指輪まで買わせてそれはないやろう

吹田市　瀬戸まさよ

不戦論賛否あります民主主義
時効ない遺族の悲哀わかりすぎ
ブリづくしサンダーバード氷見の海
千金の価値ベテランの客さばき

吹田市　野下之男

赤紙も知らずに済んでこの平和
隙あれば打ち込まれてる永田町
梅檀は双葉よりとは愛子様
タマちゃんも区民になれる良いお国

吹田市　太田昭

関わりを嫌い高層階に住む
聞き役の母に補聴器買って来る
世の中のかたきの酒がついて来る
湯豆腐の崩れる音を妻と聞く

吹田市　早川棲世

俺のクローンきっと俺とは仲たがい
商家継ぎ背筋伸ばさぬままに老い
貸した友忘れ帰らぬ書を惜しむ
創業者　社内の風紀気がつかず

大東市　南原正和

頓堀はやっぱりええな僕の島
くじ当り清貧の気は翔んで行き
積る葉の命の涙土が呑む
淡路島水仙の兵喇叭吹く

大東市　児玉蛙

片付けてどこへ置いたか捜し物
年金に合った暮しで翔んでいる
寂しがり誰と余生を楽しもう
立ち上がる切っ掛けもらう友の文

高槻市　傍島克治

才媛とは婿の操縦上手い人
逆境に野心を捨てぬ青テント
この歳で服の新調しないだろ
退屈は一日無事な証です

高槻市　生田義一

発表会親はビデオで駆け回り
雛祭り客間にパッと春の色
自分史に一行空けておく老後
大本営発表もどきの北のアナ

高槻市　西谷治三郎

まだかいな息を止めてるレントゲン
叩いても皺伸びまへん七十路
煮えたぎるガスなど平気長電話
校長をさん付けで呼ぶ定年後

高槻市　井上照子

まだ夢中書道の奥を見極めん
風は緑、心を洗う靴を履く
怖い世だ触れただけでもひっぱたく
しぐれてはならない意気で友見舞う

高槻市　江原秀夫

秘書というねずみに税金かじられる
戦争の遺伝子拡散する地球
万札のしわに浮世の会者定離
カタカナ語ちんぷんかんぷん暮してる

高槻市　左右田泰雄

使い捨て文化が築くゴミの山
礼節の二字見当たらぬ世紀末
掴んだらマイク放さんから困る
衝動に駆られてくぐる縄のれん

豊中市　樫谷郁子

春風に木の芽草の芽目を覚ます
好奇心集めてのびる蘭の花
古日記さざ波騒ぐ音がする
イヤリング女の業を聞きたがり

豊中市　岸田知香子

世をすねて絆絶ち切る独り者
春よ来い早く来い来い受験生
ガラス越し芽ぶき間近な春の午後
逆境を越えた日偲ぶ青春譜

豊中市　江見見清

行間も紙背も読めて悩みだす
定年後背にゆとりあり隙もあり
今回のｔｏｔｏはひいきを負けにする
カレンダー夫婦勝手に予定書く

富田林市　大橋鐘造

二つ三つためらい傷のある背中
頑固者プライドだけで生きている
遊んでる時も仮面は外さない
一歩退く事を覚えて丸く生き

寝屋川市　酒井勇太朗

ポルトガル日本は東果ての果て（スペイン・ポルトガル旅行）
反戦のデモと出会ったマドリッド
ラテン系あくせくするなケセラセラ
それぞれが良いカップルの面かぶる

寝屋川市　平松かすみ

たんぽぽの綿毛が憩うビルの上
折々の恋の詩ある花時計
お祝いは使い勝手のよいお札
ＳＯＳ時々します我が手足

寝屋川市　太田とし子

雲の中から雲が生れる花見どき
正眼の構えになってきたニュース
セールスの電話勝手な時間帯
思い出の唄に花散り花開く

寝屋川市　坂上高栄

日日の暗いニュースに気が重い
一雨がしっとり持って来る春だ
補聴器が我れの足音まで拾う
補聴器で猫語犬語が聞けるかも

東大阪市　指宿千枝子

春一番南の島の匂いする
ほっこりと咲いてる花にボケと言い
酒くさい男が絡む春の駅
乗る人と一緒に花粉なだれ込み

枚方市　二宮山久

停年へ新車で飛ばすハイウエー
停年の西国参りへ雨がふる
息子まだ帰宅しないが嫁がいる
今日生きた幸せ趣味の多忙かな

枚方市　宮川珠笑

笑めば笑み泣けば泣いてる石地蔵
無遅刻で休まずいつも駄弁ってる
錠剤を見せあい親しくなるツアー
快い目覚め喜劇の幕が開く

枚方市　鈴木政子

ラジオ党いつもポッケに家事こなし
恐々でファックス一人で受信出来
我が生家アメリカさんに焼かれた日（三月十三日）
少子化に加えハイミス増えてくる

枚方市　森本節子

紅梅白梅小雪ちらつく中山寺
面変わりした宝塚むかしなつかし
よく話す引退しての貴乃花
物欲がなくなり生活シンプルに

守口市　結城君子

啓蟄も他人ごとのよに斑雪
面白いことといっぱいあって飽きぬ老い
春寒にいやいやしてる独活ごぼう
無責任料理と名付け悦にいる

守口市　井上桂作

遠慮せず物言わすのも年の功
使いすてカイロ貼りあう老夫婦
善てなに西田哲学いまめかし
侘び寂びのわかる年まで生きねばと

八尾市　吉村一風

追伸のやさしい言葉読み返す
いい人や言われて角はひっこめる
お年寄り増えて和やか街の角
のみ込んだ言葉が喉でからんでる

八尾市　篠原いつふみ

こんな事ぐらい涙腺また緩む
七人の敵一人減りひとりへり
眼鏡屋で老いの進みを指摘され
脱皮して娘溌剌春を行く

少女輝いて恋のきざし見え
木々芽吹くその当然を不思議とも
小綺麗になってしまった古本屋
美しく老いたい余生夢を編む

八尾市　長谷川　春蘭

頼みごとあるらし敬語使ってる
あれ以来言葉ひとつに気を遣う
生真面目な人が持ってた裏の顔
メンバーに君の陽気が欠かせない

大阪府　澤田和重

腹に住む鬼が時どき弱音吐く
地獄へは行きたくないと金を積む
母さんの介護に手抜きなどできぬ
背広着ることが滅多にない余生

相生市　中塚礎石

白い風四月の彩に染まり出す
ひょっとしてひょっとするかと宝くじ
千枚の宝くじ買う命がけ
二人でいても淋しい日にはかわりなし

芦屋市　黒田能子

医者嫌い言っておれない赤ランプ
先生は右手マウスに僕を診る
花粉症杉には杉の自己主張
ご近所と匂い交換するくぎ煮

尼崎市　軸丸勝巳

梅霞大阪城が春を呼ぶ
母と娘へ何んと優しい雛の笑み
聞かぬ振り出来ずに渦の中にたち
特典は気楽さだけの老いひとり

尼崎市　内田美也子

山門へ一足毎に澄むこころ
咲けば散るそれでも春は花のもの
鬼の顔で怒り菩薩の顔で泣く
歳月も春も過客で来ては去る

尼崎市　松下比ろ志

干支聞いて彼の気質が飲み込めた
お若いと言われ気分も若くなる
方針を替えて気楽に隠居する
運が欲し火の粉を浴びるお水取り

伊丹市　小熊江美

福寿草一つ二つと春のせて
ああ春だ　くぎ煮の匂いとなりから
剪定終るとなりの窓が近くなる
痛みから逃れる術よ老いの愚痴

伊丹市　山崎君子

草の根の声も聞いてとデモが行く
忘れ物呼ぶ大声が追っ掛ける
梅満開うっかり見ててけつまずく
マネキンのイメージ消えた試着室

川西市　米原雪子

神戸市　木村貴代子

プリンスの子育てを見よ世の父よ
少子化や愛の受け手が足りませぬ
逃げられぬ老いを楽しむ術さぐる
迷い犬たずねるビラに愛こもる

神戸市　山口美穂

雀の涙ほどでもうれしいもどり税
世界の鬱フセイン ブッシュ意地をはる
こころよい犬の鼾もいいもんだ
いかなご煮てはるお向いもお隣も

神戸市　池田善守

吾が人生たけなわとなり古稀祝う
チャレンジに年齢制限ない強味
好きなこと後まわしせず先取りを
その身になって初めて分ること多し

西宮市　刈田泰司

魯山人の鉢にたっぷり秋を盛る
祝宴に下戸はみじめな者と知る
金閣を絵にしてくれる雪が降る
雪吊りが客待ちをする北の宿

西宮市　秋元てる

靴贈る地団駄踏まぬよう祈り
死んだ貝のように女房口つぐむ
バージンロード未練を呑んだ父の顔
先棒を頼りのんきに生きて来た

西宮市　坪井孝一

ストレスが薄らぎ何故か悩み出す
プランター買って自然の風見よう
日課でもいやいや動く万歩計
宇宙の本読んで良かった六十歳

西宮市　緒方美津子

手違いを隙とみられる老いかなし
豆を喰む音まだ持って八十路踏む
風邪マスク梅香もらえずもどかしい
啓蟄に籠り直して風邪薬

西宮市　井上松煙

気兼ねなく寝坊のできる有難さ
やさしいが隙はみせないちゃっかりや
思い出を話す相手がいてうれし
余生なら思い違いも苦にしない

西宮市　菊池トミヱ

半分は運だと悟る年になり
さっそうと登って行くやジャンプ台
春の野にみどりやわらかふきのとう
人事と思った杖を我もつく

西宮市　亀岡哲子

いちご大福家族九人に春うらら
蹴つまずく石にも春の暖かさ
喜寿と古稀やっと円満悟りかけ
そうかそうかとやっと納得しまい風呂

姫路市　古川奮水

セーターの色から我が家春になる
失敗を重ねて世間狭く見え
白旗を揚げると家中丸くなる
新聞の単車響かぬ朝の雪

兵庫県　大谷幸次郎

遺された梅が律気に実を結ぶ
存えて所詮ひとりになる運命
春一番雷神連れて突走る
さすがだな万札攫う蟹のボス

奈良市　天正千梢

捻子巻いて効果あるかなあ八十歳
山麓に絵になる土塀二ツ三ツ
欲すてて退院して来たはずだった
党主などかわってみても何になる

大和郡山市　坊農柳弘

風みどり出番待ってるカーネーション
昭和史を歌い続ける古時計
葉桜の眩しさ鯉のぼりを誘う
糠床をかえして祖母の仕舞い風呂

和歌山市　細川稚代

早咲きの桜へ容赦ないみぞれ
核心にふれると視線そらしたね
江戸小紋　粋なドレスにリサイクル
寄り添うて生きる二人に介護の手

和歌山市　青枝鉄治

当確へ政治家ぶった貌になる
新築へ重いローンと移り住む
血圧の上がる話は明日にする
関西弁聞いて安堵のパリの朝

和歌山市　玉置当代

梅一輪　部屋全体が春になる
春一番　鬱も一緒に吹き飛ばせ
葛藤を続ける姉のＩＣＵ
戦争をしたくて疼く星条旗

和歌山市　上地登美代

菜園の大根偉そう仁王立ち
甘酒で五人囃子がよく騒ぐ
不都合な事は省略しておこう
平均寿命女が長いしたたかさ

和歌山市　宮本三喜夫

目に見えぬ恐ろしい事多すぎる
なぜもめる世界の事は難しい
何もかもアチラものだけ安く買え
携帯で監視されてるつらいこと

和歌山市　松尾和香

ひな祭り踊る園児の晴れ舞台
自分史に母の余生をだぶらせる
春遠く巣立ちの子らになごり雪
やわらかい胸に秘めてる薔薇の刺

海南市　堂上泰女

冬の芽を解きほぐしてく春の雨
咲き匂う梅に道真公偲ぶ
春の宵ショパンに浸りリフレッシュ
枇杷の花野暮ったいけどバラ科です

倉吉市　山中康子

折角の慈悲に言い訳とまらない
耳遠い夫よあなたに罪はない
嫁がせて母のさみしさせきを切る
見舞われて自己中心の話聞く

倉吉市　山本玲子

雪囲い解かれ庭木も背伸びする
エレベーター独りをぞっとさせる場所
ひとり旅我が儘を言う影つれて
頑丈な壁でも洩れる内緒声

倉吉市　猪川由美子

忘れたことを忘れ収拾つかずいる
時代だな殿下離乳のサジ運ぶ
巨乳ダメ豊乳ならば良いという
コウノトリよ次は男児を御所で待つ

倉吉市　野口節子

鮮やかなセーター集う老人会
分相応お茶は番茶で干しがれい
奥の間で睨みを効かす咳ばらい
爽快な朝だ五体がよく動く

倉吉市　淡路ゆり子

喜びの重なりすぎたのし袋
薄味になれて元気を取り戻す
三輪車買うハメになる孫のテロ
遅すぎる何があったか胸さわぎ

倉吉市　松本よしえ

自爆テロ信念というおそろしさ
毎日がひとり舞台の泣き笑い
爽快に白寿のスキー　モンブラン
下りて来る人に元気を貰う坂

倉吉市　牧野芳光

卵かけ御飯幸せそうに食う
百ワット点けて氷雨の音を消す
爺さんの肩でへこんだ天秤棒
上りでも下りでもいい汽車に乗る

米子市　門脇晶子

お経の声なくなるまでは香をたく
おだやかにローソクの灯が消えてゆく
雨やんでやっとわたしの虹が出る
夕空に神の笑顔が沈みます

米子市　中井ゆき

青空を腹の底まで吸いこんだ
手も足も踊る阿呆になっていた
足ぶみをしながら春が出番まつ
熱を出すほどの苦もなし恋もなし

雛祭り八十路の母も紅付けて
病む母に金の事など持ち出せぬ
初デート母の口紅そっと付け
店仕舞い派手で淋しいアドバルーン

米子市　永井三津子

一時を命洗われ人形展
ひとりでは生きて行けぬと群れの中
嘘一つ辻褄合わすエネルギー
その言葉空念仏とならぬよう

米子市　木村春枝

ご機嫌な朝のまあるい目玉焼き
新という響きに人は群れたがる
かなしいかな迷ってばかりいるわたし
ライバルの汗がとっても美しい

鳥取市　山宮愛恵

うっかりとちゃっかり揃い名コント
振り向くな美女なら他にたんといる
家族にも煙たい人が居て締まる
変り者と呼ばず個性美だと褒める

鳥取市　杉本孝男

金運のお守り小銭ばかり呼ぶ
何時になく長居無心をする気だな
ふる里が鍛えてくれた土踏まず
妥協する術知ってから身の軽さ

鳥取市　田中憧子

請求書水増しの影浮いている
プレッシャーの波間泳いで脱皮する
人間にさまざまな味苦笑い
黒髪の秘密はきっとコンブかも

鳥取市　山本益子

清濁をあわせ飲んでるすごい奴
ぬくもりが支え積木は崩れない
薄情にさらされ孤独を好きになり
家計簿の引き算ばかりうまくなる

鳥取市　田村邦昭

お墓まで一緒は嫌と思う今日
娘から嫁へ人格まで変わり
愛よりは金さ浮気のヤジロベー
愛情に飢えた仮病の保健室

鳥取市　加藤茶人

陰口は遠い耳にもよく入る
こたつにはみかんの山が良く似合う
聴診器信じて大きな息をはく
蝶になる毛虫うっかり殺されぬ

鳥取市　前田一枝

行間に味をにじませペンを置く
バイキング少し欲捨てハシ止める
先端の花粉と風邪に挑む春
相性を重ね合わせて運掴む

鳥取市　福島庸二

啓蟄に心やわらぐ旅の計
春を摘むひと時土の匂いする
目覚しの調べうとうと春の朝
人生の春はさすがにほど遠い

鳥取市　福田登美

無呼吸を繰り返しても生きられる
切れのよい喋りに口が挟めない
電流も掴めそうだよボケてきた
いい方へ勘違いして波に乗る

鳥取市　夏目一粋

長く生き短かったと一代記
踊り食いまだ生きてると魚の目
残されて気楽さだけが座を占める
老いの道バリアフリーにしてほしい

鳥取市　宮脇道子

古希だものゆっくりのとてもいい時間
春求めジュゴン　ラッコの居る鳥羽へ
宿は鳥羽いたずらっぽい満月よ
めぐる四季特等席の猫達よ

鳥取県　吉田孔美子

額縁のような白髪の中に顔
着回しのセーター親娘Lサイズ
百薬の酒は無休と憚らず
菜園は哀れ見事に草萌える

鳥取県　羽津川公乃

春一番病む身に春は何日の日か
癌も友仲良く暮す道探る
病さえ癒えれば四国巡りたい
お見舞の人それぞれの温かさ

鳥取県　西沖彰雄

器でもないのに長に選ばれる
素うどんで何んとか足りる老いの腹
意地張って傷つくことを忘れてる
川柳に哀しいことを吐いてみた

鳥取県　下田茂登子

親子の絆そんなにもろいものでない
浮きしずみやっぱり浅瀬およいでた
言い訳は止そうパイプが外れそう
バージンロード照れとときめき腕をくみ

鳥取県　黒田くに子

夫逝きて涙を涸らす野良仕事
口遊む唄で昔の君しのぶ
匂うのか警察犬が動かない
乗車して南無阿弥陀仏口遊む

鳥取県　太田幸枝

美しい薔薇も自衛の刺を持つ
齢九十姑が持ってる知恵袋
子の画布にエンゼルの顔みえてくる
草餅に砂糖きかせて亡母の忌に

鳥取県　村上信子

白寿にも杖を持たせて寺参り
み仏が大宇宙からお待ちかね
喉だけは古うなっても唄が出る
温泉へゆく足鍛え道半里

鳥取県　乾　喜与志

在宅の介護へ経費削れない
口数が多く内容つかめない
ダム一つ増やして水の無駄遣い
いい風が流れ町から出られない

鳥取県　西川和子

過疎の里イタチムジナと共棲まい
命あり海山の幸いただいて
物分りいい親になり淋しかり
愛犬にひそかな涙見付けられ

鳥取県　岩崎みさ江

よろこんで貰える事は続けたい
恋猫よも少しモラル守れんか
今の世を嘆きヒツジもなみだする
若者の手助けしたいから力む

鳥取県　土橋はるお

絡んだら中々解けぬ愛の糸
だんご鼻母親ゆずり憎めない
夕暮れの海太陽を呑み込んだ
太陽の恵み真っ赤にトマト熟れ

鳥取県　近藤春恵

ああ恋し天上の妻逢いに来い
和の一字しっかり抱いて余生かな
大山の雄姿も今朝ははるがすみ
代議士がお金で逮捕されました

鳥取県　山本正光

にぎりめしうれしい春を摘みに行く
春の陽に心ほころび旅の靴
自然体で行こうと影もついて来る
人知れず流すなみだに嘘はない

鳥取県　奥谷彩子

才能を干涸びさせた不況風
排気音抜け鶯と逢ってくる
別嬪をだいなしにした大欠伸
企みがあるのかカラス集いだす

出雲市　伊藤玲子

大切な自分の道だよろけまい
思いきり出したい一歩迷ってる
白黒が判らぬままで同意する
母の忌も三十三回笑い声

出雲市　久谷まこと

ふくらんだ蕾たのしい花をくれ
還付通知押し頂いて開ける妻
紅白の餅に招かれ開店日
開店のレジ待つ長い列にいる

出雲市　岡あきら

大根の辛さきっちり飯食べる
横切って曰くありげな斑ら猫
たっぷりの春をふくんだ土筆ん坊
竿売りの声して春が近くなり

出雲市　小玉満江

ひたむきな風はさらりと受け流す
向い風になると勢いづく鯉幟
引いてなお土俵の鬼は華を見せ
例えばの話が多いお母さん

出雲市　石倉芙佐子

鰯不漁　恵比寿が老いたせいなのか
指先が目になっている闇の中
ロボットに力をくれる乾電池
若くなる薬はどこも売ってなし

出雲市　板垣夢酔

まっ白な心になれと雪しきり
ごみ一つ拾った道が暮れていく
海の青狭い心をぬりつぶす
仏滅も大安もなく汗みどろ

出雲市　富田蘭水

あの巨木に寄り添いたくて遠回り
大将になりたくなって泣く女
戦前派食わず嫌いのＡＢＣ
あまた山グリーン羽織って無防備だ

松江市　安食友子

塩加減妻の味にも母の味
女房が仮面を落とす化粧台
お礼の言葉菓子一箱に語らせる
迷い道抜け出た時に妻が居た

松江市　小川注湖

寒雀よって呼び交う平和論
消印のない人生をひた走り
しなやかな春画見ている寺の前
雪解けの流れる水に歌がある

松江市　津川紫晃

脇役の意地が妥協を許さない
ゆったりと青磁の空を舞う余生
生き様が人それぞれの面を練る
脇役に徹し身に染む人の味

松江市　三島淞丘

笹鳴きに耳をすませば春の音
言うまいと決めてたことを言いたがる
飴一つ安定剤のかわりさす
おひなさまお歳を召さぬうるわしさ

島根県　榊原秀子

愛子様すくすく伸びのびアレナーニ
お隣の嫁さんだからあたたかい
ない知恵を絞ればそこら中の春
大事なこと小首傾げて言うたくせ

岡山市　川端柳子

お元気ねまた言われてる犬散歩
薄毛ではない寒さ凌ぎの冬帽子
介護バス見送るやがて我が身にも
物売りが旬を運んだ遠い日よ

岡山市　井上柳五郎

胎動へ母なる力溜めている
愛疼く思い出そっと伏せておく
朝が来る当てない誘い待つ心地
末席の一声意見乱れだす

岡山県　福原悦子

あたり障りの無い返答で切り抜ける
とろけそうな話に鍋も煮詰って
生真面目に生きたあかしの靴のちび
呑んべえの愚痴は行ったり戻ったり

岡山県　山本玉恵

昨日より明日を語ろうパンが焼け
赤とんぼ昔を今に返せとか
親子の情森のサルから学ぶもの
どの花も彩とりどりに万華鏡

岡山県　矢内寿恵子

訂正とお詫び

4月号に同人南原正和氏の句が、間違って水煙抄（57頁下段）に掲載されました。訂正してお詫び致します。

編集部

堺番傘川柳会創立75周年
坂元一登句集「川柳八景」・長江時子句集「仙人掌の花」発刊
記念川柳大会

とき　7月21日（振替休日）10時開場
ところ　三井アーバンホテル　JR環状線弁天町
祝辞　番傘川柳本社主幹　礒野いさむ氏
句集鑑賞　「川柳八景」　片岡湖風氏
「仙人掌の花」　杉森節子氏
―記念句会―
事前投句（1句）
「ふたり」**6月20日**まで　中田たつお選
宿題　「湧く」　大村美千子選
「ゴシップ」　河内天笑選
「扉」　久保田元紀選
「他人」　住田英比古選
「おおらか」　田中新一選
「強気」　森東馬選
「踊る」　森中惠美子選
出句　各題1句（欠席投句拝辞）締切11時半
会費　3,000円（記念品・句集・発表誌・昼食）
懇親宴　7,000円（申込制　6月20日まで）
事前投句　〒590-0944 堺市櫛屋町東1-2-2
懇親宴申込先　梶川雄次郎　TEL 072-222-5298
FAX 072-221-5296
主催　堺番傘川柳会・番傘川柳本社

大阪川柳人クラブ
第4回吟行のご案内

日時　**5月28日**(水)　8時10分集合
集合場所　JR大阪駅前ヒルトンホテル前
行程　8:30出発→阪神中国道→キリンビール工場見学試飲→かさや11:00着
しい茸狩り・バーベキュー昼食と句会（終了13:20）
→清水寺参拝→鎮台窯14:20着
立杭焼見学→三田西→舞鶴道→大阪駅17:00頃着予定
参加費　7,000円（会員）　8,000円（会員外）
キャンセル料　3日前～2日前　半額負担
前日～当日　全額負担
宿題　「嘘」「吟行雑感」各2句　締切12時
申込み　5月3日(土)まで
取り消しは一週間前迄
申し込み先　事務局　大堀　正明
〒532-0012 淀川区木川東4-3-34-212
06-6305-4536
長浜　澄子　06-6422-8675
坂本　晴美　06-6384-2466

自選集

橘高薫風

束の間よビンラディン氏の名も忘れ
物みなの腐る早さに人もあり
夕桜右大臣より年を取り
散る花に二人の孤独重ならず
万華鏡万化の果てに摩耶夫人

小西雄々

千羽鶴とんで喜ぶ退院日
笑い袋にぎしぎし詰めた夢 希望
残照へわくわく逢える影を追う
月からのメールも届き夢を描く
爽快に私を溶かす炎が匂う

小林由多香

先生の顔と算数大きらい
とりあえず三文判を捺しておく
早耳が近所にも居てかしましい
思い切りめかしてやろう赤を着て
はやり風やっと下火に春を待つ

斉藤劦

合格の空に広がるVサイン
少年の凧 大空をひとり占め
一握りの土を宝に生きている
触れないでおこう蕾が開くまで
なまけてるうちに草は根もう広げ

田口虹汀

飛んで来た梅を鶯追うて来る
菅公を慕うて梅が北野から
卒寿ともなれば自然に刃はむけぬ
家中で明るい所が母の部屋
公園の藤は今年は見のがせぬ

竹内紫錆

母と転々 屑屋にノートみな売って（昭和初め 2句）
襟にはT 母はテクノロ可笑しがり
投弾はムービー 酸鼻は絵筆にて
インターホン 築何年を問う業者
医療費も控除し脳だけは元気

胡蝶蘭　古希の妻への贈物
傘寿古希　翁媼の夫婦なり
夫婦相い和して老人医療証
能登土産娘がくれた夫婦箸
妻と酒　川柳愛す友が逝く（高須賀金太氏を偲ぶ）

田中正坊

電話ベル美人になれる化粧品
さりげなく隙のぞかせる下心
核心に触れると風がなまぐさい
淋しくてケータイ電話持ち歩く
生きてるのです歩かねば走らねば

玉置重人

観光地　茶店の老婆同い歳
夢があるから老いの手もよく動く
盃と口は達者で春の天
襟元も乱れ恩義も地に墜ちる
相性はいいがすこうし欲が出る

恒松叮紅

病院から連れて帰った風邪の神
雪しんしん地球の朝を化粧する
露地の雪溶けてやるかの意地を見せ
至福とや無欲とや君惚け給い
明日が来てまた明日がある遠い道

遠山可住

太陽に褒められているももさくら
わたくしと一緒に歩く昼の月
うぐいすの真似が上手なお爺さん
南無阿弥陀仏　花が咲くのを待っている
春は行く今日も明日も日曜日

土橋螢

降下するエスカレータで二回転（三月九日あびこ駅　3句）
しまったと自戒も一緒に救急車
骨折もなく不死鳥の逞しい
米国対イラク段々世論取り
世界戦豪語フセイン影武者九

西田柳宏子

金太郎飴が売れてる永田町
御存知の飴さ議員の美辞麗句
故里の飴取り寄せるタバコ税
飴玉を配っておいて家を出る
千歳飴あれは今でもおいしそう

仁部四郎

残念を悔しと書いて欠席す
夢で会う友も承諾膝を打つ
シンプルに生きて白寿へ漫歩する
時よ止まれ今という今幸掴む
合掌の間先祖に叱られる

野村太茂津

煮凝りや三月までは雪の町
だれか見ていそうで首がこそばゆい
老愁もカルテも厚くなりました
裏切った人を忘れぬ風の意地
一息に牛乳一合飲みほしぬ　春

波多野　五楽庵

みどり一色楽しみと健康旅プラン
曽孫出産楽しみにして待つ五月
夜の雪帰り支度へ降り止まず
楽しみは友の笑顔を待つさくら
笑顔の健康木次の町つくり

藤井明朗

花育てしみじみ季節を知る余生
紺絣亡母の匂いを着て偲ぶ
留守中に曽孫来ていた置土産
薬にも毒にもならず祖母達者
振り向けば最長老の影法師

藤村〆女

上履きのスリッパ合わずに泣かされる（故宮　2句）
はなやかな昔が残る大和殿
地下宮に上り下りの九十段（定陵　3句）
明陵を守る神路のけもの石
亀にのる永楽亭の無字石碑

芳地狸村

晩酌に今日も感謝の夕飯だ
一歩ずつ春が近づく梅の花
朝酒の味幸せだなと思う
世話かけて生きたくはなし八十路坂
盗み酒上手になってのんでいる

宮口笛生

灯を消して愛と虚栄を寂しがり
嘘の世を問えば悲しみ月曇る
空の蒼歌を心に人間像
悲しみを誰が償う骨拾う
春風に押されて可愛い恋もして

森下愛論

窓がらり開け大空を直輸入
おずおずと空を見上げる術後の眼
空を見て流れて水藻沈まない
現し世の空も前の世からのもの
今ならばすんなり空に溶けられる

八木千代

誘蛾灯に惹かれて帰る蛇行ぐせ
陶酔の女へ誘う火のサンバ
埋もれ火を開けてはならぬ時効まだ
ウエルカムその演出に踊り出る
逢うた日は頬の火照った日記書く

八十田洞庵

拉致と言う秘密の箱がいま開く
地球儀のここでもテロがキナ臭い
職探す片減りの靴磨き上げ
満天の星だ好きだと言えそうだ
助っ人の神がよそ見をして困る

両川洋々

直感で動きしくじる勇み足
しようもない癖がついてる僕のペン
脳細胞の崩れか近頃物忘れ
仮面ではもう生きられぬ歳になり
老いては子にされど時々愚痴も出る

阿萬萬的

うるさいなァはいれます保険わかったョ
春宵一刻　家族気にする隠居部屋
ゆっくりはいいが世間のめまぐるし
当ったことのないくじが当ったので不安
おみくじへ大吉たっぷり用意する

石川侃流洞

引き算がとても上手なプチトマト
セクシーな風に恋して赤トンボ
さわやかな風に悪口言いそびれ
寂しくてテレホンカード無地がよい
ポケットに小さな愛を入れてある

板尾岳人

娘から春贈りますチューリップ
世田谷の梅も美し息子と歩く
娘の幸せ見守る雛の眉やさし
赤信号それでも進む時がある
友の支え　ひようたん島に辿りつく

奥田みつ子

かわいい花付け雑草が自己主張
先の先読んだか邪魔な駒ひとつ
度の過ぎた心遣いは疎まれる
ひとり酒傷心癒やす歌を聞く
健やかに成長願い鯉幟

河井庸佑

お隣は何する人ぞ都市砂漠
貧乏でも生きてることは素晴らしい
音痴にも五月の風が歌わせる
妻の艸苦労させたなと詫びる
人生はいくつになっても修羅の道

川島諷云児

人間の終着駅に介護法
天と地を結んで架かる虹の橋
領空の侵犯もあり鯉のぼり
絵に画いた餅も売ってる選挙戦（市長選）
北を指し決して妥協せぬ磁石

木村あきら

地球儀に飽食の国飢餓の国
冬山の恐さを知らぬ山男
青春讃歌 頂点目指す山男
窓開けて春の光を誘い込む
野菜いっぱい背負い老母がやって来る

工藤吟笑

いかなごで瀬戸内海の春送る
蜆汁出雲の朝を旅立ちぬ
なめくじが出たぞとにらむ台所
美しい女横目で見てしまう
友達の奥さんが炊く僕の飯

黒川紫香

指輪交換すずやかに聴くアヴェマリア〈二男結婚 二句〉
蘭幸さんのカンパイで披露宴開く
禁煙をして七年がたちました
誘惑にいちども勝った事がない
授業料いろいろ払ろて来たものだ

河内天笑

原稿募集

8月号掲載の同人の原稿を募ります。テーマは「戦争と私」。終戦後58回目の夏を迎えるようになっても、イラク戦争での市民の姿に当時が甦ります。広く戦争にまつわるエッセーのご応募をお待ちしています。
締切は6月15日 400字詰原稿用紙一枚半～二枚（600字～800字）本社事務所宛
ただし、原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。

編集部

第39回 さいたま川柳大会

日 時 7月13日（日）午前11時
会 場 埼玉県労働会館
（JR京浜東北線・北浦和駅西口徒歩5分）
会 費 2000円
第1部（出席者の部） **締切** 午後1時
宿題と選者（各題2句）

「太 陽」	竹本瓢太郎
「我 慢」	今川乱魚
「未完成」	播本充子
「野 望」	成田弧舟
「物は試し」	松岡葉路
「 棘 」	野中いち子
「無味乾燥」	尾藤三柳

席 題 2題 当日発表
賞 埼玉県知事・さいたま市長他多数
第2部（投句の部） 5名共選
課 題 「駆ける」（3句詠）出句料1000円
締 切 5月31日（消印有効）
賞 合点20位までは埼玉川柳社賞
出句先 〒330-0834 さいたま市天沼町1-353-3
都筑はじめ方 さいたま川柳大会第2部係

第八回 杉野十佐一賞
川柳募集要項（案）

課 題・「 心 」3句以内
選 者・斉藤大雄（北海道）
尾藤三柳（東京）
大野風太郎（新潟）
橘高薫風（大阪）
森中惠美子（大阪）
北野岸柳（青森）
締 切・6月30日（月）当日消印有効
応募料・1000円（郵便小為替を同封）
賞・大賞句1句に杉野十佐一賞
各選者三才に特別賞
応募先・〒030-1302
青森県東津軽郡蟹田町中師字宮本2-3
おかじょうき川柳社大賞係宛
TEL 0174-22-2104
主 催・おかじょうき川柳社

奥田みつ子選

東京都　やまぐち　珠美

帆へ孕む新風　船は動きだす
あこがれをあこがれとする紅を引く
迷うときウソを選んでしまう指
飽きぬから商い　のれん風に揺れ
切りぬいた天が凍てつく摩天楼
モノクロの亡母へスイートピー供え

泉佐野市　稲葉　洋

厄除けにしようジャンボの外れくじ
物知りの年寄りが居て里文化
苦も楽も同じ音色の古時計
新聞のチラシも緑増えて初夏
今日だけは憂さ放り出そ五月晴
人の世に残る最後にある起伏

大阪市　三浦千津子

思慮深い女の小気味よい意見
私にエールをくれる詩がある
プラス志向手間を惜しまぬ生き上手
欠点を曝し受皿に甘える
踏み込まぬルールで丸い同居です
春うらら少し女を立て直す

秋田県　秋野　宏

こぼれ種らしい個性の花が咲く
清濁を飲んだ女将の帯の位置
父の樹を仰げば鳥海が晴れている
検診日一つや二つ出る埃
哀しみの涙は青い空が拭く
問いつめたカルテに雪がちらついて

愛媛県　黒田茂代

アバンチュール風は素知らぬ顔で過ぎ
身のほどを知っているから貝になる
生きるのも死ぬもこれからです知命
一陣の風がドラマを書き替える
解くほどに漢字の謎が面白い

春の絵にとける女の春の顔
雨の日は淋しくなって街に出る
悲しんでばかりはおれぬ生きてゆく
夫婦のもつれ夫婦しかほどけない
病床の老母が笑った一行詩

東大阪市　田中美弥子

朝の水　花一輪と分けて飲み
鯛の目に睨まれている誕生日
我が心暫し艶歌に遊ばせる
知識欲こんなにあった老いの坂
ギャラリーの裸婦へ往ったり来たりする

吹田市　木村無禄

同じ過去あって私は笑えない
妻だけはいつも味方と信じたい
今年こそ恋の方程式を解く
目で合図すれば集まる飲み仲間
泣き笑いウロコ一枚ずつ落とす

神戸市　両川無限

カラーコピーしたくなるよないい話
ふる里の駅から続く花明り
ハードルが高く転んでばかりいる
少しずつ思いがずれる冬の雨
泣かないと決めた私が泣いている

高知市　小川てるみ

雪解けを集めてダムに春が来る
吸い物の木の芽が春を告げている
伸びる芽を摘んだ過保護に気がつかぬ
飼い主で決まるペットの運不運
人生も登山も九合目で悟る

鳥取県　澤裕子

実力と運で掴んだ春の風
似ていない処もあってホッとする
失敗を恐れていては進めない
疲れない位置に座っていてくれる
失って気づくアナタという宝

横浜市　川島良子

実権が移ってからもオイと呼ぶ
もう一度咲こうと落ちる寒椿
迷っても決めても妻の檄が飛ぶ
サンズイに戻を酉と書き違え
瓜二つ顔のことではないらしい

綾部市　藤田芳郎

無職でも何か嬉しい日曜日
人間の知性も下げていくデフレ
脇役で舞台支えた父の自負
カルシウム摂って反骨まだ盛ん
総論の中は味方の顔でいる

岐阜市　平野あずま

秋田県　湊　修水

フセインもブッシュもそのうち裁かれる
キナ臭い地球を核がにらんでる
人情を旅の土産に持ち帰る
世の義理をすっぱり脱いで身が軽い
幾山河越えて秋田に辿りつく

日立市　加藤権悟

つくしんぼ少年の日の貌でのび
無冠だが父の足跡から学ぶ
横文字とメカには弱い父である
紅白のリレーに万国旗のエール
花の宴ゆっくり溶けてゆく暮色

横浜市　芦田鈴美

参考書集め勉強したつもり
裏道を選びカーナビ困らせる
国籍を問うたら食べるものがない
人形の緋もうせんから春がくる
追伸で奥歯のものがやっと取れ

横浜市　秋元和可

ジャンケンに負けた鋏が錆びてきた
俯瞰図を広げて探す行き所
人目さけ木蔭に根差す草もある
無為無欲大地に鍬を振う汗
アンコールなしの拍手で幕を引く

横浜市　近藤道子

意地頑固持ち続けてる柱です
そこそこのやる気ですぐに息切れる
価値観の違いどうにも埋まらない
寝たきりへ説教したく言えずいる
愚痴らずに明日からの道探さねば

京都府　前上英一

季は動く初音が朝の靴を止め
日脚伸ぶ土との対話長くなる
脱いでみてまた袖通す戻り寒
ひと山に盛られリンゴの詩果てる
花吹雪風の形で散っていく

大阪市　升成好

青信号ついてる方へ今日の旅
黄信号老いを知らされさとされる
群れに居て等身大を見失う
気がつけば孫より夢中プラモデル
聞き上手ホントは聞いて貰いたい

和泉市　小坂凡英

赤ん坊の寝息なにやら不思議なる
まだ雛の孫に議論を負けてやる
巡礼バス石段の数から始め
近道をついつい選ぶウォーキング
読経する声の張り失せ妻の古稀

大阪狭山市　羽田野　洋介

古希にしてやっと人間心地つく
道標のない人生も古希迎え
一度ぐらい冒険したい古希の春
平凡に賞罰なしの古希迎え
中吊りが喫煙誘う禁煙車

柏原市　永浜　加津子

気が合うてはんなり酔うて春の宵
春風の誘惑ピンク着たくなり
富士さくら好きなわたしは日本人
振りむかず明日を思い煩わず
武蔵見て一週間を過去にする

河内長野市　石堂　潤子

これほどに本積み上げていて無学
良い噂尾鰭がとんと見当たらぬ
謎解きはしないと決めた蚊帳の外
四捨五入私はわたし　それでいい
いきのいい言葉が旨いすし暖簾

岸和田市　雪本　珠子

八卦見も自分の余命手に見えず
夢持って素敵に歳を重ねたい
残り香に思わず知らず振り返る
シクラメン首をかしげて笑ってる
人生も黄昏に来てらしく生き

吹田市　木下　敏子

老眼にまだまだしたい文机
しあわせな時の流れる五七五
なるようになる前向きな赤い靴
考えを切り替え春の風に乗る
真直ぐな筋一本を子に譲る

寝屋川市　岡本　勲

牛歩でもいいさ近道などしない
軽い口たたいてしまいふっとウツ
ポケットをときどき妻に査察され
頑固さと寂しさもある父の辞書
明日は見えないが日記書いている

羽曳野市　森下　一知

避けられぬ老いに歯止めの好奇心
雑草の意地が掴んだ回り椅子
失敗を重ねて気付く気負い過ぎ
大輪の花に涙の回り道
九回の裏に女神を揺り起こす

枚方市　二宮　紫鳳

停年の夢ふくらます新車旅
朝もやに煙る橋立　ウオーキング
孫の声聞いて元気を取り戻す
逢いたさが募る片言孫電話
丹後路を歩む二人に春の雪

菜の花と酒盛りしたい春の宵
福相も年相応に弛みくる
春風に乗ってなにわに触れ太鼓
そよ風に蝶がサーフィン春気配
意地っ張りし合う間はまだ若い

八尾市　笹倉ひろし

生きざまを見て来た野良着捨てがたい
ぼんやりが嫌で着もせぬ毛糸あむ
たまに出る街は迷路で迷いそう
いじける気盛り上げたくて赤を着る
日々単調ゆったりすぎてものたりず

大阪府　小栢こずえ

老人も愚痴はおあずけまず笑顔
きっと出るやる気ひとつでアイディアは
健康を病んで初めて有難く
ハートまでピンクに染める山つつじ
うぐいすで畑仕事の手が軽く

大阪府　藤井郁代

両手から夫が消えた青の天
おくやみの涙にしてる花粉症
桜花まつ亡夫とあいびきする日まつ
花粉症となりも涙拭いてはる
たこ焼きを立ち食いしたい花月前

篠山市　谷田多美子

ゴールまで若葉マークで行く浮き世
料理自慢腕が邪魔するダイエット
誤作動で喜劇を演じさせる脳
大フィルを聴けた平和がありがたい
褒め上手先生にして励む趣味

奈良県　江波正純

キッチンの椅子で私の貌になる
菜の花の黄に染められて脱皮する
竹の子のようにセーラー丈がのび
籠の鳥春の窓から飛び発ちぬ
とりあえず満腹にして策を練る

和歌山市　内田結実

人情があって商い続く町
一〇〇円玉あふれる品に迷ってる
昭和史を見てきた家具で捨てられぬ
青虫も私も翔ぶ日夢みてる
杖でないステッキですと春の道

和歌山市　土屋起世子

四月馬鹿　自問自答の陽と遊ぶ
春は名のみの日本列島助走だな
春愁の中で溢れてゆく月日
不器用で風と流れて野に出ぬ
春がすみ　わたしの悩みかも知れず

田辺市　大峠可動

和歌山県　森下順子

乙女の祈り聴いてセンチな雨の午後
混沌の世にもきれいな花が咲く
無駄遣いしてはストレスちょっと捨て
自愛して生きてゆきますあと少し
吟行会詩人もどきになるわたし

鳥取市　永原昌鼓

あっけない命にしがみついている
いい汗をかいて信じる明日の風
凍る手を温めてくれる人といる
メンバーの一人転べばみんなこけ
凍てついた土にも明日の芽が宿る

鳥取県　前坂なお美

若い娘にまじりお義理のチョコを買う
チョコレート愛するひとにだけあげる
でこぼこの道もなければ通れない
人の道に背くことなく生きたはず
相性がよくてやっぱり猫が好き

鳥取県　西垣美知子

みたされておかしくなった世がこわい
合掌は心の扉あける鍵
運のない汗を夫婦で慰める
夢一つ叶うと次の壁に会い
子や孫と同居でなごむ朝の膳

鳥取県　奥田保子

何よりも笑顔ひとつの嫁が良い
スマイルがまわりホットにしてくれる
ボランティア自分磨きのチャンスかも
ほどほどに用事があって惚けられぬ
愚痴多い私に息子釘を刺す

鳥取県　平木公子

連れ添えばだんだん顔も似るらしい
雪に耐え竹は飛躍の時ねらう
竹馬に子より爺さん嬉しそう
叱っても逃げ場はちゃんと置いてある
初出勤しっかり靴のひも結ぶ

鳥取県　山下節子

雑魚だって明日の夢は持っている
老いの背に人生の影にじんでる
老骨をいたわりながら農守る
ヘソクリが内緒に出来ぬほどたまる
しあわせはパートナーいる孫も居る

出雲市　荒木英子

雛祭り孫の笑顔に生き延びる
土手の道土筆見つけて暖かい
春うらら鼻うたも出る散歩道
言い訳に心なごんで赦し合う
後戻り出来ない今を悔やんでる

金封に夫の顔を立てておく
抱いている友情という宝物
出雲弁まる出しにする輪が温い
感情を抑えた今日の長いこと
それからは段差を足に言い聞かせ

島根県　武島ちよえ

かすみ草ばらの仮面をつけたとて
同じ絵がゴッホとわかりゼロの数
小吉を愛し人生つつがなし
一枚の写真のような五七五
貧乏神に届いたらしいお賽銭

岡山市　大森純子

真っ白な表紙も裏の顔がある
幸せの切符へ並ぶ手を洗う
愛燦々　輝やいている愛子様
お祝いの中味きょうだい横並び
ハミングがつい出てしまう春の土手

岡山県　国米きくゑ

白酒に酔ったと祖母もひな祭り
花見酒無口の舌がよく滑り
美しい涙　女の武器にする
上品な言葉でチクリ刺す皮肉
半世紀過ぎて再会筒井筒

宇部市　高山清子

しなやかに謙虚に生きる自然体
玉よりも磨けば光る石を買う
影連れて同行二人鈴が鳴る
心まで緑に染まる遍路笠
お遍路の道なき道の野菊咲き

今治市　渡邊伊津志

どんぐりの中で目移りなどしない
アクセルを踏むと視界が狭くなる
均等法女にだってある度胸
イメージを変える濁点打っている
生き方の違いを思う分岐点

愛媛県　花岡順子

病んで知る健康という宝物
隠し場所忘れて夫が焦ってる
平凡という幸せに気が付かず
ボケそうで心のネジはいつも捲く
無理にとは言わぬと無理を言ってくる

高知県　百田幸

しおらしい妻の言葉に身構える
周波数妻に合わせて波立たず
妻の明るさに足元照らされる
終電で駈けつけ父と北枕
書き込んだ予定表から鞭打たれ

唐津市　坂本兵八郎

京都市　清水英旺

肩ぬらす氷雨よ春は遠からじ
右往左往　中古の知恵で生きている
古書店の澱むにおいは本の息
終身雇用　寄れど大樹が根腐れる

大阪市　尾崎黄紅

ひとはそれぞれ巣箱の中は覗くなよ
老いの余白は赤色か黄の色か
技を盗むこととは罪にならぬ術
本屋の閑は新刊を読んでいる

神戸市　山田婦美子

今と言う旬は今だけ寒椿
胸中を見すかされそな寒の月
よい妻でいたくて少し角を折る
わだかまり取れて笑顔の嫁姑

愛媛県　安野案山子

真っ直ぐに生きて周りを傷付ける
元旦の決意が少し褪せて来た
マニュアルのとおりになって物足りぬ
満腹の脳に集中力がない

鳥取県　竹森富久江

母さんと見た夕焼けの古い椅子
峠から見てみる父母の峰づたい
陽春の鏡で明かすかくれんぼ
ひたすらに走り二人だけのゴール

奈良市　乾春雄

人生の流れを変えた句読点
わくわくとカプセル開く同期会
カタカナとダンス苦手な戦中派
ぴかぴかの靴は怖さをまだ知らぬ

鳥取県　福西茶子

拳では泣かぬが情けには泣ける
幸せになると不安がつきまとう
テロ許す国が地球をかきまわす
棘のないバラなら買ってみてもよい

札幌市　三浦強一

雪解けの川が奏でる早春賦
白票とするせめてもの自己主張
慰めの酒人肌の燗がいい
年金で幸せごっこしています

八尾市　平川幸枝

潮騒のジーッと力を蓄える
松林ぬけて潮騒生まれけり
雛あられ老女三人かしましい
比べなきゃ満足できる余生です

鳥取県　吉田弘子

運命線現在位置はどのあたり
繰り返す歴史古着がデビューする
結び方いろいろ風呂敷の活用
始業ベル元気な子供ひとのみに

雛まつり曽孫四人のお姫様
天気予報ダルマの消える日は何時か
木になりたい黙して人の世界見る
川柳と二人三脚あの世まで

青森県　福士トキ

階段の足音今日もリズミカル
兄妹の歩幅わずかにズレ生じ
三三忌やっぱり父母にありがとう
雑踏に亡母かと思い振り返る

日高市　根岸方子

不器用に生きても野草強くのび
夢を編む足りない糸は炎える朱を
人生の音色を胸に傘寿越す
細胞のつぶやきを聞く耳の奥

野田市　那賀島雅子

四捨五入されて良い時悪い時
遺伝子を大事にしたい鶴
夕焼けが溶かしてくれた嫌な事
幸せが両手いっぱいある怖さ

東京都　清原悦子

友からのいかなご春を告げに来る
ランドセル週休二日持て余す
冒険が出来ず髪型変えられぬ
春風に乗って花粉のお邪魔虫

横浜市　巌田かず枝

ウオーキング花粉のせいにして休み
夢を見て歩けば空に花粉飛び
心なし夜空の星が増えて見え
赤ペンの添削偲ぶ満秋忌

横浜市　平達也

故郷の木をまず植えるお引越し
さっぱりと切捨てたウツまだ死なぬ
夫婦愛喜寿が押してる車椅子
喜寿過ぎてやっと天地の味を知る

横浜市　長島亜希子

非常口何はともあれ探しとく
年の功いい旅にしたバスガイド
決め手欠きオンリーワンが選べない
積み立ての訳は秘密にしておこう

横浜市　石原三郎

有難や今年も桜に逢えました
町角の眼科が流行る春嵐
義理チョコの味も知らずに歳をとり
低金利痺れきらして株を買う

横浜市　布山嘉信

故郷のりんご安全丸かじり
木材の良さはいわれぬ杉花粉
暗闇にここにいますと沈丁花
増税に己が歳費は棚に上げ

新しい帽子にかえて春の道
泥まみれ球に飛びつく野球帽
カルチャーに生きがい見つけ紅をひく
日だまりに包丁研ぎが背を丸め

川崎市　浦野昭志

深夜便聞いていますと老い仲間
揚げ足を取って国会日が暮れる
花便り聞いた翌日雪が降る
金箔の酒金持の気分がし

新潟県　高野不二

義理買いの着物タンスで欠伸する
今更と思う気持ちが老い誘う
孫達へ合わす目線を下げて見る
こだわりの深さ頑固に妥協せず

富山市　松見たえ

階段を一気に上って職がない
夫への愚痴聞き流す寡婦の耳
がむしゃらに生きた涙は脆くなり
百万のバラをあげたい黒枠に

静岡市　中西雅

円周率考えながら散歩する
しょうが湯で母が教えたなおる風邪
武蔵見る徳川夢声は覚えてる
莫山の墨絵の景へ旅の道

草津市　久保和友

雪だるま冷凍室に鎮座ます
雪掻きの苦労も知らず雪愛でる
地下鉄の階段上り春を知る
孫の日と名付け年金搾るよう

大阪市　井丸昌紀

タマちゃんの勇気もらって一人旅
亡き母へつぶやきいつも頼み事
願わくば納得のいく召され方
力持ち女ですけど魅力的

池田市　多田契子

黄水仙一ツ遅れて母の忌に
遠慮なし回転寿司は娘のおごり
卒園のコサージュ胸に大きすぎ
一番に報告したい母は居ぬ

和泉市　横山捷也

金婚も無事通過してはや五年
倒産に社訓の額の行きどころ
恩忘れうらみつらみを愚痴る修羅
伊達男羽織裏地に粋極め

泉佐野市　備後三代子

人の川流れて河は止められる
またひとつ恥を増やして日が暮れる
青春日記息も爽やかレモンの香
息かけて眼鏡拭いてるマジな顔

柏原市　伴洋子

菜の花の黄色は春の行進だ
退職の時からぼくが被扶養者
四十年借りの溜った妻と居る
さあ来たぞ孫守りモードにシフトする

交野市　田岡九好

肩の荷をおろしぼちぼち行く余生
少子化の一翼荷う孫の守り
よもぎ餅供えて妻の三回忌
とは言うて歳に不足はないけれど

河内長野市　大西文次

金子みすゞ読んで自分に泣けてくる
芽吹く頃またうつの神やって来る
歯科医師にあわあわあわと返事する
難民のニュースに今日を感謝する

河内長野市　印藤智子

オープン戦今年の虎は大丈夫
あたたかい話を探す声の欄
心ではわかっているが口すべり
娘の門出　旅路平安祈る父

河内長野市　木太久正一

よいことがあって若さをとり戻す
点滴の滴一てきにあるきざし
平凡な平穏がよい古希路なり
禁酒日は甘党と化す刻となる

岸和田市　亀井皎月

人と人あいだを保ち仲が良い
花の香をかぐ時なぜか目をつむり
嬉しいとなぜかみんなに優しいな
自分史にやさしい言葉残してる

岸和田市　土橋房枝

伊予絣みやげと言えぬ値札なり
本物の笑い涙を拭いている
国宝の話術しっとり笑わせる
ささやかな幸せ目白を待つミカン

堺市　藤井一二三

展示会目はゼロの数追っている
着飾ってホテルのロビーで聴くドラマ
叱られた孫を庇って叱られる
溜息をひとつ残して椿落ち

堺市　柿花和夫

ゆったりと命労わる仕舞風呂
共白髪生きる歓び春うらら
ほろ苦い思い出疼くおぼろ月
お別れを切なくさせる春の雨

吹田市　須磨活恵

山と谷　歴史を繋ぐかずら橋
自分史の中のおだやか探すほど
漢字クイズ老いの美学と髭を撫で
鎮魂の思いを込めて植樹祭

高槻市　執行稲子

高槻市　田中初恵

無理してる笑顔般若の面になる
いやなこと聞こえぬ振りも芸のうち
ホワイトデー義理チョコ組の渋い顔
ゴッホだとわかり凡作騒がれる

豊中市　藤井則彦

献血は白いテントがよく似合う
きっと死ぬならば慌てることもない
芽のように恥じらう孫が夢語る
芽が出たぞ出たぞと走る孫二人

富田林市　稲川惠勇

豊かさが生んだ産廃もてあまし
意味深なウフフに図星かわされる
決断は桜吹雪を抜けてから
春一番散り散りの拉致思いやる

羽曳野市　吉村久仁雄

野仏とレンゲが諭す不戦論
外人へ老母がもてなす河内弁
方言に口説かれ土産五つ六つ
子にすればパパ変人でママ奇人

羽曳野市　濱口フジ

先輩の第二ボタンを予約する
春休み心のびのび遊園地
有名校　試験地獄の勝ち残り
春花の植え替え時期の日のひかり

東大阪市　今岡貞人

あと一歩ゆずれば風のおだやかさ
白っぽい烏にならぬようにする
温室の中の評論家が吠える
ケ・セラ・セラ天狗の鼻はよく伸びる

枚方市　大昇隆広

じっと一人耐えてモルトは琥珀色
真実の理より人には和のなごみ
明日の苦へなかなか消せぬ床灯り
町工場トタンで耐える地力あり

藤井寺市　若松雅枝

春の夢自由に天地駆け巡る
横向きの字もある母の温い文
露天風呂ゆったり命延びる音
ストレスをほぐしてくれた母の里

藤井寺市　俣野登志子

赤い服着ても居座る今朝のうつ
盛り付けも味のうちだと教えられ
読むつもり読めるはずない積んだ本
水温む日がな一日庭仕事

藤井寺市　西村栄一

居酒屋の隅で自分と飲んでいる
いい時もあるさ落胆していない
学校と家庭でしつけ譲りあい
その旅の終りを知っているカルテ

乗り過ごしもう一眠り環状線
ああ言えばこう言う二人仲が良い
秘書だけが悪いと誰も思わない
死ぬことは生きることよりむずかしい

箕面市　寺井柳童

国民を一つにさせた拉致騒ぎ
旅三日仏さまにも声をかけ
就職の波にのれないさるすべり
汚染する川は昔を語らない

八尾市　松葉君江

よく見れば目が笑ってる孫の嘘
幸福は身の丈ほどで丁度いい
子から孫かわって電話長話
弾む音郵便受けによい知らせ

八尾市　西川義明

なによりもかわす言葉が馳走です
街中をひと筋変えて旅気分
ばあちゃんと呼ぶ許可証は孫にだけ
生き甲斐を小さな輪から夢一歩

八尾市　脇俊子

凛と咲き水仙春を呼びおこす
人生の下り坂には加速つき
神詣り途中で神とすれ違う
誕生も死も吾が始末つけられず

大阪府　野田栄呼

啓蟄の虫がおどろく世の不穏
背伸びせず人生航路歩み行く
正座して法話聞く足しびれくる
さりげなく振って選ってる花の種

大阪府　桑田ゆきの

大学生一人暮しに夢を抱き
つぼめの子顔より大きな口をあけ
雲一つなき青空に心晴れ
思い出を残し去り行く宝塚

大阪府　東文江

中の中　肩の凝らないいいところ
他人の飯食って背筋がしゃんとなる
ライバルは僕にない武器持っている
やわらかい言葉にうかと気を許す

神戸市　山口光久

初節句主役の孫が眠ってる
すぐ乗ってくるから頼りない味方
初孫の写真飽かずに眺めてる
改革の総理の笛が錆びている

神戸市　伊勢田毅

先先の心配したら日が暮れる
日帰りの旅でも土産両の手に
スイッチオン昨日と違う今日を生き
忘れずにやって来ました花粉症

神戸市　田中章子

尼崎市　河津正治

熱燗に愚痴も煮込んだおでん添え
宿命を背負う遍路の影重く
逃げながら考えている次の駒
手鍋提げそんな時代を振り返る

川西市　井本清山

年金が省略させる小さい義理
顔色を誉めて安心さす見舞い
深呼吸朝日を独り占めにする
年金のおかげ楽しいミニツアー

三田市　石原歳子

競いあい夕餉のお菜土筆摘む
万葉に詠まれた野草食べてみる
威勢よい御用ききには背筋伸び
知恩院今も生きてる甚五郎

宝塚市　飯西ミサヲ

古ボタンぎっしり詰った思い出よ
悩み事生き甲斐共に消えて行き
ふらふらと五月の風に甘えよう
物忘れつづいて冷たい雨が降る

兵庫県　安達厚

一人消え一人増えてる老人会
憎まれよう　も少し生きていたいから
ストレスがあって大法螺ふいてみる
無位無冠これを自慢に生きている

兵庫県　黒崎美紗子

ひとり居の同じ暮らしでうまが合い
汗水を流し手にした別世界
国会のテレビ写ってうつたまる
Eメールかわした若い友ふえた

奈良県　藤村重之

大宇宙神がつくったシャボン玉
人生を読み解くキーが見つからぬ
忘却の彼方はきっと心地よい
影踏んで痛くないかと孫が聞く

和歌山市　喜田准一

確とした論旨で何故か気に食わぬ
ジャンボくじ当ればきっと奢るから
同じ目線という傲慢な言葉
つい本音消し方にある上手下手

和歌山県　辻内次根

晩学の笊から漏れる記憶力
マイホーム隣近所も資産価値
方向の感覚無くす退職後
一枚のガラスを透けてくる冷気

和歌山県　中村君枝

空とぼけこれも長寿の秘訣だろ
正論も影の力に負けている
恋ごころ忘れずいようまだ夫婦
がみがみはよそう残り火穏やかに

和歌山県　村中悦男

店じまい風も重いかのぼり旗
だんだんの混色きらう画布の私語
沈む陽に平凡な明日乞う祈り
たんたんと遺影は読経聞いている

鳥取市　山口千代子

傘寿過ぎ次は米寿に橋をかけ
宇野千代さん逝っても桜生きている
義理という二字が重たい老い一人
死ぬるまで母なればこそ子を案じ

鳥取市　大坪天涯

母の結う三つ編が娘によく似合う
愛と憎どこで妥協の手を握る
うしろ指さされる酒のにがいこと
見た目には暗い路地だが鶴が居る

鳥取市　森美智代

長引いた風邪に春一番が吹く
茶髪にも慣れたらみんなかわいいね
桜見ぬ友の訃報に声も出ず
今年見る桜悲しいピンク色

倉吉市　青砥菊枝

切なさが好きで聞いてる神田川
ときめきを押さえ切れないジンフィズ
平成の堪忍袋紐が無い
前向きに余生実のある日々にする

倉吉市　森川あらた

土壇場にならぬと腰が上がらない
のんびりとしているほうが性に合う
楽ばかりすると神にも見捨てられ
肩が凝るほどに脳みそ詰めてない

米子市　足立由美子

道順を変えて辻褄合ってきた
勇気ある一歩だったと書きしるす
草も木もみんな勢いづいて春
シナリオを日々少しずつ変えている

米子市　猪森スミヱ

大漁旗いかの踊りがまだ続く
空に浮く今日の大山厚化粧
手みやげに笑い袋を提げてくる
捻子巻いて七度回った年男

鳥取県　細田裕子

竹とんぼ夢があるから飛んでみる
青竹の正論ばかり息つまり
ケイタイを切ってしがらみから逃げる
やすらぎを求めて家路灯があかい

鳥取県　鈴木一弘

子育てを野性に学ぶ母性愛
耕して生きるてだてを地に学ぶ
ふる里はご先祖さまが山で待つ
ひと言が胸にしみ入る好きなひと

人間が生きてりゃゴミも出てしまう
妻とお茶ほっとひと息孫の留守
親不孝詫びて彼岸の墓掃除
大物を狙い釣り餌播いておく

鳥取県　竹信照彦

川どてにどかっと父のいさみ肌
星あおぎ厄年払うことにする
水際を歩いて人になってゆく
陽だまりにお礼いってるひとり言

鳥取県　平尾菜美

期待して育てた孫が初仕事
花咲かす気持を誘う風が吹く
万一の夢を買います宝くじ
ウツ病を決心させた赤い花

鳥取県　橋谷静江

登っても山の後ろに山がある
深夜便昭和の歌を子守り歌
手の届く範囲で遊ぶ淋しがり
口紅を春色にかえ待つつもり

松江市　松浦登志子

春の影ゆらゆら連れて散歩道
人間へサイン出してる絶滅種
褒め上手翼広げてみたくなる
相性へ折り合いつけて三世代

松江市　松本知恵子

日脚のびやさしい風に会いに行く
ときめきはなくさぬように使いたい
同じなら楽しいひと日送りたい
はらはらもどきどきもして孫の守り

松江市　山根邦代

丸じるし増えて忙しい春暦
初恋に揺れた遠い日同じ雪
温泉で活気溢れる村起し
母の袖縋り遠い日貰い風呂

出雲市　加藤スズコ

生きるとは素晴らしきかな蕗のとう
枯れそうであれやこれやと気にかける
惚けたかナ自分で言えるうちはよい
こんなときまたおばあちゃん負け上手

島根県　菅田かつ子

ふる里が変る藁屋根消えてゆく
いつからか最年長という上座
戦友が逝く冷たい風が吹きぬけて
私を裏切らぬのは影法師

島根県　福間博利

両隣り幼児の声に生かされる
腕白もいけずもみんな宝物
ときめきをいつも懐入れている
古写真昔の夢を呼び覚ます

島根県　毛利幸泉

倉敷市　撰　喜子

末枯れの庭に花咲き自己主張
水仙の匂い取り持ついい出会い
曽孫から祝いの花を抱きしめる
菜の花の色に溶けこむ蝶の精

松山市　山之内　八重美

兄弟も番狂わせというさだめ
幸せにまさかまさかの事が起き
思い出を辿れば氷雨降りつづく
遍路径水子地蔵に逢いに行く

今治市　野村清美

ぼんやりと何を思案の月の暈
あす開くバラの鼓動を聞いている
優しさに孫の手紙を読み返す
紅い口嘘がころころ転げ出る

高知市　伊野部　和江

やり直すチャンスを貰う白い明日
夫の出張五センチ程度手足伸び
ホワイトデー妻が白けて選ぶ品
ストレスの量に比例する肥満

南国市　小原圭二

役まわり知らずに咲いたかすみ草
人情に触れる喜びへんろ旅
焼き鳥と昔ばなしではずむ酒
ふる里に留守居役する墓ひとつ

高知県　桑名孝雄

七十路でもうとまだとのせめぎ合い
座右の銘いつも変わってただの人
五月病そんな余裕のない不況
女性専用車輛に関係なく乗れる

高知県　近森功

妻の留守自問自答の追加酒
初恋の復習をする茶飲み友
咲いたよとナースは窓を開けてくれ
高千穂に昔を拾う一人旅

高知県　貞岡佐紀子

少年はポケットの中拳秘め
趣味の道足音だけで跡がない
お世辞だと知りつつ挫折免れる
見て見ぬふりだんだん上手くなってきた

ニューオリンズ　阿良喜　聆

おばあちゃん椅子に正座で鍋料理
戦中の吝嗇が未だにつきまとう
分からない上半分のカタカナ語
良い夢が買いに行かせる宝くじ

アルゼンチン　松井美稚子

公園で染みの手重ね老いを剥ぐ
遺伝子が切れてしまった親不孝
二国語で馬鶏犬も小言聴く
たまさかの客に盗られた予定表

凛とした自分らしさに磨きかけ
足腰をいたわりかばい春をまつ
夢でなく心の旅路膨らます

鳥取市　岡田信恵

優しさを投げて見守る参観日
諦めと希望はいつも立ち代わる
図星避け外堀埋める老夫婦

堺市　河盛龍三

仕合せは無念無想の仕舞風呂
雑用に追われて早い春の暮れ
天高くもやもや晴れて湧く力

出雲市　川島和歌子

そっとしてほしい親切だってある
出張の離島を探す母の地図
添えた日は十年ばかり曽孫居る

宜野湾市　杉谷一栄

痩せ我慢するなと雀よく囀す
少年よちょっと青空見てごらん
頂点は望まないよと根を肥やす

鳥取県　横田春名

野の花とちょっと一服畑仕事
健康に良い事し過ぎくたびれる
抱きしめて涙うかべて叱る母

和歌山市　根田美子

糸切り歯糸切り出来ぬ歯の嘆き
頑張れの言葉嫌いな歳になり
鳶が生んだ鷹は遠くへ行ったきり

八尾市　中島春江

実印を押された紙が騒ぎ出す
スナックに命を洗う水がある
したたかに生きて大きい指のふし

八尾市　與田明

矛先をかわす話術も芸のうち
シニアへの特典消えてゆく無情
ほくほくのおでんが解かす蟠り

和歌山市　今一歩

嬉しいことあったか孫の字が踊る
亡母の味継いだ私も同じ味
アルバムを開くと過去が目をさます

羽曳野市　福田悦子

一本のバラが心を和ませる
一本のビール夕餉がうまくなる
母の声聞き分けている三ヶ月

倉吉市　酒井芙美子

綿入れを縫うと背中に母がいる
寝たままで法話聞いてるラジオから
日曜日　心休まる日でもない

京都市　三宅満子

飲むほどに文殊の知恵の出る仲間
万札の足の早さよ世は無情
野良犬が顔を見てから従いて来る
宿り木も自前で生きるたくましさ
増税に負けぬ止めない酒タバコ
わがままが通る家庭の料理良し
播磨灘元気いかなご飛び跳ねる
杉の子に罪はないけど花粉症
看る方が悪い事する塀の中
視ただけでテレビ体操したつもり
プロ選手年上妻とうまくいく
片想い憧れの人上級生
細心の注意も洩れるシャトル事故
ジャンボくじ夢砕け散る大晦日
盆梅展　幹は朽ちても八重の花
連発のクシャミに乗って春が来る
制限速度守り迷惑そうにされ
儲かります甘い誘いの落し穴

東京都　井上つよし
三重県　南海美知夫
大阪市　平井露芳
大阪市　中村忠敬
大阪市　池上清治
大阪市　寺井弘子

遠くから呼ぶ声母にだけ聞こえ
説明はいらぬ子の目を信じよう
きっちりとけじめつけたい核兵器
思い出に二人歩いた延命寺
神社めぐり小銭ないからやめとこか
人の和で楽しくしてる五目並べ
四国路は広いと思う遍路旅
ばあちゃんの肩もむときは下心
少子化でお下がり着る子今はなし
合格を祝う至福の親心
しだれ梅まあるく咲いて春を待つ
一人鍋つついて想う二人鍋
公約は守らなくても言う総理
散髪代惜しい気がするうすい髪
旅先で気になる老母のお留守番
二代目に生まれ重責持て余す
泡飛ばし世界論じる立ち飲み屋
定年の同期とばったり寺巡り

和泉市　千葉武
河内長野市　内海綾乃
岸和田市　坂口英雄
岸和田市　堤楢代
堺市　荻野像山
堺市　奥時雄

吹田市　二宮栄子

バアバの料理うまいうまいと世辞を言う
ごめんなさいが素直に言える児をほめる
住めば都ここ九州もよかところ

高石市　小島百恵

ミヨちゃんもミミズも春を待ってます
疲れ果てた体に明るすぎる部屋
気を遣いだんだん背中丸くなる

高槻市　安田忠子

温かい言葉が欲しい玉手箱
遍路道　氷雨に打たれお茶うまし
幼子もバレンタインにチョコもらい

高槻市　大崎侑子

一人旅ひょんなことから二人旅
落ちこむな貧乏くじも思いよう
捨てる度もう買うまいと思うくじ

高槻市　浅田憲夫

顔馴染笑顔の奥が読み切れぬ
不思議やな鏡の僕はいい男
宿題を父が請負う冬休み

豊中市　源田啓生

競わない餌で翔ばない鳥も増え
北の核平和憲法砕きそう
桃の花少し老いたる女雛連れ

寝屋川市　中川恵香

カラオケで二百円なり主人公
電飾に癒し求めて温暖化
階下から携帯使って起こす妻

羽曳野市　永田章司

土筆とり幼き恋の育つ里
退院の喜びを増す家の風呂
大臣の椅子にはびこる黄金虫

枚方市　荘司弘之

せわしげに季節先取る百貨店
図書館で鼾かいてる元戦士
ホクホクの焼芋似合う新聞紙

枚方市　小川良吉

粉飾で人も会社も信なくす
遣り手秘書議員になって被告席
議員にも賞味期限が必要か

藤井寺市　増井ヨシ枝

オーイお茶呼ぶ夫もなく春の風
いつ見ても笑顔嬉しい車椅子
初夏の風一杯入れる窓をふく

藤井寺市　喜島芳江

動物の親見習えと叫びたい
留守電に言葉遣いを少し変え
取れるだけ取ってチョッピリ戻し税

藤井寺市　鈴木いさお

我武者羅に駈けて六十路へ辿り着く
リタイアしさてどう登る老いの坂
こころ詠む十七文字に魅せられて

藤井寺市　吉田喜代子

中国と相撲にならぬ町工場
子に振られ夫婦見つめる旅になる
足癒えて心が騒ぐ靴騒ぐ

藤井寺市　伊藤アヤ子

ためらえば春一番に笑われる
たっぷりと春陽を浴びて咲く桜
筆跡がなつかし亡父の古手紙

八尾市　田中トシエ

我が人生楽しむ秘訣四季がくれ
ランドセル試験地獄はまだ知らず
手短な父の助言が的を射て

八尾市　寺井はじむ

仰げばを歌ったあとに来る未来
閉ざされた国を相手にアメとムチ
孫がくる未だかまだかと踊る胸

大阪府　高木道子

春の陽が部屋の隅々覗きこむ
飢えていた戦後が遠いダイエット
春めくも何やら不気味北の方

大阪府　前田ゆい

うどん打つノウハウ聞いている平和
殻を脱ぎ蝶になります春だもの
願書持ち茶髪も止めたリクルート

大阪府　畑中節子

何となくうれし恥ずかし誕生会（七十一歳）
いそいそとコートを脱がす春の風
踏まれても土持ち上げる蕗のとう

大阪府　大向ナツ子

もう少し急げば逢えた母の笑み
雛菓子で埋めつくされたお仏だん
姑さん何処にいるかとつい捜す

尼崎市　桑原東園

油断から火のないはずが立つ煙
童歌聞きたい草や木も芽吹く
口癖の呟きを聴く古時計

尼崎市　古川正子

押絵雛今年も出せて嬉しい日
絵手紙を友よりもらい飾ってる
牛乳に黄粉を入れて飲んでます

三田市　辻開子

仏前に柳誌三冊位牌読む
嫁姑別居してから良さ学び
弥生雪庭も心も白くなり

姫路市　服部一典

席順はどうでもよいがくじ作り
綺麗なバラ　トゲがあるから手折りたい
生きたい死にたい矛盾の老いひとり

兵庫県　岩本美緒子

晩学のパソコン挑み二歩三歩
キーを打つぽつぽつ指は揃ってる
春待ちの老いを焦らす画布がある

奈良市　成橋邦造

もう捨てたまだ捨て切れず欲の皮
のんびりとこれから先はケセラセラ
人生のカーナビあれば苦労なし

奈良市　田中賢治

発車ベル子連れの親はドア押さえ
皺の手で光り物かう娘に譲り
道路掘りまた埋めて掘る年度末

奈良市　中島公市

ありあまるお菓子を出して妻の客
煮カツオとこんぶ豆置き妻出かけ
七病を持って何とか生きてます

生駒市　小西稔

宇宙船わずかなミスで散るいのち
職離れ心配事は体のみ
塾通い親の心配知らぬ孫

和歌山市　橋爪佐一

雛人形買ってやりたい孫はなし
妻の顔生け花始め皺がとれ
長寿坂わたし楽しくペダル踏む

和歌山市　北村光男

方言のやさし言葉の土産買う
寿の座布団ありて敬老日
残り柿寄り添う姿愁い見せ

鳥取市　西尾敬之介

和太鼓のリズムが揃う若い衆
神主も老いて祝詞も力なえ
精一杯就職浪人腰かがめ

鳥取市　谷岡清子

お人好し素直な耳を持っている
七坂を越えたおでこがよく光る
ひな飾り見とれお菜を買い忘れ

鳥取市　近藤秋星

梅開く春が去んだり戻ったり
秒針は哀し瞬時も休まざり
分らない方がよろしい先のこと

鳥取市　河田のり代

長電話夫の欠伸も気にしない
好きなもの食べて減量さがしたい
小言いう言葉を選ぶ間が長い

倉吉市　前田喜美子

平服と書いてあるけど気をつかう
貫禄を見せて父さん丸い腹
達者かね時々脳に問うてみる

倉吉市　大下智子

軽いうそついて安心させておく
留守の子に何を買おうか旅みやげ
ライバルのいた学校がなつかしい

米子市　小塩智加恵

介護保険値上げ通知は人並みに
お隣もごろごろ旦那持ちあぐね
思い出す亭主元気で留守の頃

米子市　池尾保子

ラーメンとカレーで済ます父子家庭
川柳のおかげ漢字がすぐ浮かぶ
体から覚えたことは忘れない

鳥取県　山岡久枝

幸せの種をまく春いそいそと
花匂う朝陽を拝み深呼吸
ぶらんこが大きく揺れて迷いだす

鳥取県　岡村孝明

客席を沸かせる芸に小屋揺れる
大根にしみた味噌あじ亡母恋し
役付きの名刺が里へよいみやげ

鳥取県　西原真一

増税が決まったけれどタバコ吸う
二十年何もできず日が暮れた
入社後はきびしいノルマ待っていた

鳥取県　岩崎和子

靴下を履かせてもらう頼りなさ
寒戻り痛みに耐える長い夜
死火山と思った病い立ち上がる

鳥取県　蔵本悦子

血液をサラサラにして春に会う
信じ合えば地球がもっと丸くなる
日の丸に祖国が愚痴を言っている

鳥取県　池澤大鯰

老妻に呼び出しかかる春の宵
石頭砕いてみたら石っころ
アドバルーン上げてはみたが置き去りに

出雲市　栂ミツヱ

お正月親子ではずむ雪だるま
雪景色ほのかに見える地蔵様
宮参り今年も無事と願い打つ

安来市　原煩悩児

春光が萎えた心身輝かす
とどのつまり僕の遺産は何だろう
国連で何時も後手踏む日本国

島根県　持田多輝子

紅引いて心の孤独そっと拭く
風紋は砂に画いた神の画布
息子の声が父に似て来た声変り

尾道市　光吉裕

歯を磨くいのち培ってる通路
新物とわざわざ書いて疑われ
言い逃れ血液型に擦り付け

府中市　馬場利子

さわやかな風が弾ます農の指
東北弁抱いたリンゴの宅急便
まな板のくぼみが乾く妻の乱

府中市　岩本雅代

肩並べ友は淋しい園住い
ヤングママ　ジーンズ姿さわやかな
仲間の輪おしゃべりハズミ食事あと

東かがわ市　松村輝夫

日記帳証になると人の知恵
意地張ってストレス溜める落し穴
乗合いバス河畔の桜癒される

香川県　向山治延

四国路は大師をしたい春遍路
散る時期を知らぬ造花は色があせ
日曜も休んでおれぬ洗濯機

愛媛県　宮本末子

工程を見せて安心売る名菓
凍雲の遠さは父母を恋う遠さ
聖書とは信じる人の持つ重さ

唐津市　岩崎實

平和への願いのデモは繰り返し
預金残危うし何をきりつめる
眠れない夜を過ごして妻といる

川柳塔まつえ二〇〇号記念川柳大会

日　時　**6月29日**(日)　11時開場　13時30分開会
会　場　松江テルサ(JR松江駅前)　℡0852―31―5550
会　費　2000円(大会誌・記念品)　昼食各自おとり下さい
お　話　川柳塔社名誉主幹　橘高薫風氏
兼題と選者　各2句　締切12時30分　席題なし
「バランス」長谷川博子選・「湖」金築雨学選
「進む」佐々木裕選・「つなぐ」原章峰選
「栄える」小林由多香選・「表紙」河内天笑選
事前投句　「力(ちから)」　恒松叮紅謝選
事前投句先　〒690―0015　松江市上乃木9―23―22
三島淞丘宛　**6月14日(土)必着**
欠席投句拝辞　天・地・人賞あり
懇親会会費　3000円(会場にて当日受付)
主　催　川柳塔まつえ吟社

麻生路郎物語

―〝爆弾を抱いて来たる〟事件―

(17)

東野大八

川柳作家麻生路郎が、その全生涯を川柳に賭けた〝城〟は『川柳雑誌』であったが、その創刊号は大正十三年二月号でスタートし、昭和四十年九月号のナンバー四六〇号でそのタイトルの幕を閉じた。この間、戦時体制に協力して、三年九ヵ月の休刊冬眠期があるが発刊継続実数は実に三十八年四ヵ月間に渉っている。勿論このながい歳月の底には、人間路郎を押し包んだ風雪のなみなみならぬ試練の一とときが数限りなくあったことは言うまでもない。

そのながい歳月が川柳を介して、路郎の身辺に去来した人間群像―あたかもそれはグランドホテルの回転ドアの景観にも似ていた。人来たりまた去り、その集散離合の時の因縁は、路郎生来の性格を反映して、哀歓多い川柳日記を倦むことなく浮彫りにしていった形である。

「昔は路郎の性格は非常に激しかった。情熱そのものの人で、自分が思っていることをちょっとも味つけなく、水増しもせずに他人にいう人でした。非常に感情家でもあった為に、言葉に飾り気がなく、腹が立った時にはまるで犬か猫のように私達にいわれることもありました。亡くなられた福田山雨楼さんの文章の中に〝失礼ですが先生はちょっと子供のようなところもあります〟とありますように、ちょうど駄々っ子のようなとこがありました。それも自分の主義主張をあんまり潔癖に考えるからだと思ってます」(『川柳雑誌』・四六〇号麻生路郎追悼号〝思い出を語る〟葭乃)

「路郎の癇癪(かんしゃく)は、正義を押し通さんがための情熱の発露である。(中略)路郎の情熱もし豆炭の輪切りとならば、たとえ八人の子をなすとも、私は離婚を申込むであろう=葭乃記(昭和七年五月『川柳雑誌』)

この山雨楼メモの同じ頁に

「昭和七年一月十六日八宮神社の神戸支部新年句会に講演〝爆弾を抱えて来たる〟椙本紋太氏、社規により客員名簿から抜く」

とある。関西地元柳界の古参柳人の間で今も語り草のエピソードである。

ときに四十七歳の路郎自身にとっても、この件は生涯のうちでも忘れ難いワンカットであったらしく、『川柳雑誌』奉還号(昭和十八年十二月号)での〝苦斗四十年〟の中でかなり長いスペースを割きつぎのように記している。

―多くの句会へ出席したが、ただ一つ今でも遺憾に思う句会があった。それは当時健康を害していたにもかかわらず、押して神戸支部句会に出席した時のことである。その時の演題は今でも覚えているが「爆弾を抱えて来たる」であった。

当時『ふあうすと』誌の創刊間もないことであると思うが、紋太君からそれより少し以前に神戸支部を廃して支部の人々を呉れないか、ということであったので、「ふあうすと」創立の趣旨を訊いてみた。それが我社の方針と一致すれば、支部の人達が行くと云えばやってもいいと思ったからである。

ところが刊行の理由は単に雑誌がないと淋しいから出すのだと云うのであった。だから大阪へも支部は設けない、というのであった。その後、そんなことを忘れたような顔をして、大阪へ支部をつくったが、それはどっちでもいいとして、ただ淋しいからと云うような理由では神戸支部を廃止することはできない。支部の連中で『ふあうすと』へ行きたい人が

あれば自由だが、我社としては『ふあうすと』以外の人たちを相手に川柳の社会化運動をやっていく必要があるので、支部は廃止しないという回答を与えた。これは勿論支部の人達を通じて談じたのである。こうしたいきさつのあった後の句会であるだけに、紋太一派の神経が尖っていたのかも知れないが神戸支部の句会へ出席した紋太君が私に食ってかかった事件が惹起した。

私の「爆弾を抱えて来たる」という演題の概要は今でも覚えている。それは多年川柳の社会化を提唱してきた自分としては、今日漸く川柳が社会的に認識せられてきたことを欣ぶものであるが、川柳人の数のおびただしく増加するとともに、それだけ尤も危険な時期に遭遇しているともいえる。従来川柳を社会が認めなかった反面には川柳人自身の不勉強も勘定に入れなければならない。折角認められてきた今日、川柳人の増加によるレベルの低減によって、再び文化文政時代の堕落期に堕ちねばならないということは、寒心すべきであると警鐘を乱打したのであった。そして川柳への精進は死ぬまで続くのであるし、殊に至って地味な努力を続けていくのであるから、その覚悟でやらなければならないことを説いたのであった。

然るに紋太君はこの言葉をどう聞きちがえたのか食ってかかった。そしてその後の『ふあうすと』誌上で読むに堪えない罵言雑言を敢てした。支部同人はこれに対し大いに憤慨した。そして反駁文を書いてこれを発表して呉れと迫ってきたが、私はその支部同人が紋太君と目と鼻のところに住んでいるので、今後の摩擦を思い、支部同人を抑えてこれを葬ってしまった。ところが支部同人の幹部は私の親心が判らず遂に支部を去ってしまった。

私はこの事件直後、試みに金沢でも同じ講演をやってみたが、金沢では何等の事件を惹起せず、むしろこころよく聞いてくれたのである。私の手許には今でも支部同人の書いた反駁文が残っている。私はどこまでも柳界の平和をのぞんでこのことを発表しないつもりであったが、『ふあうすと』誌に残るあの一文が後世の柳人を誤解せしめるのを惧れるためここにこのことを書いておくことにした。

由来紋太君は謙恭な人として知られていたが、この事件に対してあの下劣極る言辞を弄されたのをみて、この謙恭について疑いをさしはさむようになったのである。人間誰でも慣れると先輩に対する礼を忘れ勝になるものであるが、従来川柳人の一部にはことにそれが甚しかった。紋太君の如く、誰にでも謙恭な人であると思われている人でさえそれがあるのであるから、他にそんな人があるとしても不思議ではないのかもしれない。

路郎の紋太観はこのあとも続いているが、冗長にわたるので割愛する。とにかく路郎の〝苦闘四十年〟の四頁にわたる全文中、この爆弾事件の回顧がかなりの比重を占めている点を注目したい。話に筋目を通す路郎の烈しい気性を示す好資料とも筆者は考える。

高鷲亜鈍（藤村青一）あてに椙本紋太が昭和三十五年八月八日付であてた原稿紙十三枚（四百字詰）の手紙が筆者の手許にある。支障なき部分を、所持者の許可を得たので紹介しよう。ただし、路郎の発表した上記の爆弾事件については直接何もふれられてはいない点が首尾を欠くが、紋太と路郎両者の心情的ニュアンスの相反するところが興味深い。長文にわたるので、必要個所の抜すいに止めておく。了承願いたい。

―まず最初に路郎・水府両氏のお言葉ですが、川柳雑誌社の門下だ、ということは私も意外です。門下でも会員でも社友でもなんでもありません。（筆者註―これは紋太書簡の冒頭にある字句で、この件の質問に対する回答のための執筆のようだ。原稿用紙のマス目は活字発表に備えてのあとが明らかだ）

ただ親しく接近した時期はありました。昭和四、五年前後だったと記憶しますが、二、三年間に亘って句評会に出席したのですが、その頃の『川柳雑誌』に毎号連載していますから外見上殆んど内部の人間に見えたかも知れません。当時、水府氏も紋太は川雑側だと私を警戒していたかも分らぬほどでした。

けれど、句評会への外部からの出席者とい

うだけの関係で、他に何んの意味もなかったのです。こう云ってしまえば、大変水臭いことになるので私は好みませんが、門下か会員かと関係を問われるとこの言い方になる。

ただ私としては、路郎氏を尊敬し、川雑を愛し、私自身の勉強になることも多大であったので、何や彼やをこめて、他意なく神戸から手弁当で毎月休まずに通ったことでした。

その頃までの関西柳界は、只今と違って主幹だの会長だのと云う制度的なものがなく、至ってのんびりしたものでした。東京柳界が先輩を先生と敬称しているのを内々笑っていると云った状態で、関西には先生の呼び方をしなかった時代で、至って平民的だった。

（中略）私は時々書いていますが、私には誰某の門下だとか、何門の出身とか、誰先生に師事したとか云うことがなく、多くの人の文章や句が先生であったのだから、今から始める人も自分で読んだり見たり聞いたりして自分で道を開くようにしてくれというております。そんなことで特に路郎氏の門下だとか番傘に師事したとか云わなくてもいつも両氏を尊敬し、私の方が後輩であることを念頭においておりますので、改って門下ではない、会員でないと無関係を云いたてることも私の本意ではありません。（中略）

川柳界の最初の先達である久良伎、剣花坊その他当時の人たちは、柳多留を唯一の教典としモデルとし、師として始めたのです。そして庶民的な味を尊重して、それを川柳の誇りとしたものです。それが東京では、以前からの雑俳界の風潮や気風が断ち切れずに続いていましたから、宗匠的な慣習も同時に抜け切れませんので、忽ち先生だとか門下だとかいう観念が結びついてそういう制度が自然に植えつけられたものと私は思っています。

このあと紋太の川柳人生の自己経歴が綴られている。それを手短に要約しておこう。

大阪の菓子店に丁稚奉公中の十七、八のころ投句などでひとり楽しんでいた。十六歳で父を喪ったので、小学校もろくに出ていない。そんなことから、初めて句会に誘われ、その庶民的な空気と味がわが身にしみて、本気で川柳をやる気になってしまった。『番傘』が創刊されたころ、当百さん宅の句会によく通い。出席率もよく、句も文も『番傘』へ発表し「ある時は客員といった名をつけられたが先方の好意によるもので、つけたりやめたりが二度ほどあった」。大正六、七年ごろ『つばめ』が廃刊したので、一枚もの二つ折を印刷したのがきっかけで『柳太刀』を創刊する。

「そのころには神戸にも四、五の柳社が出来、柳誌も出ていてお互いに競争意識を張り合っていましたが、私はどの句会にも出ていた。それが四、五年するとだんだん疲れが出て、どの柳誌も気息えんえんといった状態となり、各社の有志や浪人組がなんとなく、気分一新を望むようになったのです。

そのほか、いろいろの原因や動因がありまして、昭和四年六月から『ふあうすと』が出たわけです。私が四十歳の齢でした」

「この私が神戸柳界で最年長者であったことと、いつも世話を焼いていたということが親しかった番傘へも入らず、川雑と親しくしても会員にもならずに終ったのではないでしょうか。古参の青岸（仲間の）が熱心にやっていたころ、神戸は大阪の力をからず独立してやろうと、いつも云っていました。これは私が大阪の句会へ出ることを嫌っていたのかもしれません。その言葉が私の頭に植えつけられているのか、大阪に限らずどこでも何んでも頼りにしてはいかん、川柳人は独立独歩自分の力でやるべきものというのが私の主張です。ですから私は、弟子だの門下だのと——もし私を師のように云う人があれば説教するつもりです」

路郎も紋太もともに事業欲に燃えた四十代である。一方が三十年計画をたて川柳の社会化運動を川雑を拠点に日本中へ拡大しようと気宇雄大に構えれば、一方は十六歳で世間に出た庶民的人間川柳派の師弟制度をあくまで否定する。神戸中心の文字通りの『ふあうすと』という握り拳主義。爆弾事件とは帰するところ、その両者の違和感が、導火線の役割を果した、剛と柔の対決——そうもいえるのではないか。

愛染帖

波多野五楽庵選

心経のところどころにある迷路　和歌山市　木本　朱夏
なにか忘れていそうな春の不眠症　藤井寺市　太田扶美代
掃除機が哀しいものを吸い込んだ
美しい想い出ばかり嘘ばかり　和歌山市　福井　桂香
暗号を書いて手帳と戯れる
呪縛から解けてウフフと笑い出す　富田林市　池　森子
終雪や明日は一枚春衣
花朧　青い花弁はいま多感　弘前市　宮崎ヒサ子
張り替えた障子がとてもよそよそしい
ゆで卵こつんと割れば揺れが止む　米子市　中井　ゆき
春愁はさくらが風と逝ったあと
うかつにも桜とまたも約束を　和歌山市　楠見　章子
傷口を酒に浸して眠らそう
懐に入れると風向きが変わる　弘前市　高瀬　霜石
口下手な男焼き芋抱いてくる
刺客ならここに潜まん花畑　東京都　やまぐち珠美
満ちながら渇くこころをもてあます
平凡な私を崩す割れ鏡　西宮市　門谷たず子
すこしずつ微罪がたまる塩の壺
人科ヒト思いながら生き　鳥取市　岸本　宏章
泣けるだけ泣けば涙も澄んでくる
揺ぎない決意へ男結びする　米子市　白根　ふみ
雑草を抜く手わたしは何だろう
白木蓮　天へてんへと掌を合わす　吹田市　山本希久子
桜さくら　桜　恋の残像かもしれぬ
すぐ人を信じる癖が抜けぬまま　堺　市　山本　半銭
桃の花雛もわたしも歳重ね
鉛筆を握り締めてる金釘流　京都市　都倉　求芽
合鍵の一つにされて動けない
私でない日があればなと思う　海南市　三宅　保州
風が凪ぐ挑み忘れたひとになる　寝屋川市　籠島　恵子
天才の言葉絵皿におさまらず　寝屋川市　江口　度
三寒四温　雨は斜めに降ってくる　藤井寺市　高田美代子
人の輪にうまくジョークを投げ入れる　八尾市　村上ミツ子
日記繙いて深傷を掘り起こす　和歌山市　西山　幸
触診の指が愁訴を嗅ぎ当てる　弘前市　高橋　岳水
哀しくておかしい老いの物忘れ　鳥取市　録沢　風花
クールベ展　構えた自我を描き出す　生駒市　飛永ふりこ
お喋りがしたくて冬の窓開ける　和歌山市　吉村さち子
坂上る何度も描いた水平線　西宮市　牧渕富喜子
一枚のはがき喝采などせまり　寝屋川市　森　茜
えらい活気やなぁ　店じまい　吹田市　早川　棲世
一病を抱え投合する情け　高槻市　乙倉　武史
空青く塗るのも僕の正義感　堺　市　和田つづや
あっけらかんの脳細胞に縋り付く　和歌山市　桜井　千秀
お荷物にはなりたくない　秋の風　弘前市　福士　慕情

愛媛県　花岡　順子
追伸へ貫った花が咲きました

鳥取県　田村きみ子
八起き目にやっと芽が出た恩返し

和泉市　西岡　洛酔
酒とろり森羅万象俺のもの

尼崎市　長浜　澄子
これしきの事と許せるなら大人

弘前市　一戸　ツネ
生きるだけ減ってゆきます葬の金

鳥取県　西沖　彰雄
疑わぬ笑顔に小指出しづらい

橿原市　安土　理恵
無伴奏わたしの音で泣く私

和歌山市　松原　寿子
心絵巻を春のページに遊ばせる

和歌山市　古久保和子
シナリオを書き上げ風になるつもり

松江市　川本　畔
春嵐　わたしが何かしましたか

鳥取市　福田　登美
負けそうな予感鉛筆とがらせる

札幌市　三浦　強一
自分史にリセットしたい箇所がある

枚方市　海老池　洋
斬られ役の方へも拍手してやろう

和歌山市　玉置　当代
お多福のような芸しかないわたし

東京都　岸野あやめ
失恋の部屋にカサブランカが薫る

弘前市　斉藤　劦
しっとりと春芽抱いてる母の壺

唐津市　仁部　四郎
舌なめて何する人ぞくじ売場

大阪市　前　たもつ
野良犬の仲間に入れない首輪

八尾市　山本　宏至
副作用なおす薬をのんでいる

米子市　木村富美子
身のほどの窓もたいてくれる春

高知市　小川てるみ
ああ平和　無心に墨をすっている

松江市　津川　紫晃
前輪が父にそむいてばかりいる

米子市　光井　玲子
長い道私の中も雪が舞う

尼崎市　春城武庫坊
余生まだうたかたの夢追うている

和歌山市　福本　英子
拉致の子を迎える日まで咲けぬ花

尼崎市　田辺　鹿太
価値観の節目に落下する椿

京都府　丹後屋　肇
少子高齢　約束手形落せない

竹原市　正畑　半覚
人間に返る静けさ　あたたかさ

黒石市　相馬　一花
成仏をするまで待とう名残り雪

弘前市　櫻庭　順風
色留袖の古本となるほろにがさ

富田林市　大橋　鐘造
新しい靴で矢印気にしない

東かがわ市　木村あきら
ちょっとだけ折れると丸い輪ができる

唐津市　樋口　輝夫
百薬の長が時計を止めている

米子市　青戸　田鶴
老いるなど言うまい春がもうそこに

弘前市　相馬　銀波
一歩前むかしの夢が離れない

羽曳野市　酒井　一壺
足して二で割った答に裏が見え

倉敷市　井上　富子
サラサラと春のチャイムが鳴る小川

岡山県　山本　玉恵
目をつむるゆとりもあって春を聞く

八尾市　高杉　千歩
昔よかった話ばかりの老人会

吹田市　岩屋　美明
でで虫よ暴走族を知ってるか

熊本県　高野　宵草
浮かれてるつもりはないが花の下

弘前市　岡本　花匠
ホッチキスこころを鬼にして纏め

鳥取県　石谷美恵子
順番の狂ったなみだ乾かない

大阪市　川原　章久
中心が欠けて歪な核家族

倉敷市　撰　喜子
お互いの秘密を小出しする夫婦

言えるだけ僕に自由がありました　砂川市　大橋　政良
無に還る時のにんげん仏なり　大阪府　籾山　隆盛
不整脈やましいことはしてません　大阪市　神夏磯典子
聴診器　愚痴と病を聴き分ける　羽曳野市　森下　一知
薫風と一緒に開くにぎり飯　弘前市　中山　雅城
沈丁花　密葬の夜を匂うなり　尼崎市　春城　年代
花を愛し人を愛してつつがなし　西宮市　西口いわゑ
ローソクの芯ほど律儀にはなれぬ　綾部市　藤田　芳郎
枯れたのか呆けたか飄飄として歩く　愛媛県　黒田　茂代
まだ生きる何万回も息をして　和歌山県　辻内　次根
ワンと鳴く猫になりたし尾を立てる　倉吉市　牧野　芳光
税理士に頼むと税が減る不思議　宇部市　平田　実男
凹んでるあなた愛して良いですか　富田林市　中井　アキ
平熱に戻れば言えぬことがある　横浜市　芦田　鈴美
ふまれても枯れてもタンポポ　タンポポに　鳥取県　佐伯　やえ

白無垢が映えて涙が目に滲みる　倉吉市　山中　康子
オンボロの車と春を満喫し　弘前市　蒔苗　果林
ライバルへ勝つには汗が不足する　和歌山市　青枝　鉄治
おとむらい盛会だったとも言えず　八尾市　宮崎シマ子
鼻にかけるほどの美貌じゃないナスビ　愛媛県　中居　善信
つじつまを合わす計算先にする　岡山県　大石あすなろ
外来語溢れ遠吠えするばかり　大阪市　三浦千津子
久々に筆とる文字も衰える　米子市　小塩智加恵
偽物がなぜか私によく似合う　鳥取県　上田　俊路
何もかも知って笑っている顔だ　唐津市　久保　正剣
草書体好きでカタカナとは疎遠　尾道市　光吉　裕
言い訳はしないと決めた水平線　鳥取県　岩崎みさ江
隙だらけで利口ぶらないとこがいい　四条畷市　吉岡　修
春の雷　小鬼の稽古始まった　高槻市　田中　初恵
目くばせを依怙地に避ける冬の天　和歌山市　武本　碧

今更に方向音痴確かめる　鳥取市　田村　邦昭
問題は貴方がカード使うこと　姫路市　服部　一典
字余りの愛が斜めにつっぱしる　八尾市　井尻　民
リーダーの強気に風がきつすぎる　松原市　玉置　重人
寂しくて一期一会の旅へ出る　青森県　西谷　大吾
一種目だけでもトップ走りたい　鳥取県　池澤　大鯨
いち早く見つけた春を買いにゆく　大和高田市　鍛原　千里
試着室嘘の言えない鏡です　岡山県　福原　悦子
切り替えの早さ嫉妬もこの程度　美祢市　安平次弘道
中年を過ぎているのに笑い過ぎ　松原市　小池しげお
挫折してキミも庶民の仲間入り　横浜市　川島　良子
不都合になると誰かの所為にする　鳥取市　徳田ひろこ
猪口一杯ねあかの愚痴は一過性　横浜市　保田　絹子
ほどほどの知恵では解けぬ世界地図　寝屋川市　太田とし子
さようなら　指輪を載せた置手紙　奈良県　渡辺　富子

誹風柳多留二四篇研究 54

橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
清　博美・佐藤要人

419　**九十九人ハ親のはらから生れ**

清　菅家、即ち菅原道真は梅の木の股から生まれたという妄説がある。『小倉百人一首』百人の内、道真を除いた九十九人はまともに親の腹から生まれている、というだけの句。

佐藤　賛。

420　**ひんの盗ミハ大黒に目ハかけず**

清　「貧の盗みに恋の歌」という諺がある。せっぱ詰まれば、普段出来ないことも出来る、貧にせまれば盗みもするし、恋心がつのれば恋歌の一つ位は詠める。というのである。

浅草の歳の市、買物客は遊び心で大黒の像を盗むが、よくよくせっぱ詰まっての客は、歳の市に売られている品物を盗もうとし、大黒像には目もくれないのである。「貧の盗み」なる成語を使っての作句、作者は内心ほくそ笑んでいるのである。

佐藤　賛。

421　**朝帰りだん〳〵母へ火かまわり**

清　「火がまわる」という成語はないようだが、いよいよせっぱ詰まってきた、危険が迫って来た、というような意であろう。

どら息子の朝帰り、親父の小言が息子の方から段々矛先が替って、「息子を野放しにして、母親も母親だ！」ととばっちりを受けるのであろう。

伊吹　賛。『大辞典』（平凡社）に「火が廻る＝火災にて火が燃え移る」とあり、類焼するといった意ではないかと思う。つまり息子から出火した火が母親に類焼する。

佐藤　賛。

422　**時過ギ時きたりよふ〳〵と来る**

清　「時過ぎ時来たり」は、一般に使われる成語のようにも思われるが、ここでは一応、謡曲『猩々』の「教のまゝになす業の。時去り時来りけるにや。次第々々に富貴の身となりて候」の文句取としておく。

句は、吉原に登楼、長い時間が過ぎて、漸く相方が来た、というのである。いつもの事である。

佐藤　賛。

423　**ふみけして礼いつて出る雨舎り**

清　俄雨に遭って雨宿り、退屈の侭に一服。やがて雨が止んだので、吸っていた煙草を踏み消し、礼を述べて退散する。

佐藤　賛。

424　**傾城をつまらなくしたいゝ男**

粕谷　良い男に傾城が熱くなって、他の客に対しての張り合いが無くなり、結果的にはないがしろにしたという意。

けいせいのおは打からすい、男　寛元宮1
傾城の城かたむける色男　四七17

山田　傾城をあたらいい男が地者並にしてしまったというのである。傾城は天女様で夢を売るのが商売。それがいい男に夢中になって、まるで素人娘みたいになってはどうしようもない。

惚られてミてハ女郎も只の人　義8

小栗　山田説賛。この辺が当時の遊女に対する感覚のポイント。傾城が意地と張りと手管を失くしていい男に誠を尽すようでは、既に傾城ではない。つまらないただの女である。

傾城も誠になればひれが落ヲ　三〇7

清　山田・小栗説賛。傾城の意地と張り、また当時の男達の傾城に対する感覚、これらをもう少し勉強されたし。洒落本などを読むことをお勧めする。

佐藤　山田・小栗説賛。

425　**つれをはぶくハこんきうな女郎買**

粕谷　よほど金にゆとりが無いのだろう。知人を誘えば余計な出費がかかると判っているので、一緒には行かない。遊女と遊ぶ金でさえぎりぎりな位なのだから……

素壱分ハ心ぼそくもたゝ壱騎　明三梅4

大野　賛。連れは単なる知人ではなく、油虫の類か。

小栗　同。連れだってにぎやかに行くべき所へ、ただ一騎行くとは「困窮なことだ」とからかっているのである。

清　同。勿論金銭的な問題ではあるが、気持ちのゆとりの問題でもある。

佐藤　同。

426　**きついせき乗物丁へ嫁まがり**

粕谷　「せき（急）」は心がはやること。あせること。

「乗物町」は「新乗物町」の略。長谷川町の西の一角、乗り物屋が多かったからの称。「新」は神田の元乗物町に対し言う。南隣は二丁町で、芝居を遠慮するものはみなこの町を通った。（『辞彙』）

乗物町は、芝居を遠慮する者が通るとある。これを逆に言えば、芝居見物する者は「乗物町」を通らないことになる。しかし、地理的な関係で「乗物町」を通過すれば二丁町への近道となる場合がある。そういう所に住んでいる嫁が「乗物町」を急いで通り抜けることを、「きついせき」と表現したのであろう。

句は、芝居見物に行くならば、普通は「乗物町」を通るのを避けるのだが、この嫁さんは、身支度などに手間取ったため芝居見物に遅れそうになり、近道となる「乗物町」を急いで通り抜けた、というのである。

あじきなさのり物丁をとをるなり　安六礼5
当分ハのり物丁を後家とをり　天三松2
労咳下地乗物町を通る　傍五5

伊吹　楽屋新道を通るところを、急いでいたので道を一本間違えて新乗物町にまがってしまった。

小栗　同。『江戸文学地名辞典』で、浜田先生が「楽屋新町へまがるところを間違えて……」とされたのはどういう理由か。楽屋新町は狭い道であったらしいので、新乗物町と間違える筈はないように思うし、まっすぐ芝居小屋の入口へ行くなら二丁町へ行けばよいのだが。楽屋新町の茶屋へ行くのが目的ということか。

橋本　同。例句の1・2を踏まえて考えるとわかりやすい。

清・佐藤　同。

女性コーナー

前香の雫

政岡日枝子選

目鼻なき千代紙雛にある視線
スイッチON今日は何でも聞きましょう
五月の風私の殻をどう破る
春が来ている時計屋も帽子屋も
雛流し權のひとつも持たされず
招待状　春風ならば断れぬ
縁あってまだぶらんこを漕いでいる
怒鳴りたい日にもつついている豆腐
一本の薬に逆点かけている
これからも自分の時計でおし通す
われもの注意わたしのハート入れてある
はしゃぎすぎた鼻欠け雛が実家にいる
火をつけた手は消すことも知っている
冬と春　重なる沖が荒れている
美しいおんなを一人生んで春
春の鼓動みんな黙って待つさくら
雲悠々　今を生きているわたし
白旗をいつでも振れるようにする
入試みな終ってからが春になり

八尾市　中島　春江
松江市　川本　畔
吹田市　山本希久子
和歌山市　西山　幸
和歌山市　古久保和子
藤井寺市　太田扶美代
鳥取県　西川　和子
箕面市　出口セツ子
大阪市　川久保睦子
米子市　野坂　なみ
藤井寺市　髙田美代子
八尾市　宮崎シマ子
池田市　栗田　久子
西宮市　牧渕富喜子
富田林市　池　森子
鳥取市　福田　登美
西宮市　西口いわゑ
横浜市　近藤　道子
富田林市　片岡智恵子

うまい話にプルンと揺れたイヤリング
好奇心消えると人は枯れてゆく
行こうかなみやげ話が背なを押す
身に合わぬヒールが石にけつまずく
花達はまだつぶやきの声ばかり
水漏れの螺子に落度はなかったか
目標のないミサイルが胸にある
懺悔する道へ植えたい花がある
大根をスパスパ切って妻の意地
ケイタイに弱い老女と入れておく
手抜きした答が返る春の庭
はぶいても省略しても亡母の味
おろおろと自分を責める老母の部屋
どの花も彩とりどりに春を待つ
ドレミの歌が聞こえてきます春の壺
丸印　当日ころり抜けていた
裸婦の絵にためらい残す影がある
介護する側になりたや花いちもんめ
よく噛めば自然の味のあるお人
受け止めぬ夫に今日は変化球
抽出しに詫びる言葉を詰めておく
春彼岸心の襞も伸びてくる
赤札を打って鬼籍の座に上げる（義妹の死　曹洞宗）
渓谷美に触れて心のマッサージ
身になって言ってないから響かない

倉敷市　井上　富子
愛媛県　黒田　茂代
米子市　木村富美子
東大阪市　中井　ゆき
鳥取市　田中美弥子
橿原市　徳田ひろこ
東京都　安土　理恵
大阪市　岸野あやめ
鳥取県　神夏磯典子
和歌山市　佐伯　やえ
米子市　福本　英子
富田林市　白根　ふみ
岡山県　中井　アキ
和歌山市　矢内寿恵子
大阪市　福井　桂香
藤井寺市　渡部さと美
羽曳野市　福田　悦子
和歌山市　徳山みつこ
岡山県　上地登美代
弘前市　福原　悦子
八尾市　宮崎ヒサ子
米子市　生嶋ますみ
米子市　木村　春枝
生駒市　林　瑞枝
飛永ふりこ

楽しみを数え数えて生きている　米子市　足立由美子
れんげたんぽぽ愛はくらべるものでなし　羽曳野市　吉川　寿美
八坂抜けしだれ桜も見て知恩　大阪市　津守　柳伸
繰り言のように雨だれ聞く窓辺　尼崎市　長浜　澄子
たそがれて三面鏡も淋しかろう　鳥取県　岩崎みさ江
都合よく忘れたことにした喜劇　鳥取市　録沢　風花
母と子に調子の合わぬぶうらんこ　鳥取県　土橋　睦子
生きることふと考えるカタツムリ　大和高田市　鍛原　千里
宝石の棚には毒を眠らせて　和歌山市　楠見　章子
法律の但し書きから見える穴　大阪市　大川　桃花
機密費は水ももらさぬはずだった　倉吉市　米田　幸子
紙人形泣きたい時もあるだろう　米子市　澤田　千春
ころころと笑うと母の声に似る　藤井寺市　鴨谷瑠美子
意地悪が通り過ぎるのじっと待つ　八尾市　村上ミツ子
預かった孫に背筋を伸ばされる　東京都　播本　充子
電気ガス　夫生きてる領収書　八尾市　髙杉　千歩
おろし大根三日続いてそれも愛　鳥取県　田村きみ子
今はもうエチケットだと化粧する　倉吉市　青砥　菊枝
プレッシャーに弱い私のひとり旅　和歌山市　松尾　和香
世渡りに笑顔の種をまいている　米子市　門脇　晶子
ネーミング一つでヒット生む構図　神戸市　田中　章子
あちこちのアンテナ延びる春ですね　大阪市　町田　達子
みのもんた信じてテレビはなれない　米子市　池尾　保子
母一人田舎に同化して城主　鳥取県　吉田孔美子
捨てようか　いいえ捨てまい亡夫の靴　大阪市　津村志華子

悪いとこDNAだと子は迫る　岸和田市　土橋　房枝
セーターの刺繍の羊生きてきた　三田市　石原　歳子
一枚が二枚にもなる孫のバーゲン　河内長野市　植村　喜代
産んだ子に礼を言われた事がない　高知市　小川てるみ
一言が波紋広げてゆく怖さ　東大阪市　中岡　妙
啓蟄や病夫の六感冴えてくる　大阪市　浦田　綏子
甘い誘いへほいほい乗った泥の船　東大阪市　北村　賢子
五歳児の解説を聞くハリーポッター　西宮市　緒方美津子
ひとときの至福の味をかみしめる　岸和田市　雪本　珠子
秘めごとの一つや二つ生きがいに　大阪市　星野きらり
破れ傘わたしを癒す伴走者　弘前市　一戸　ツネ
ぜいたくに梅の香りと飯を食う　羽曳野市　濱口　フジ
角立てるつもりはないが角が立ち　大阪府　小栢こずえ
本番はたった一回あっけない　鳥取市　永原　昌鼓
啓蟄の虫思い切り深呼吸　大阪市　板東　倫子
窓明かり春がだんだん近くなる　和歌山県　森下　順子

春江さんの句―目鼻のない紙雛と視線を結びつけて、一般の認識の奥にあるものを見ることこそ川柳の心と思う。作句のポイントを心得た句であり、見透かされている私達への警告でもあろう。**畔さんの句**―朝食は体の目覚まし時計、心臓と脳との連携よろしく朝のスイッチがスムースに入った日、これ以上の倖せはないでしょう。沢山の人を愛して幸福を呼びこむ一日になりましょう。**希久子さんの句**―五月の追い風に好機到来、脳だけで考えていると行動力が伴わない、気づいた時が変わる時、自分の手で人生を仕上げていく決意が読める句である。**幸さんの句**―人生を刻む時計屋、人を愛するが故の哀しみや喜びの帽子屋、パステルカラーの絵が浮かんでくる景色に耳を傾ければ、喜劇とするか悲劇とするか鑑賞は自由であるが、そこに春があることは事実である。

正

村上　信子選

正解と早く言ってよもんたさん　勝巳
正しい答たった一つと限らない　たもつ
水戸黄門正義の旅がうらやましい　正和
裏のない背広正論ばかり吐く　劦
正直が生かされる世を残したい　(田)章子
分別を正しくすれば生きるゴミ　康子
どん底に落ちて正解ひろいあげ　真一
正論を吐いてラインを外される　武
正直に生きて感謝の日を過す　栄子
簡単な文字が正しく書けてない　智加恵
正座して意見してるに子はあぐら　勝視
正の字がふえたらうれしい票の数　重人
正座してラジオを聞いた日を想う　こずえ
綴り方子は正直にスッパ抜き　春雄
正直に描いた似顔絵喜ばず　志洋
正面の壁で落着く古時計　あずき
正確な返球ハートに突きささる　可住
正直な胃だふぐさしへ笑い出す　昌鼓
真正面から向き合えぬ訳がある　清史
青白い正論吐いて子が巣立つ　富子
真っ正直な父で直球しか投げず　強一
正論を吐かず巧みに出世する　次男
その度に襟を正したはずの事故　正雄
汁吸った手抜き不正が暴かれる　武史
正直にもの申したら首が飛び　(稲)洋
正面避けてアングル少しハスが良い　俶子
正直に生きて近道まだ知らず　さち子
正論が隅で小さくなっている　ミツ子
国ごとに違う正義が胸を張り　圭二
正直を売って老舗が生き残る　宏章
正札はほんまかいなの五割引き　尚士
正面のアップ勝者の笑みになる　充子
正論も金の重みにゆがめられ　紫晃
正論も多数決には潰される　章久
正論を吐いた煙草がふるえてる　恭昌
ライバルの真っ正面に立つ自信　鐘造
三世代正方形の春炬燵　螢

佳

正面を向いてまじめに生きている　天涯
正という五画の数が便利です　雅城
正絹の羽織祖母からゆずられる　はるお
正直なだけが取柄の母でした　妻子
雑魚の正論迫力に欠け流される　彩子

人

澄んだ眼にポキンと折れる愚者の鼻　霜石

地

金力へ正義が負けた裏話　雄々

天

天の天選ぶ正の字誇らしい　春木圭一郎

軸

規則正しい老母の寝息のそばで寝る

けれども

安達はじめ選

夫婦ですけれども元は他人です　美代子
OKと言ったけれどもちと不安　秋星
けれどもと上司を諫め空仰ぐ　四郎
負けて勝つけれども先に勝つ男　螢
化粧したけれども残る喉のしわ　圭二
不肖の子けれども愛し母ごころ　志華子
切り替えも素早いけれども勘違い　愛論
疑いが晴れたけれども癒えぬ腹　鐘造
さびしげな顔だけれども美人だな　ミツ子
ひな祭り女児は無いけど桃の花　高栄
激怒するけれどもいつも後悔し　千華
信じてるけれども限界が見える　あやめ
美しいけれども愛が見えぬ街　(稲)洋
けれどもと一言はさむ臍曲がり　ちかし
けれどもと念を押すから嫌われる　隆盛
恋したいけれども私七十五　智加恵
評判は悪いけれども魅せられる　朝子
再出発けれどもいつか陽は昇る　典子
明日は僕　けれども支度出来かねて　順風
生きること思うけれども持ち時間　千里
素っ気ないけれども愛を信じてる　早智
けれどもの話が多くまた独り　俊路

笑われたけれども好きと言いました　正剣
分かってるけれども一合追加する　水笑
雪国はつらいけれども雪が好き　あずき　劦
胸痛むけれども愛は告げられぬ　九好
意地悪をされたけれども気がつかず　半覚
善人だけれども運が向いてこぬ　徳三
戦争に負けたけれども国栄え　孝雄
やかましいけれども深い愛だろう　三喜夫
あの人は嫌いけれども憎めない　一知
言われたら出来るけれども覇気がない　昌鼓
もう着れぬ服だけれども捨てられず　正和
あの危機を越えたけれども次の坂　シマ子
呑みたくないけれども男の意地がある　倫子
テロ憎むけれども戦争したくない　たもつ
大好きですけれども彼女知らんぷり　佳
けれどもと涙を隠し話す母　次男
負け続けけれども足は碁会所へ　松煙
儲け話けれども何故か疑問符が　武史
身勝手とは思うけれども金貸して　寛子
親子断絶けれども切れぬ血の絆　恭昌
人
しがらみを捨てたけれども恋は別　郁子
地
突っ張りと言われたけれども村の長　鉄治
天
コーランも聖書も読んで駅で寝る　高瀬霜石
軸
七五三払うけれども父誤算

種

保田　絹子選

改良で親の顔さえ知らぬ種　美也子
芽を出さぬ種にあれこれけちをつけ　正和
輪を抜けたとたん話の種にされ　八重子
悲しいなあ老いて苦の種物忘れ　三代子
世界地図擦ると火種こぼれ落ち　徳三
取っときの話の種に芽がでそう　淞丘
花束の中に嫉妬という火種　正雄
凝らす目を手品の種がすり抜ける　庸佑
お節介恋の火種をそっとおき　千華
報われる明日を信じて種をまく　圭一郎
ポケットに笑いの種を持ち歩く　強一
種も無く仕掛けもないが嘘がある　章司
播きもせぬ種が我がもの顔をする　あやめ
気が弱いくせに嫉妬の種つくる　哲男
資産家が火種残した遺言書　政勝
話の種尽きぬ女の長電話　三千子
心配の種が長寿の秘訣です　水笑
噂の種花が開いて戻ってき　シマ子
古代ハス眼覚めた種に賞う夢　ちかし
種袋ふれば命の音がする　理恵
失敗を笑いの種に仕立て上げ　みつこ
再会が消した火種に風を呼ぶ　一知

不況でも生活力のある雑種　尚士
少しだけ底に残っていた火種　ミツ子
一粒の種にも生きる明日がある　大吾
企みの種があちこち世界地図　りつえ
心配の種を背負っていて達者　みね
芽を出した種が葛藤くりかえす　雄々
胸底の種火を煽る春の風　活恵
播いた種実り少ないＯＤＡ　隆盛
種あかしするとだあれもいなくなり　保州
晩成の大器信じて種を蒔く　洛酔
対岸の火種が怖いことを言う　宏章
口利きの種も仕掛けもある政治　准一
亀裂から吐息きこえる草の種　千里
何げなく蒔いた種から知る命　あずき
行間にこぼれた種のスキャンダル　ツネ
佳
アフガンの地雷に代えて麦の種　晴翠
子を育て喜怒哀楽の種貰う　早智
日陰でも咲きますこぼれ種の意地　寿美
雑種だがぼくの心を知っている　碧
癪の種やんわり溶かす仕舞風呂　俶子
人
雑草の種も自分の夢を持ち　一壺
地
一粒の種が芽を吹く投書欄　鉄治
天
人種越え愛で地球を包みたい　出口セツ子
軸
揉め事の火種ともなるお節介

初歩教室

題―休み

三宅保州

今月の題「休み」を拝見させていただいて最も感じたことは、ある事実を説明したり報告しただけの句が多いことです。これらの句は、句の後に「そうですか」とか「そうですね」と言いたくなるだけの、いわゆる説明句とか報告句とか言われる句です。説明や報告に終わっている句は、作者の思いや訴えが見られず、読者に感銘を与えるような句になっていないことが多いものです。「そうですね川柳」などと揶揄されている所以です。

どうか、単なる説明や報告の域を超えた、作者の気持ちや訴え、喜怒哀楽、風刺、穿ち、ウイットなど良い川柳の条件を備えた、句に作者のあなたが存在する作句を心がけて下さい。そのためには、多読、多作、推こうの三つが最も大切だと思います。

「そこまでを句にするより、そこからを書くべきである」川柳界六大家のひとりの川上三太郎師の名言を噛みしめたいものです。

【同想句】二月号でも述べたとおり、同じ発想の句はそれだけでも佳句の条件を損ないます。誰でも思い浮かぶ句は捨てましょう。

(**原**は原句、**添**は添削句)

「休肝日を詠んだ句」

原 悪友が来て休肝日先送り　いさお

原 食卓が早く片づく休肝日　文江

「休止符」を詠んだ句

原 休止符が生きた音楽創ってる　弘之

原 休止符が辞書になかった亀の足　好

両句とも見つけの良さは備えています。

「万歩計」等を詠んだ句

原 休むなと万歩が急かす散歩道　はじむ

「万歩」と「散歩道」が重複的な表現。

添 休んだら駄目と急かせる万歩計

原 休もうか気持が出入する万歩　栄呼

添 休んでもよろしいですか万歩計

原 思い立ち尋ねた店が休んでる　智加恵

原 遠路来て臨休日とは許せない　洋介

この場合の「許せない」は言い過ぎでは。

添 行った日に限って店は休業日

「一休み」を詠んだ句

原 がんばったでもこの辺で一休み　フジ

原 休みましょここらでちょっと深呼吸　忠子

両句とも具体性があれば良いのですが、

原 こまねずみたまに休めば草臥れる　昌鼓

原 小遣いが尽きて休日持て余す　武

添 小遣いが尽きてゆっくり休みとれ

「リストラの休み」を詠んだ句

原 お休みもリストラなどと勘繰られ　勝久

原 リストラかわたしに休みが多すぎる　和友

中八音字は避けましょう。

添 リストラの恐怖休みが多くなる

原 休日を待ってた日々を懐かしむ　章司

添 休日を待ってたころが華だった

原 リストラで休みばかりのカレンダー　重之

原 不況風休み取るのもはばかられ　裕子

「ずる休み」を詠んだ句

原 言い訳は考えてあるずる休み　侑子

原 ずる休み得したようで複雑で　郁代

原 ずる休み日焼け止めまで妻がくれ　賢治

原 二日酔い妻を病気にして休む　栄子

原 口実にまた遠縁がひとり消え　鈴美

原 親族を冥土に送るずる休み　恵勇

川柳でもその手は古いと言われそうです。

【添削句】

原 仕事より休憩長い仕事ぶり　こずえ

添 たっぷりと休憩を取る仕事ぶり

これでも具体性に欠けますから、

添 一週間休み登板するエース

とでもすれば句意が具体化できます。

原 お日様も休み欲しくて雨にする　輝　夫
　逆に作者の思い遣りを出してみては、
添 お日様もお休みなさい雨の日は
原 休みとり家族旅行したいです　綾　乃
原 学校が五日制親もほしいです　綾　乃
原 休み毎二人で実家家計浮かす　綾　乃
　一句目は中六音字、二句目は中八、三句目は下六で、いずれもリズムが悪い。多作されて作句に慣れることと、推こうに頭をひねりましょう。原句に忠実に添削しました。
添 休み取り家族旅行をしたいもの
添 親も休みたい学校週五日
添 給料日前は実家へ逃避行
原 役力士揃って休場怪我に泣く　弘　子
　そのとおりですねという、いかにも平凡な句になっています。事実を読み過ぎ、中八。
添 休場に名前連ねて揃い踏み
原 一休み仕事の後のうまい酒　稔
　報告句の典型、川柳眼的に視点を変えて、
添 休肝日空けたら二日分も飲み
原 休まない鼓動の音の重大さ　英　旺
　「重大さ」はこの句意になじまないのでは、
添 感動は休まず打っている鼓動
原 毎日が休み老骨ネジゆるみ　美恵子
添 毎日が休みへネジを捲いている
原 落ち着かぬ朝刊休みの午前中　とき
　説明過剰のきらい
添 穴開いたような新聞休刊日
原 無理をせず休み休みの家事育児　喜　子
　上五、中七の表現が重複気味、
添 本日休業と言いたい家事育児
原 一日散稼ぎに疲れ一休み　孝　明
　真面目に説明した感の句
添 働き過ぎに休みをくれたのは不況
原 休日もたっぷり予定つめる母　アヤ子
添 休日も遊ぶ予定で忙しい
原 休憩を待てず隠れてする欠伸　ゆきの
添 休憩を待ってくれない大あくび
原 妻の口休んでいるのは夜中だけ　公　市
添 喋り詰めの妻も休んでいる夜中
原 休みなく動く手巻きの腕時計　真　一
添 休みたいときもあろうに腕時計
原 休日の貼り紙がない倒産か　政　子
添 倒産と間違われてた休業日
原 大工さん休みが多くなる景気　照　彦
添 日稼ぎの休みが多くなる不況
原 休んだら噂されるの決まってる　登志子
添 休んだら一人歩きをした噂
原 リストラで毎日休みウォーキング　邦　造
添 毎日が休みで励む万歩計
【少し工夫すれば佳くなる句】（添削済み）
休むこと知らない母の大きな掌　美弥子
　十連休それがどうした俺などは　九　好
休み無い妻を手伝う台所　清
休みなら手伝ってよと当てにされ　大　鯰
主婦業に休みをくれた闘病記　ヨシ枝
携帯も休ませてやる日曜日　益　子
出世など見切り産休とる息子　像　山
連休は聖徳太子忙しい　芳　江
物忘れ脳も週休二日制　敏　子
【佳句】
駆け抜けた戦後ここらで一休み　満　子
鍬置いてゆっくり雨の申告日　幸
OLが湧いて出てくる昼休み　時　雄
突然の休息くれた風邪の神　嘉　彦
今度こそ休み信じる時刻表　千　華
心臓も休みがほしい不整脈　つよし
明日からは出社に及ばずの休み　准　一
休肝日前頭葉も働かず　初　恵
【今月の推せん句】
雨の日は連休となる縄電車　利　子
休憩も仕事の内と教えられ　節　子
【私の句】
よっぽどのことだカルチャー休むとは
働いているからこその日曜日
「付記」アメリカ・ニューオリンズ在住の方の一月課題「座る」遅着分、佳句紹介します。
臨月の娘威張って座ってる　聆

秀句鑑賞

同人吟　久保正剣
―4月号から

一九八一年、ふとしたことから川柳に手を染めたのが因果。頂上のない川柳の魅力に取り憑かれ、川柳とは上五を原則とする中七と下五による七五調の、えも言われぬ快美快適なリズム感を重大な成立条件とする短詩であると、確信し信奉して今日に至りました。

この度同人吟の鑑賞を仰せつかり責任を感じております。川柳の大きな要素である人間の生きざまが描かれなければならないと思います。一八五八句の中から選び抜くことの至難さをしみじみ感じながら、わたくし自身勉強させて頂いた句を掲げてみました。

川柳は苦難のあげくやっと文芸としての地位を確立しましたが、川柳には川柳独得の良さがあり、川柳人が本当に川柳を愛して行く、これが今のわたし達に課せられた大切なことではないでしょうか。

生涯の伴侶を直感で決める

宮崎　シマ子

少し破調かとも思いましたが、句意に共感し見過しに出来ない句です。

ブッシュとは気が合いそうな都知事どの

山口　高明

戦争好きなジョージ・ブッシュと自他共に許すタカ派の都知事とは、馬が合う見事な組合せでしょう。時あたかもイラク情勢が風雲急を告げている中、戦争を強行する組合せであってはならないと思います。

一日は長く一年夢の間に

神保　坊太郎

老人の意識調査の結論だそうです。ちなみに八十歳の私には一日も一年もあっという間に過ぎるようです。

若者にまだ負けられぬ鉋くず

清川　玲子

作者が女性の方とは思いませんでした。棟梁経験者か匠技を持つ建築師で、今時の若者にはまだ負けぬという自負がうかがえます。

本物の敵は味方の顔でいる

古手川　光

人を見たら泥棒と思えという諺もあり、獅子身中の虫という言葉もあります。

九十でも北の原爆気にかかる

北川　竹萌

隣国わからず屋の北朝鮮が核開発の再開を宣言した不気味さは、九十歳になっておそろしいものです。さらに平和を愛する心には年齢はありません。

ウイルスに人も機械も侵される

島　ひかる

ウイルスが機械を食い荒らすなどとは浅学な私には考えられない意外なことでした。一方、人食いバクテリアは短時間で人の命を奪う強力な細菌が跋扈しており、治療法も解明されていない厄介なもので困ったものです。

公園に住む人が居て救急車

前　たもつ

大阪城公園を根城に家なき経済難民ホームレスが数多く生活しているのを知っております。無気力でも善良な人達です。そんな弱者を悪ガキ共がゲーム感覚で集団暴行を加え救急車のお世話になることもあったようです。

野球さえ振り逃げもある生きてやる

奥村　五月

野球には振り逃げでセーフになるというルールがある。世渡りにもいろんなルールがあるが、上手に利用活用して長生きしましょう。

峻しいがきっと花野へ続く坂

西出　楓楽

下手な注釈で綺麗な句姿を壊したくないのでご遠慮させて戴きますが、ひと言「流石」と言わせて下さい。

戦争ノーそれが少数だろうとも

川端　一歩

全く同感です。二回目の湾岸戦争が一部の権力者のエゴによって強行されたことは、まことに悲しいことです。いかなる理由があっても、殺戮を伴う戦争は絶対に避けるべきです。

心まで加齢はしないバースデー

中川　楓

年金を戴く歳になると誕生日を迎える毎に肉体の衰えを感じます。それは止むを得ないことですが、心まで歳を取ることはないと作者はおっしゃっていますがごもっともです。精神年齢を若く保って、いつまでも健康で長生きしましょう。

怪我人を出すも祭という熱気

山本　蛙城

怪我人と言えば岸和田のダンジリ祭を筆頭に各地に喧嘩祭があります。佐賀県の伊万里市のトンテントン祭は、山車を川に引き込んでぶっつけ合うことで有名です。

脱衣籠たたみ込まれるお人柄

生嶋　ますみ

昔は乱れ籠というてお風呂に入るとき、衣類を無造作に投げ込んでいる人が多い中に、きちんとたたんでいる人を見ると、人柄が窺えて尊敬したくなります。見習いたいものです。

会議室女混っている湿度

居谷　真理子

昨今、会議に女性が混っているのは珍らしいことではありませんが、黒一色の中の紅一点はやはり心が和みます。その女性がたとえ上司であったとしても…。

胸の底見せたい人が振り向かぬ

楠見　章子

よくある話です。何事も意の如くならないのが世の中です。振り向かせる努力が足りないのかも判りません。メールで告白してメル友になるか、次のバレンタインに本命のチョコレートなど贈ってみてはいかがでしょうか。

佇ちつくす海が応えてくれるまで

木本　朱夏

海は見ているだけでさまざまな形で人間の心を癒してくれます。この句を拝見してしみじみ川柳は素晴しい、川柳をしていてよかったと思います。プンプンと大正ロマンが匂います。

モーニングコールに来ない雀たち

田中　憧子

そう言えばもう何十年も、東天紅の声を聞いていないような気がします。雀の数も少なくなって残飯を食べに来なくなったのも事実です。モーニングコールが効いています。

モンゴルの力士土俵が狭すぎる

最上　和枝

私達が国技と自負していた大相撲がいつから外国に開放されたか知りませんが、世の移りとはいえグローバル化することを手放しで喜べないと思います。なぜなら相撲の頂点に立つべき横綱が、外人で占められているのは国技としていかがなものでしょうか。中でもモンゴル出身の入門者は横綱を初め、三十数人も居ると聞いています。千秋楽の一番がモンゴルとハワイでは気が滅入ります。

金がいる企画に日本呼び出され

藤井　正雄

星条旗の庇護の下にある日本はアメリカの要請を断ることが出来ません。今度も無意味な湾岸戦争に狩り出され、復興支援の名目で相当額の負担を強いられるものと思われます。沖縄では基地の維持費から、軍人家族の生活費まで国費で賄っているそうです。

秀句鑑賞

―水煙抄

―4月号から

髙田　美代子

ジョーカーを使いこなせぬ不整脈

花岡　順子

効率よく何かを使えたら思う壺だが、そうはいかないから焦ってしまう。

七人の敵をむかえる髭を剃り

加藤　権悟

窓の外は皆他人で多数の目が刺さる。身嗜みは心掛けていたいしお洒落はたのしい。

歳だとは言わないようにしています

山根　邦代

もう歳だからと気弱になることは確かだけれど、自分から老け込むことはない。女は何時までも美しいほうがいい。

がんばった自分を誉めてやりたいな

奥田　保子

人間に生まれて、よかったとも辛いとも思う。感情のやり場に一喜一憂を抱き締めながら今日を生きている。多分あしたもね。

グラビアの大きな胸にあこがれる

前坂　なお美

日本の民族衣装である和服が時代と共に遠ざかり、叶姉妹の様なバストで洋服を着たい。

物知りと言われ事典を買い漁る

木村　無禄

この人に聞けば何でも知っている。生き字引と言われて今更ひっ込みがつかずに知識を仕入れに行く。何となく笑えてくる。

友達が出来たか春のランドセル

福田　悦子

桜の咲く校門を潜って早一ヶ月、集団生活にも慣れて毎日が楽しい。ランドセルをカタカタ鳴らして家路へ急ぐ、友達と約束がある。

百歳で百万やると言われても

大西　文次

高齢化社会となったいま百歳は夢ではないが、ある年齢からは一年一年を生きる事は並み大抵ではない。

深呼吸しても昭和を語れない

久保　和友

きな臭いニュースに今世界中が注目している。昭和史といえば今もって重いものがある。

買い溜めて賞味期限にあせり出す

撰　喜子

見せたくない、見られたくない冷蔵庫。

雑談の中でヒントを思いつく

山下　節子

ほんの少しこころして耳を貸せば、頷けるものが幾つもある事に気付き無から有を産む。

故郷は過疎で魚が新しい

辻内　次根

加太・勝浦・宇久井等々、和歌山近辺でもとれとれの魚がいただける。日本の回りはみんな海、海の宝物をもっと大切にしたい。

坂道の途中で妻を振りかえる

千葉　武

夫唱婦随を地でいきながら、時々は妻を庇う夫の優しさがとても嬉しい。

騙された振りを楽しむ四月馬鹿

羽田野　洋介

軽いジョークで笑い合う、この日だけの楽しみを気のおけぬ同士が好機を窺っている。

コーヒーに抹茶煎茶という家族

原　煩悩児

三世代同居にそれぞれの嗜好が面白い。

淋しいなあ庭いっぱいの白椿

大向　ナツ子

止める気になってまともなことが言え

荻野　像山

ほどほどの自信が人を輝かす

田中　初恵

エッセー

切れ字を使って詠む川柳

井上桂作

「や」「かな」「ぞ」「けり」などを切れ字と言います。連歌や俳諧の発句において一句として意味を完結させるために、修辞的に言い切る形をとる方法は古くから使われてきました。例えば「古池や蛙飛びこむ水の音」の「や」などで、これがないと平句のように聞こえます。文語調や切れ字には、古くから日本語としてのリズムや、美しさ、感動があり、さらに余情を深めることができます。

薬漬け川柳漬の余生かな

西尾　栞

この句は名を成し、欲を捨てて、人生を悟った悠々自適の境地から生まれた句です。詠嘆・感動を示す「かな」は、体言と活用語の連体形について「・・・よ」「・・・のことよ」「・・・のことだなあ」の意を表します。文全体は、叙述を詠嘆・感動で表し、切れ字に他意のない純粋さを表現する終助詞です。

還暦やめでたためでたと言い聞かせ

宮本美致子

還暦は六十年で干支が一回りするから生まれて六十一年目の歳となりますが、周囲の人びとが祝われるほど嬉しいこととは思いません。還暦「や」の切れ字は間を持たせると共に、感動を示す「や」、呼びかけに用いる「や」、反語を示す「や」などの他に、質問・疑問・並列を示す「や」にも使われます。

命ひとつ露にまみれて野をぞ行く

井上　桂作

寝つかれず、早朝より露に濡れながら原野を歩く。汗も水も一緒になって、滝にでも浸ったようです。「ぞ」は強く指示したり、断定を示す場合、また疑問を示す場合の「ぞ」は、疑問語と共に用いて不定の意を表します。

六十の浮気は色でなかりける

板東　倫子

この句は、意味を強めるために問いかけのような形をとっています。「なかりける」の反語で、言い切る言葉には力強さが感じられます。句を口語調にしますと「浮気は色ではありません」となり、言い訳のように聞こえます。

川柳は口語文による文芸として継承されてきました。また現在の川柳は、表現領域をさらに「内面世界の追求」にまで広げるようになり、同じ短詩型文芸の「短歌」が、文語発想を大事にするように、川柳の場合も日常性を越えた新しい可能性を、文語発想に求めようとしています。

文語は口語に比べて言葉としては、堅い印象を与えます。しかし口語の軽快さと、日常性だけでは表現できない内面的な思索、人間像など、余韻を交えた効果的な表現が可能です。やはり定型のリズムに合う言葉は文語ではないでしょうか。

恋人の膝はレモンのまるさかな

橘高　薫風

第76回　大阪川柳の会

日　時―6月4日(水)17時開場
会　場―サンケイビル本館322号室
題と選者　△鳥　・村上　氷筆
△きらきら・坂元　一登
△願　う・安藤寿美子
△テンポ・礒野いさむ
各題2句　席題なし　会費千円

本社 四月句会

四月七日（月）午後五時半
アウィーナ大阪

満開の桜の下、入学式もあちこちで行われた七日、四月句会には110名の参加があり、夕刻開催された。

席題選者は東京から出席の播本充子さんにお願いする。

お話は参与の津守柳伸さん。柳歴は古く、昭和41年理容師ばかりで始めた駒つなぎ川柳会は、病気のため閉じることになった平成2年まで続いた。柳号の名付け親は山本規不風さん。よく男性と間違われ、雀踊子、柳安子さん等は女性と間違われたと言う。

清水白柳、八木摩天楼、菊沢小松園さんに指導を受けたこと、天笑主幹、薫風名誉主幹との出会い、路郎師の思い出等昭和40年代のことをゆっくりした口調で話され、聞き入った30分であった。

月間賞は石堂潤子さん（河内長野市）に輝く。

（司会―玄也）（記名―月子・真理子）
（受付―睦子・倫子）（清記―義）

席題「素　足」　播本　充子選

春ですよ素足になって出ておいで　月　子
冷えまっせ老いの素足をとがめられ　寿美子
真っ先に素足が春を感知する　鹿　太
古里の土の香りを嗅ぐ素足　鐘　造
靴下を捨てて春の土を踏む　泰　子
春の波ふたりの素足追うてくる　たず子
花明り君と素足で踊ろうよ　アキ
テーピング土俵の砂に嫌われる　重　人
ふるさとの土は素足に温かい　アキ
黒光りの廊下素足がここちよい　茜
朝刊を取りに行くのは素足です　義
ワイキキの浜辺覚えている素足　玄　也
くつ下を脱ぐと大地の子にもどる　㊟千代
足袋脱いだ女の性の青畳　柳　弘
サンダルに素足がきれい若さだな　房　子
不覚にも妻の素足に目をそらす　瑠美子
美しい素足にわたし惚れました　甚　一
生足にサンダル若さ眩しいな　かりん
サンダルまでかかとのひびを治しましょ　㊞章　子
若草に素足がはずむ回復期　久　峰
水虫を黙って足湯ならんでる　修
真夜中のトイレ素足で寝付かれず　高　栄
外反拇趾素足になれぬ私です　房　子
嫁はんの外反拇趾を知っている　重　人
日曜の素足を猫がなめにくる　希久子
氷原を素足で逃げる脱北者　倫　子
足の裏がしっかり覚えてる遊び　扶美代
くつ下を脱ぐと喜ぶ土踏まず　美代子
草を踏む素足がおいた赤いくつ　睦　子
里の川素足に風も陽も踊る　セツ子
ローカル線途中下車して足湯など　伽　羅
大根の白にかなわぬ素足です　比ろ志
佳
よちよちの児が靴下を脱ぎたがる　潤　子
足の爪きれいに切って下駄にする　月　子
湯上りの素足に鍼はありません　保　子
感無量いま花道を行く素足　美代子
素足から女の嘘があばかれる　冨美子
人
縁あって素足で俺についてくる　民
地
素足もて投函の音たしかめに　春　蘭
天
嫌なことみんな忘れている素足　いわゑ
軸
花嫁の素足で終るサスペンス

兼題「あいまい」　寺川　弘一選

診断があいまいカルテ覗きみる　照　子
あいまいな戦の盾になるのかい　螢
あいまいに出来ずいつでも向う傷　義　子
あいまいな答え優しさなんだろう　ダン吉
あいまいなお方に書かす誓約書　泰　子
あいまいですましてくれぬ警察署　笛　生
お役所は検討しますと言う答　いっふみ
あいまいな噂の種を持ち歩き　〆　女

あいまいに決めた会長光だし　哲夫
月の土地千坪を買う契約書　重人
あいまいな女とお酒飲みません　隆盛
あいまいでしっかりしてる浮動票　哲男
あいまいな英語身振りで補充する　正雄
合格のカットラインを明かさない　充子
あいまいにあしらわれてる回り寿し　シマ子
あいまいな約束笑う花時計　千里
あいまいに書けぬカルテを隠し持つ　とし子
あいまいにできぬ遺言状がある　希久子
どうなった鈴木宗男もあいまいに　笛生
ムニャムニャですます悔みの言葉尻　寿美
あいまいな記事も売れてる週刊誌　愛論
貧乏神出ていきますと言うたのに　義子
曖昧に見えるが深い禅問答　洋
あいまいな治療はやばや総入歯　ルイ子
あいまいな医者に命まで切られ　春
あいまいな正義に尻尾ふる日本　恵勇
あいまいな気持で国歌口ずさむ　充子
あいまいに出来ぬ汚染に病む地球　睦子
あいまいに中流という安堵感　たず子
あいまいな略図泣かせる雨の通夜　正雄
あいまいな返事豆腐の裏おもて　柳弘
あいまいに生きたツケかも体脂肪　楓楽
　佳
ビールとも酒とも違う発泡酒　美代子
ねじの切れる音あいまいなオルゴール　雅文
主語述語あいまいにして許し合う　楓楽
あいまいが嫌で縞馬になった　保子

あいまいな小指も噛めぬアカンタレ　恵勇
　人
あいまいに生きて火花も散らず古希　直樹
　地
晴時々くもり所によって雨　保州
　天
浮動票とは私のことですか　保州
　軸
あいまいに笑い幸せですと言う

兼題「急ぐ」　吉川　寿美選

発車ベルホームを駆けて探す窓　満津子
いのち短し急がねば陽が沈む　螢
お早めにお召し上がれと急かされる　保州
菜種梅雨梅酒の仕込み急ぐ母　柳弘
六十路春迷わずこの道を急ぐ　希久子
加速つけ信号無視で突っ走る　春
二段ずつ跳んで帰省の靴弾む　〆女
逝き急ぐ友を送って来た喪服　笛生
急いでる時に限って電話鳴る　潤子
信号は前より横を見て急ぐ　則彦
逢いたさが鍵の鈴まで急がせる　瑠美子
ハローワークもいつもの急ぎ足になる　ダン吉
退社ベル主婦に戻って急ぎ足　ひさ乃
　修
バブル期のくせで早めし急ぎ足　典子
花が散るまでに答えを出せと言う　倫子
死に急ぐ若さ痛まし自爆テロ　たず子
風に誘われ恋もさくらも散り急ぐ　房子
お急ぎならお先へどうぞ楢山へ　隆盛
散り急ぐさくらの美学盃に　なぎさ
救急車待つ身の辛さ身にしみる　かりん
急かされて手足が謀反おこし出す　たず子
世渡りの下手な男を急かす風　髙栄
急ぐほど足がもつれる下り坂　きらり
レモネードわが老春は急ぎ足　倫子
身支度を急ごう終点近いから　哲男
咲き急ぐ桜アトムの誕生日　重人
急がねばならぬ私の余命表　千里
急がねば賞味期限がすぐ切れる　重人
ケータイに呼ばれ階段蹴つまずく　柳弘
結論を急ぐと春にけつまずく　睦子
光陰矢さて晩学を急がねば　楓楽
急がねばわたしの春が逃げていく　いわゑ
落日へ急ぐからすも私も
　佳
待つ人がいるしあわせの急ぎ足　泰子
戦場へ急ぐ兵士の胸のうち　充子
秒針に押されて急ぐ命の譜　愛論
急がせてごめんトイレの戸を叩く　鐘造
急がねば釣瓶落しの女の季　アキ
　人
私とて賞味期限に急かされる　洋
　地
結論を急ぎ梯子を踏み外す　いつふみ
　天
お土産のアイスクリーム溶けはじめ　美代子
　軸
信号は赤急ぐまい急ぐまい

兼題「ひらひら」　吉村　一風選

ひらひらと逃げるわたしの諭吉さん　あやめ
上ったとひらひらかざす通信簿　照子
ひらひらと何も決まらぬ国連旗　尚士
ひらひらと舞って集まる花いかだ　蕉子
日の丸がひらひらするとうずく傷　楓楽
ポッケからひらひら落ちた花名刺　千里
ひらひらと悪女の修業しています　義
ひらひらもはらはらも無いわが余生　鹿太
切り捨てた愛がひらひら海へ舞う　潤子
夜の蝶ひらひらひらと酒くさい　昭子
産着ひらひら限りなく青い空　充子
たてがみをひらひらナイト現われる　柳伸
バーゲンのちらしひらひら不況風　泰子
ひらひらの舌はポリシーなど持たぬ　楓楽
ひらひらとしているようで抜け目ない　義
ひらひらと金魚が誘う龍宮城　理恵
ひらひらと札束が舞う選挙戦　公誠
短冊も花もひらひら通り抜け　弘風
ひらひらと雪か私か舞い落ちる　房子
一攫千金馬券ひらひら風に舞う　恭昌
ひらひらと散りぬることも命かな　保州
ひらひらと椿の花も散りたかろ　笛生
ひらひらと舞えぬ五弁の寒椿　㊟千代
紙吹雪浴びて嬉しい新夫婦　きらり
落花の舞ひらひら春を演じきる　かりん
満開の桜ひらひら散り急ぎ　菜月
女偏ひらひらさせて桜の下　アキ

蝶が舞う四国路を行く遍路笠　ルイ子
お銚子がひらひら飲みに行くとしよ　天笑
ひらひらとあの世の花を追いかける　扶美代
ひらひらと撒かれて困る杉花粉　甚一
ひらひらとイラクに散って行くいのち　笛生
佳
ひらひらと花に耳打ち蝶の舞い　隆盛
伏せて置く話ひらひら飛びたがる　〆女
せいいっぱい生きてひらひら散るつもり　ふりこ
ひらひらと散ってみたいと寒椿　哲夫
ひらひらのスカート恋をつれてくる　月子
人
ひらひらと遊ぶ身軽な影法師　民
地
金魚ひらひら浮世はいくさしています　いわゑ
天
ひらひらとヒマラヤ越える蝶の意地　茜
軸
たんぽぽのひらひらと舞い親離れ

兼題「萌える」　木本　朱夏選

神の杖ひと振り萌える木も草も　あやめ
胸になにかが萌えて意地悪ちょっとする　満津子
釘煮から弾む話題へ草萌える　柳伸
雑草が萌えているので逃げません　岳人
友の訃が届く野山の萌える今日　かすみ
手土産は春が燃えたつ蓬餅　直樹
冬眠から覚めて萌えだす好奇心　惠勇
萌える春酔うてふらふら四月馬鹿　比ろ志

春萌えて麦藁帽子買いに行く　睦子
三年目やっと萌えだすこぼれ種　泰子
誰にでも萌え出る今日という新芽　保州
少年の闘志さながら山萌える　直樹
草萌える新入生の瞳の確か　アキ
あやふやな心に萌える芽が痛い　みつ子
草も木もわたしにエールくれる春　月子
ちょっと目を離せば萌えてくるみどり　扶美代
老木が何の気負いもなく萌える　かりん
千年の杉人知れず萌えている　隆盛
木木萌えて森は交響楽になる　たず子
草萌えて女恥らう事を知る　萬的
樹々萌えてあなたに贈るラブレター　義子
草の芽がくすくすくすと萌えてくる　茜
草萌えてツンツンそそる旅ごころ　楓楽
十薬の芽がつんつんと萌えて鬱　潤子
草萌えて私多弁になってくる　アキ
草萌えるころから家に落着かず　義
息継ぎの春まろやかに草木萌え　柳弘
大地萌ゆ太郎も背伸びしたくなる　重人
萌えようと山もわたしも深呼吸　保子
花の下おばあのおめめ萌えている　天笑
草に寝て萌え立つ草の気をもらう　伽羅
もわもわと萌え出す予感水を飲む　保子
佳
ブラボーもトリックもなく萌えてくる　哲男
花燦々我が魂も萌えるとき　修
草の芽は萌え戦争はまだ続く　ダン吉
カリスマが退いて若木が萌えだした　冨美子

若草がわっさと萌えているエロス　朝子
人
思春期の下絵にあった萌えぎ色　瑠美子
地
百歳の背筋に萌えた跡がある　美代子
天
さ蕨が萌える乙女が拳解く　薫風
軸
メルヘンの森でちいさく萌えている

兼題「笑う」　河内　天笑選

顔を洗って笑う稽古をする鏡　螢
よく笑う女の傍でほっとする　初恵
母さんの笑顔は花が咲いたよう　深雪
少々のことではめげぬ笑い皺　冨美子
見つめれば微笑み返す花の精　柳弘
堅物のジョークに愛想笑いする　恭昌
何もかも見通している母の笑み　玄也
笑うってガンの特効薬らしい　朝子
犬も猫も笑いよったらおもろかろ　笛生
テレビ見て一人笑いに馴れました　菜月
笑うのも泣くのもひとり風の音　ひさ乃
死ぬほどの思いしたから倍笑う　扶美代
タンポポが笑ったように咲いている　鹿太
微笑みを返し人脈広くする　洋
笑ってよ一番好きな顔をして　昭
笑わせるやないお寺でコンサート　萬的
客の酒飲んでホステスよく笑う　いつふみ
にぎやかに笑って五年若返る　保子
生真面目に好きだと言って笑われる　朋月
当りくじ人の前では笑わない　重人
泣くよりも笑う演技は難しい　春
プチ整形笑顔が少し増えました　遠野
あいまいな笑顔だボクを避けている　扶美代
笑顔しか思い出せない好きな人　泰子
とりあえず笑う自分が忌々しい　寿美子
地下室でにんまり笑う独裁者　柳伸
梅干の妖精のよう祖母笑う　つづや
今噂してた笑顔で迎えられ　メ女
字幕出る前に隣が笑いよる　つづや
大笑い心の中も大掃除　かりん
金星に泪の光る笑顔佳し　満津子
通訳のあとに間抜けた笑い声　則彦
佳
一生に笑う時間は少ないぞ　哲男
笑うから私カラオケ大嫌い　弘風
笑ったり泣いたり激し更年期　澄子
仲人の嘘を親子で笑い合う　五月
戦争のテレビタ餉の笑い消す　修
人
笑ったら笑い返してくれますよ　保州
地
笑ったら小さい事にみえてきた　泰子
天
にこにこにこストレスたんと溜めて居る　潤子
軸
笑うても泣いてもかわらない顔だ

03すみさか大賞誌上大会

課題及び選者（各題新作2句ずつ4句1組）
「常」　斎藤　大雄・佐久間　蘭
松代　天鬼・伊豆丸竹仙
遠山　可住　共選
「自由吟」　大木　俊秀・下山　蛙柳
定本　広文・平井　吾風
中澤　恵生　共選

用紙　便箋（連記、ワープロ可）
投句料　一組2000円（何組も可）
締切　5月25日
発表　8月初旬（発表誌呈）
賞　合点25位迄、各都道府県1位賞、天位賞／句入り楯。他に10単位賞。
投句先　〒382 須坂郵便局私書箱18号 すみさか川柳社宛。

常任理事会＝4月7日、於アウィーナ大阪、出席19名　①第9回川柳塔まつり選者再確認、記念品下検討　②二賞選者一部交替者を決定　③特別常任理事会（6月6日）会場、案件について　④その他句会部―乗忌、路郎忌の件　同人部―同人4名承認、川柳塔ホームページ開設について討議
次回常任理事会＝5月6日（火）　13時アウィーナ大阪207号

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

サークル樽榛（前月分）西出　楓楽報

新しい春をさがしに雲にのる　いわゑ
ひな壇は春の花火を揚げている　義子
草も木もわたしも息吹く春はそこ　光久
春というだけで心が弾み出す　澄子
世の中はどう変ろうと僕の春　たもつ
明日へのゼロに戻した万歩計　保子
日暮れ坂自分褒めたり叱ったり　楓楽
旧暦の春をイメージして暮らす　哲夫
思うことの反対ばかりしてしまう　希久子
窓全開春の息吹きを取り入れる　房子
女狐の一言で下戸常連に　遠野
春の川鮒もドジョウももう居ない　正坊
春一番思わぬ幸をのせてくる　みつ子
叩けば動く時計ひそかに春を待つ　智恵子
太陽がいくつも昇る春の夢　千代
春陽さし冬の怠惰を見抜かれる　あずき

ローズ川柳会　山崎　君子報

逃げ切れぬ老いには素手で立ち向かう　てる
遠寺の鐘余韻しずかに谷をゆく　キク子
春の息吹いっぱい入れる窓を開け　みつ子
合格が一度に春を連れて来る　藍
逃がさぬよう優しく包む愛一つ　哲子
春の野にみどりやわらかふきのとう　トミヱ
春風にふと誘われて花の旅　貴代子
春の日やいのちはねてるメダカ稚魚　まさお
気味悪い逃げ腰になる妻の笑み　孝一
心中の秘めたる愚痴が皺になり　雅子
過去は言うまい太陽に笑われる　澄子
前髪をつかむぞ春の風にのり　いわゑ
余生まだうたかたの夢追うている　武庫坊
戦争反対逃がしてならぬ青い鳥　君子

堺川柳会　河内　月子報

みかん山白く見えるは梅の花　春蘭
へそでかいものから食べるみかん通　健吾
絵手紙のみかんはみ出し落ちてくる　篤子
差し向かい黙ってみかん剥いている　朋月
郷愁はみかんの汁であぶり出し　俶子
不運とは八百屋で腐りゆくみかん　好
正月は三役返り咲くみかん　時雄
みかんの樹蝶と約束あるらしい　みつこ
いじめられだんだん強く育った子　日の出
知らぬ間に僕の答が消えている　舞夢
バスガイドおばさん達に野次られる　なぎさ
やさしさに飢えるといけずしたくなる　泰子
年金は下げられ保険値上げされ　さくら
電話口いけずな会話もれて来る　世紀子
お掃除を趣味にはとても出来ません　伽羅
掃除魔は困る放っとくのも困る　つづや
掃くほどにあった中から選った妻　洞庵
黒光りおからで拭いた亡母がいる　りつえ
丸く掃くDNAも授かって　千代
年一度腹の掃除をしてカメラ　像山
駆け込んだトイレに掃除中の札　玄也
踏み込めば乱数表が残ってた　愿
吹きやまぬラッパ異国の野辺送り　恵勇
みかん狩り食べ放題と言われても　冬虹
文箱にラッピングして残す恋　アキ
古ぼけた裸婦の絵を買う蚤の市　百恵
蕗の薹ラーメンに入れ喉鳴らす　楓
大卒でやっと就職車拭き　彰
夫婦でもラインの外はノータッチ　潤子
一番のいけずは先に逝った人　半銭

東大阪市川柳同好会　森下　愛論報

大漁で演歌聞こえる祝歌　秀夫
忘れられ一人で祝う誕生日　シマ子
半熟の歩幅を祝う七五三　元紀
修羅一つ抜けた女のサングラス　柳弘
メガネかけた羊のマンガ賀状くる　章久
百均の眼鏡でさむい記事を読む　湖風
思い切り叫ぶと弾む広い胸　弥生
大の字に寝る故郷の青畳　半蔵門
トンネルをくぐる私も世間並み　柳宏子
トンネルの闇へにんげん試される　朝子
人生のトンネルいまだ通過中　賢子

肩幅の広さ頼られている男　萬　的
余力まだあろうと広い海がいう　ダン吉
海という器が世界育てる　太　郎
深傷負う夫婦に温い日がめぐる　三重子
白黒をつけると傷になる話　緑
復興はしても癒えない胸の傷　あや子
優しさに隠し通した傷ひとつ　愛　論

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

有名と無名の間で楽に生き　好　栄
木蓮が咲いて妖しい枝の闇　民　子
有名でない子が傍にいてくれる　ちよえ
地球儀がまわる有名人の都落ち　はるみ
有名な小鳥はいつも籠の中　かつ子
有名になったばかりに歩けない　聖　子
一瞬に有名人になった雲　恵美子
有名になりかけている秘書の席　博　利
有名な山も時には人を呑む　清　泉
にっこりと握手戦争させながら　白　汀

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

今更に親の諭しの重さ知る　茂
再婚は今更しない皿洗う　晴　美
今更に曲がれない角一つある　節　子
親不孝詫びつつ辿る花遍路　たい子
疼く胃を敵のように切り捨てる　憲　夫
リストラの疼きに耐えている拳　泰　雄
モノクロの疼きを刻む古時計　孝　一
こんな夜は疼いてるだろう父の足　スミ子

一昼夜疼く恋なら本物だ　鹿　太
借金とストレスこたえて不整脈　治三郎
長いのに巻かれてからの不整脈　庸　佑
やな予感脈が激しくゆれている　秀　夫
信頼が不信に変わる不整脈　澄　子
人ひとり許せぬ夜の不整脈　きよえ
ほとほととハローワークで泣く不況　比ろ志
ほとほとと暗いニュースに飽きがくる　高　栄
ほとほとと愛の怖さを知らされる　満寿蔵
侮った坂にほとほと乱鼓動　稲　子
また落ちるほとほと意気地ない凪よ　一　央
一切を呑み込んでおく喉仏　活　恵
分るまい下戸にビールの喉ざわり　克　治
ここからは妥協をしない喉仏　重　人
幸せは胃カメラ知らぬ喉仏　無　禄
母だけが和む言葉を持っている　八斗醸
両輪が回る今日から夫婦です　メ　女
言い訳もせずに独りの苦い酒　五　月
神様の大きなお灸かシャトル事故　初　恵
ぬくもりが欲しくて老いの輪の中に　光　穂
泣き事はおくびも出さぬ妻勝気　武　史
平凡に生きて人並み風邪をひく　萬　的

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

こぼれ種大地に抱かれ春を待つ　ひかり
胸を打つ話だ箸が進まない　かおり
木を伐って地球の水が涸れてゆく　吟　笑
さり気ない言葉気になる迷い道　勝
風呂敷に包み切れない母の情　あきら

優しさが全てを丸く取り仕切る　八重子
見舞うたび淋しい友の目に出会う　治　延
産声と共に定めも生れくる　放　任
子を産まぬ貯金が手数料まで取られ　賢
湯呑二個転げてロマン咲く季節　輝　夫
河童でも川の流れに乗り切れず　いさむ
川下り悲鳴の中に我を置く　貞　月
子等寄りて卒寿の老母の手をさする　寿々女
脇役に徹し可憐なカスミ草　よしみ

川柳塔みぞくち　小西　雄々報

大山の正面に住み羨まれ　公美枝
正面の桜が迎え入学だ　千代美
マイナスの気温へ床を抜けだせぬ　静　江
大寒へあと少しだと春を待つ　鈴　枝

佳句地十選（4月号から）

山本半銭

さよならは桜ふぶきの中がいい　葉　子
モンローに勝てる下着をつけている　和歌子
百本のローソク飾るまで粘る　圭　風
豆さんで逃げる鬼なら可愛らし　一　風
落の憂わが越し方に似たる味　信　子
ライバルがつまずいているいい坂だ　完　司
介護する身には昼夜のない時計　(安)泰　子
掴き立てが届く今年も元気だな　小　雪
最初はグーそれから個々のストーリー　(山)節　子
ひたむきに生きてきれいな骨になる　久　子

寒さには滅法弱く春よ来い　和代
古傷を隠して寒い心知る　智恵子
頂点に立てば寒風吹きつける　久子
寒の明け待ってましたと蕗の薹　豊枝
凛として自己主張する寒牡丹　弘子
雪が舞う誰も無口な葬儀場　正光
水甕の底から寒い返事する　雄々

竹原川柳会　時広一路報

エリートの鴉は街に住んでいる　蘭幸
ひろしまの雪は祈りの型をもち　笑子
雪しんしん雪は羽毛に似て温し　栄恵
降り積る雪はね返す若い竹　幸子
雪の朝お日さまにこり鳥うたう　孝枝
凍み大根大地の愛に育まれ　淑子
私の愛宅急便で送ります　千枝
まんまるなおにぎりひとつ愛ひとつ　史子
北の林檎南のみかん共に泣く　節生
朝食の会話無いままリンゴ剥く　汎美
焼き林檎一味違う嫁の味　夏喜
テーブルのりんご静かに座ってる　民恵
仲直り無言でりんごむいて置く　敬子
言う事は一人前の青リンゴ　規代
赤青黄林檎も旬は美しき　菁居
リンゴ村出ると林檎はウソになり　節夫
病んだ日の母と林檎とゆで玉子　厚子
母がむく林檎は母の味がする　静風
カアカアカー鴉にもある自己主張　房子
姥捨てのお山でカラス欠伸する　正宏

母の無い子供が唄う七ツの子　慶子
神の森昔はよかったなあカラス　貞子
ネオンの森で今日の鴉は夢をみる　不朽
人間よりも偉いと思っている鴉　半覚
なあ鴉私と同じ音痴だね　一路

打吹川柳会　大森孝恵報

ブランド品皆が囲んで品定め　晴光
お別れに花に囲まれ死の旅に　澄子
囲炉裏火を囲んだあの日遠くなり　久芽代
二重に囲み花が見えない寒牡丹　玲子
囲んでも逃げ道ちょっと開けておく　玲坊
柔らかいもみじの手から春を呼ぶ　禎元
湯けむりの中にやんわり乳房見え　幸香
柔らかな口調にのってだまされた　友楽
柔らかな言葉の裏に落し穴　京子
柔らかな口調でペロリ二枚舌　善江
京おんなやんわり急所ついてくる　季芳
柔らかな視線になった母を看る　きみ子
崩れゆく音がわたしの人生か　克枝
柔らかな言葉たくみにのせられた　龍枝
真相の癌とは言わぬ思いやり　芙美子
真相は言わず無言の行となる　かつみ
柔らかな春の陽だまり猫になる　三津子
柔らかにくすぐるような褒めことば　睦子
亡母の夢見る柔らかいそば枕　雄々
柔らかい土の命に種を播く　清
土蔵の戸ぎしぎし明治呼びおこす　博丈
ぎしぎしがモーツァルトで溶けて行く　和子

真相を究明したら乱気流　幸子
真相はフランス料理食べただけ　螢
真相が知りたい臆て逝く所　節子
経済の地盤ぎしぎし日本丸　泰山
深い河渡るぎしぎし櫓が責める　芳光
ぎしぎしと腰がなる日が増えてきた　紀美恵
ぎしぎしと軋む日もある糸車　順子
年代の囲み拡げて生き上手　孝恵

川柳ささやま　遠山可住報

古希の道手の鳴る方へ迎えられ　恵美
口あたりいい甘酒に騙される　純子
童唄鼻でうたって早春の道　多美子
無理するな未来へ残した亡母の声　美智子
浄土の道迷わず行くを信じよう　冨子
子と二人生きる道ならもう泣かぬ　八重子
雑学の中で探している未来　靖子
間違いのままで漕いでる未来船　とみ子
人の道外さぬ母のしつけ糸　つや子
耳に残るあの口癖よもう一度　君代
逆境の未来は孫に夢託す　朝子
万歩計花咲く道が待ち遠し　康子
踏む草も春への息吹　散歩道　美紗子
輝きの日もあったよな彩の道　美緒子
雪景色こたつとみかん友にして　開子
未来など読めぬが今日を楽しもう　哲男
野仏とみかん分け合いひと休み　寿子
極楽に着いたらメールでもしよう　芳郎
冬眠していますみかんと堀炬燵　可住

熊本川柳会　高野　宵草報

ガムを噛む無口な男の逃避かも　俊子
男女別区別のつかぬ老年期　あや子
肉筆の賀状うれしく読み返し　百合子
簡単な社長挨拶みなホッと　末
鶯の初音に今朝のウツも晴れ　エツ子
被告人のように患者がかしこまる　百笏
七五三千歳飴より目立つママ　清香
つまずくと街のあかりがみな他人　大三郎
背なの子に聞かせた遠い子守歌　とし子
どん底の悲しみ支えた子と暮し　紀子
急ぎ買い駐車した位置浮かばない　康子
ストレスという風船のガスを抜く　敬久
床の間にデンと座った鏡餅　義申
お願いに天神様を梯子する　柳詩
日めくりに昨日の私脱いでゆく　宵草

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

もたもたの人生だった足の裏　あすなろ
初孫をガラス細工のように抱き　きよし
ガラス器の中で蠢く有精卵　大吾
太陽の下では出来ぬ悪巧み　ヒサ子
モタモタと歩く背中の丸いこと　てる
貧弱な家で育った養生訓　順風
飽食のノラに野性の足がない　慕情
冬の絵が見事に続く窓ガラス　銀波
飲み足りぬ視線の先にあるボトル　ふさゑ
鯉のぼり育てた子等は古希迎え　花匠
高僧が喜捨を集める変な寺　愁女
悪巧み鍵の穴から動きだす　ツネ
もたもたじゃないよ私は蝸牛　井蛙
要領が悪いと言わぬ母がいる　黙人
ビー玉の記憶に残る少年期　花峯
保育器の中で微笑む宝物　一花
分校が育てた子等の人間味　劦
讃美歌がステンドグラスくぐり抜け　五楽庵

川柳塔なら　坊農　柳弘報

初恋の友とタンゴを踊る夜　彰治
意識して後ろ姿を学ばせる　博一
カタカナ語子に発音を叱られる　きらり
パソコンを孫に学んで至福の日　カズ子
面倒だ中途半端に習うから　蘭香
講座聞く鮮かいてる脳の中　ふりこ
険悪なムードへ垂れる星条旗　佳子
飾り皿陽気にさわぐ人を呼ぶ　敏子
経験が力になった社会学　登美子
緊張のムード花束抱いたまま　とし子
晩学に辞書の重たさどっしりと　春蘭
悲しみを越える工夫をする理性　恵美子
余韻まだ抱いてムードのある別れ　秋泉
底辺の生きる工夫の年金者　章久
絵手紙に工夫こらした愛の詩　春雄
先代の工夫老舗の隠し味　太一
フラメンコ真紅のバラに誘われて　道子
体で学ぶ時本物の汗をかく　孝子
だまされてみようか月も傘の中　理恵
同じこと学んで運が差をつける　茂雄
登校拒否の子も抱き入れる夜学の灯　あやめ
淡雪のムードにとけてゆくふたり　朝子
星の降る宿が二人に火をつける　國治
七十年苦楽学んできた丸さ　和夫
シャネル5のムード二月を駆け抜ける　洋子
温かいムードでシャガールの青と　秋雄
実篤の皿にやんわり諭される　恭昌
雪しんしん青衣の女人立つムード　富子
おやっさんの工夫でまわる町工場　真理子
人間の怖さ人間から学ぶ　良一

京都塔の会　都倉　求芽報

参道に五欲を満たす逢餅　春蘭
湯豆腐の湯気の向こうで合う視線　年代
大根の味の深さを知る寒さ　武庫坊
豊かなる山河に生きて虫の息　和友
絵画展すきなことなら寒くても　達子
生きているたしかな音で朝の水　篤子
童唄 好きだからするとおせんぼ　正坊
香水は仄かに匂うほどがよい　あやめ
切手マニア実益ねらいの夢破れ　輝美
三日坊主マニアになんてなれません　益子
仮の世の仮の命をいとおしむ　典子
仮説繕けば卑弥呼になるロマン　欣之
仮免許 乗せたい人が待っている　求芽
仮定した夢へ届かぬ低金利　萬的
仮免の娘の横に乗る勇気　満子
尊敬をしたい仮にもお父さん　啓子

はずしたい仮面を一つつけてます　幸代
珍らしい名前で仮名をふる名刺　克治
抜擢で近寄り難い人となる　庸佑
寄り添うて生きにくい世で耐えている　ルイ子
ちょっと寄る それがちょっとでない人生　福子
勉強になった寄り道無駄にせず　〆女
寄り添うて親を大事にしてあげる　礫
凡人は金とお世辞に寄ってゆく　宏子
立ち寄るといつもの顔が揃ってる　葉子
新築に幅をきかした中古品　とし子
中古でも雨露しのぐ我が御殿　高栄
中古車も免許も無縁 自転車で　百合子
子沢山母はせっせとリサイクル　芳子

ほたる川柳同好会　田辺正三郎報

雑草のようにと願い古稀迎え　禮子
無利子だがタンス預金にある信度　祥風
草もちはなぜか田舎の味がする　長一
忘れてるふりがうまくて敵がない　禄骨
信金と銀行の差はいい笑顔　保子
練習の補欠につらい草むしり　ヤギエ
健気にもよもぎ舗道のすきまから　敞子
物忘れ認めて丸くなってゆく　雪子
信じてるまっすぐな目だ答えねば　桂子
信用をして長いこと夫婦です　見清
ド忘れにボケとは違うといたわられ　契子
クラス会参加予定を忘れてる　信男
銀行の信用調査して預金　黒兎
お互いにもう忘れよう明日のため　久子
信じない訳じゃないのに出るうっそー　正三郎
忘れたと言えば言ったで馬鹿にされ　幹治
恐い事故忘れないのに次々と　陽子
実物を見たことがない座禅草　賢次
忘れ上手似たもの夫婦覚え下手　勝

川柳塔まつえ吟社　津川　紫晃報

ときめきが残っています笑い皺　たけし
ときめいてラストダンスが踊れない　圭詩朗
午後三時ときめいてくる花時計　治代
ときめきも憂いも海にすてて来る　蘭水
ときめきは赤いお酒のグラスから　秀子
ときめいて猿はリンゴのまるかじり　きみえ
褒められてしびれた膝をくずせない　俊一
褒められも叱られもせず独り者　義良
褒められてはにかむ孫の肩叩き　房子
好い人だったと褒めてる葬の列　きみ子
太陽に褒められているもさくら　蛍
怒ったり褒めたり伸ばす子供の樹　ちかし
相性はいいが喧嘩ばかりする　多喜
相性の紐が伸びたり縮んだり　茂美
相性がよくてきれいな花が咲く　静恵
相性は円満という好感度　日出子
相性に甘んじ低温火傷する　多賀子
酒瓶を提げて相性やってくる　叮紅
脇役のうまさ主役の名演技　政子
脇役で満足してるかぼちゃです　芳山
肩こらぬ脇役でいて性に合い　知恵子
脇役のワサビわたしを叱咤する　桂子
脇役をきっちり果たす紅しょうが　淞丘
脇役も舞台の袖をトンと踏む　注湖
回してる卒業生のサイン帳　幸子
人間のゴミになるまいVサイン　ちえこ
瀬戸際のサインはゴーと決めている　玲子
ふる里に残すサインがまだ書けぬ　昭二
今日なぜか哀しいサイン茜雪　畔
逆境に耐えた男のVサイン　紫晃

尼崎尾浜川柳会　田辺　鹿太報

ペアマフラー仕上がる前に恋は逃げ　美代子
恋ごころそっとひそます毛糸玉　その
嫁ぐ気のないのが家に一人居る　幸子
友嫁ぐ母の小言の多くなり　全彦
嫁ぐ娘にそっと持たせる料理本　江美
いつまでも青いリズムで踊りたし　比ろ志
親鶏の愛を知らない無精卵　鹿太
古毛糸色それぞれにある想い　玉枝
子育ての苦労と喜び二度背負う　よし子
娘が嫁ぎ今は自由の夫婦みち　カズ子
日本一嫁ぐ我が娘の晴れ姿　秋子
病気とも友達になり元気です　信子
春の陽にヨチヨチ歩き踊る脚　まさ
炊きたてのご飯と玉子良いコンビ　亀与子
婆ちゃんと孫が作った毛糸玉　耕治
披露宴どうでもせいと父の酒　孝一
カラフルに毛糸まとめて春を着る　正治
頑固さが浮き彫りになる停年後　澄子
風船と軽さを競う春の月　求芽

旅立ちの朝へ地玉子ポンと割る　紫香

かわはら川柳会　上田　俊路報

世渡りもジョーク生かしてうまくやる　道子
癒えてますジョークと知った過去の傷　泰良
晴れぬ気をかるいジョークで救われる　余吏子
味のあるジョークをもらい立ち直る　かず恵
長ばなしジョークとばして座をわかせ　雅予
ジョークでの花粉が咲かす恋の花　寿子
臥せし母ジョークひとこと笑顔咲く　悦子
叱りつつ孫の視線に迷ってる　好道
安物があふれる部屋で迷ってる　静子
ショッピング迷い迷って服一つ　登生
信念が迷わず事を成し遂げる　聴
迷いから覚めて明日の窓を拭く　俊路

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

下駄履いた経費が罷り通ってる　なが子
ひと月のメニュー　お肉が減っている　みさ子
老年の経費に省く物もある　保子
年々に経費が嵩む米作り　はるお
水増しの経費から出る黒煙　和子
決算書経費の査察まだ続く　弘子
ひな壇に置いて賑わう桃の花　汲香
壇上の一人芝居に泣かされる　公子
肩のちから抜いたら友がよってくる　幸枝
歳取るとこんなものかな物忘れ　武子
長生きのなみだ嬉しく流れ出る　八重子
老いてこそ嬉し涙に恵まれる　喜与志
その次が言えず涙で暈しとく　実満
なみだ流れて自発呼吸消えてゆく　孔美子
身に染みる言葉になみだ脆くなる　節子
蛇口全開なみだを流すざぶざぶと　彩子
この頬にこぼれるしずく拭うまい　立亥
ぶらんこが大きく揺れて迷いだす　久枝
ぶらんこの夢は遙かな沖へこぐ　くに子
人生もぶらんこ花も風も吹く　きみ子
ぶらんこの芯は錆びない夫婦仲　菊乃
ぶらんこの上で船酔いした不覚　茶子
へそくりを出しても経費足りませぬ　睦子
任されて赤字のはめになる経費　かつ乃
新築の経費を他人聞きたがり　房子
終章の負担のほどは持っている　諷人
真結びをほどく経費は付けてない　盛桜
うわごとに戦陣訓をくちずさむ　石花菜
蝶二羽のハミング春の花畑　富久江
目には目を花に唇　口遊む　螢

川柳塔唐津支部　久保　正剣報

評判の正直者だけど孤独　平八郎
粗品とて福祉の上のその供養　實
四島のこと聞きながらサンマ焼く　勝視
金婚の夫婦よく似た顔になり　輝夫
結婚の誓詞ときどき読み直す　晴翠
虚礼廃止の声も薄れた秋祭り　高明
傍目にもどこか不自然フルムーン　水笑
蒲公英に乗って良い友探そうね　虹汀
三つ目の祝辞中略ほめられる　四郎
発泡酒タバコと書いたら揚る凧　正剣

西宮北口川柳会　黒田　能子報

句は楽し無名のままで終るとも　求芽
青テント無名作家のベレー帽　たず子
無名というとても愉快な羽をもつ　いわゑ
ひっそりと咲いた無名の花の意地　光久
少年は沖を見つめて鳥になる　鹿太
わだつみの挽歌で沖は夕焼ける　比ろ志
哀愁は沖行く船の汽笛の音　江美
夕陽沖にふと寅さんが来て座る　富喜子
狭い国沖へ沖へと埋立てる　松煙
日本の沖にミサイル不審船　貴代子
温暖化沖のかもめに聞いてみよう　章子
流氷が去って沖にも春の色　美代子
それぞれの思いを乗せて沖の舟　良恵
沖釣りの成果を待っている板場　房子
明日そっとのぞく気でいるエステビラ　哲男
千枚のビラより強い口ひとつ　キク子
猫にまで邪魔にされてる粗大ゴミ　石舟
路地裏にこんなにうまい歌手もいる　五月
星占い悩みありそな易者居る　孝一
初めての名前を決めて待つ二人　昭三
寒くても土鍋があると盛り上る　歳子
社長のおこじょうすくいの出る時分　春蘭
考える人　たまには伸びもしたかろう　嘉彦
馬の脚拍手励みに燃える日々　絹
雑木だと思って抜いた大事な芽　光子
盆栽の花も可愛く咲いてくれ　トミヱ

義理チョコのかけらも貰ったことがない　晴美
愛してると好きやとどこがどうちがう　いたる
貧しいが愛はたっぷり満たされる　陽子
同情がいつしか愛になる月日　澄子

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

人生を乗せた人力車が軋む　優子
人は皆きれいな星にリサイクル　よしこ
笑い袋が足りないそれからの不況　輝子
大黒の寄生虫にはなるまいぞ　保州
昨日今日明日へ弾む芸の虫　利治
人間を虫けらにする赤い紙　大輪
虫押さえと出された酒で酔いつぶれ　良一
処世術下手な男で本の虫　克子
無農薬虫と共存する畑　順子
夫乗せた人力車です車椅子　紀久子
人力車夢がアルバムから零れ　寿子
人情を交しながらの人力車　和
人力車に乗ればわたしもマドンナに　あき子
車夫の引く二輪が春を連れてくる　鉄治
舞子さん乗せて嬉しい人力車　和香
フルムーン寄り添い照れる人力車　怜
姉ちゃんが泣いて嫁いだ人力車　稚代
我が足を信じて振った人力車　泰子
定年後はたけ違いヘリサイクル　豊太
過去捨てて生まれ変った再生紙　正博
震災後非常袋と共に寝る　英子
それからはもう懲りました綱渡り　清史
それからが空気のような凡夫婦　佐代子

それからの父の拳が温かい　裕美
本音ぽろ　それから長い雨季に入る　結実
それからは監視されてる浮気です　冨美子
それからの次の言葉が恐くなる　三男
それからの言葉に弱い聞き上手　佐一
三分粥それから命嚙みしめる　さち子
お見合いのそれから先は君次第　三喜夫

城北川柳会　川久保睦子報

大相撲モンゴルに国技取られそう　政子
切り替えの時が始まる八十路坂　東雲
不景気を払ってくださいえびすさん　あい子
元旦や東雲の空晴れ渡る　久留美
強がりも何処まで続く北の国　柳一
三寒四温梅一輪の春はそこ　高栄
味方にも見せない策が伏せてある　はじめ
鑑定団に出すまで家宝だった壷　柳弘
永き夜の吐息グラスを曇らして　春蘭
懐しい匂いも消したにおい消し　求芽
空き缶を山ほど積んで今日の糧　昭子
不況には関係のない暮らしむき　千歩
酒に更け薬に寝た夜の旅日記　史風
駆け落ちは駅に薬缶捨ててゆき　順三
生きている証鉛筆とがらせて　重人
見渡せばひとりになれぬ人ばかり　綏子
春だものちょっと煽てに乗ってみる　一歩
おみくじが大吉一寸よい話　倫子
だんだんと大切になるお父さん　典子
山茶花が咲きまたひとつ歳重ね　ひさ乃

通せん坊されては他の道知らぬ　修
雪どけの水にも春の姿あり　千里
過去は皆包んで女強くなる　メ女
会社でも家でも鬼は外の父　公一
威張ってるけれどウイルスには弱い　達子
一身上ウイルスつけて出す辞表　とし子
ふる里の山河の声はよく聞こえ　トヨ子
悲しみを伏せて耐えてる涙つぼ　志華子
シャボン玉薬の先から虹が立つ　正
呑気ではおれぬ年金やせてくる　睦子

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

告白は君からだったと譲らない　アキ
価値観の違い妥協へ雨の音　慶子
落ちるよに降りてくるのは雀です　香住
条件を少し落として婿選び　シマ子
横波を受けて沈んだ僕の夢　弘直
わたくしに意外な人が火をつける　欣史子
残り火はかすかに燃えて終の道　加津子
燃えかすの体へまぶし春陽さす　あずき
不完全燃焼婆ちゃん八つ当り　喜美子

三幸川柳教室　古久保和子報

裏方に徹し黙々汗をかく　義男
大根が立派に出来たこぼれ種　和代
自己破産記者会見が立派すぎ　美枝子
お人好し立派な取り柄だと思う　さち子
範垂れる立派な方で距離を置く　准一
無位無冠いつも静かな昼の月　登美代

立派なビル建って眺めを遮断する　三千子
立派さの陰で泣いてるマスゲーム　純子
押し出しが良くて社長と間違われ　碧
ご立派な髭を生やしたモンタージュ　保州
騒らない姿勢が光る回り椅子　みね
ご両家の見栄で立派な式を挙げ　鉄治
リストラへ立派な腕が夜泣きする　清史
嗅ぎ分ける立派な鼻を妻が持つ　章子
立派ですだから愚息と呼び易い　昇
期待かけ商店街の福袋　一歩
若者が歩くと町が活気づく　次根
過疎の町日に一本の義理のバス　嘉平
町名は学者先生にも読めず　桂香
合併で育った町の名が消える　武
星のない街で遠吠えしたくなる　朱夏
殿様の足跡探す城下町　幸
この町の空気に惹かれIターン　当代
街角の無口を埋めているライブ　町子
キューポラの街が私の青春譜　靖子
方言をつれもて町が動いてる　起世子
町おこしの神輿を担ぐ生き字引　千秀
バリアフリーやさしい顔の街になる　和子
吉宗も佐和子も担う町おこし　栄之進
デジタルの街でおいてけぼりをくう　公子

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

暗闇に火の粉まいてる二月堂　正子
故里から草餅きな粉添えてある　糸子
老いぬれば油断ばかりが目立つ日日　吉太郎
油断せぬ男の背中影がある　寛之
油断から火の無いはずが立つ煙　東園
大観の富士に一礼して移る　勝巳
ゴッホ流幼な児の書いた素直な絵　幸子
夢二の絵見るたび浮ぶ若き日日　千恵
有終を飾る下絵がまだ描けぬ　武庫坊
梅園でチーズで写る友の顔　節子
あすのため消したい記憶ありますか　久子
陽のサロンメロンソーダの青透ける　和子
さりげない所作春風吹いてくる　昭三
啓蟄や胸に火薬を秘めて待つ　半蔵門
世間騒然含羞の梅ひらく　光穂
うつ症を呑んでくれそう河馬の口　薫
雛様はあくびみられて目を伏せる　しづ子
傷口を乾かしている春の風　歌子
現実の今に目を向ける一汁一菜　定男
風は囁きに似て初蝶を急かす　芳子

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

月と酒浮かべ愉快な露天風呂　耕策
猪口二杯愉快な人に早変わり　いさお
愉快な話盛り上ってるティータイム　庸佑
小錦の体ゆかいなコマーシャル　みつこ
遺伝子が我が家に続くお人好し　一知
妻退院やはり我が家と横になり　昭平
我が家のローンも終り晴ればれと　フジ
地上げ屋に家をのぞかれふるえてる　敦子
ローン完済表札少し大きめに　遠野
でんでん虫住宅ローン終わったか　ダン吉
亡父の影亡母の香りが残る家　悦子
ビルの底お日さま恋し鬼瓦　りつえ
家を買ったつもりがマッチ箱だった　元紀
我が家ではトイレが知恵の出るところ　ロマン
木の家が建つトントンと音がする　美代子
切なくてペットショップの子犬の目　喜久子
ゆっくりと鳴れば切ないオルゴール　扶美代
雪しんしん切なさ解かす春の舞　さとみ
中流の自負に切ない不況風　吐来
母の忌がまた巡りくる梅の頃　桂子
病床へ切ない嘘を突きとおす　泰子
職安の羊切なく群れている　重人
昼酒を飲んでノルマが果たされず　専平
社運賭け背負うノルマに沸くファイト　たけし
不況風ノルマに尻をたたかれる　昇
後輩にまたも抜かれたノルマ表　久仁子
雨の日もノルマを果たすスニーカー　かつみ
妻や子にノルマは言えぬ力瘤　一壺
ちびた靴ノルマノルマと追いかける　敏
やっとノルマ果たした夜の旨い酒　志洋

むらくも川柳会　毛利幸報

合格を聞いてうれしい春の声　彰
合併で同じ市に住む君と僕　信夫
ぎしぎしと建具きしんだ屋根の雪　定子
合併が町に大きな夢描く　幸
おしゃべりがぎしぎし嫌な誤解生む　秀子
世の中がぎしぎし不足まだつづく　明朗
年賀状春の素顔で希望待つ　安男

くよくよとしない素直で丸く生き　仲　子
米寿とかその生業に学ぶこと　ふさえ
愛情の輪に囲まれて今日も幸　まさ子
また一人元気な友の訃報聞く　美喜子
いろいろな羊に出会った年賀状　昭　子
八十路坂長き人生回想譜　寿
わくわくす子供の世界雪の町　ツル子
当選が決まってうれしクイズ狂　美恵子

川柳ふうもん吟社　杉本　孝男報

三日飼われてペット人間臭くなる　洋々
あっけない別れに心持て余す　圭一郎
パートナーおんなじ罪を背負わされ　一瑤
息合わせ空気のような連れであり　大鯰
ときめきを求めて春の風を待つ　美雪
身分証明盤まで名札付けられる　(山)節子
あっけない過労死の靴抱いている　美恵子
戦争はいらぬ平和を求めてる　朋恵
拾った犬が亭主面して前歩く　(盛)節子
耐えてみよさあでに大人脱皮する　春名
あっけない命にしがみついている　昌鼓
パートナーのリードがあって生きられる　雅女
その場所へ居たばっかりに疑われ　茂登子
仲間ですだから古傷かばい合う　早牛
パートナー結んだ糸に隙がない　志げ緒
求愛の言葉あなたを信じたい　保子
パートナーの戦争好きに悩まされ　(細)裕子
請求書水増しの影浮いている　益子
告白をしたのにあっけなく振られ　一京
席ゆずる君もさあでにゆずられる　一粋
諭吉君クラブに行くとあっけない　重忠
求めても足りない愛に子が背く　のり代
あっけなく別れますわと逃げられる　一枝
愛だけを求めた若き頃もある　はつ江
僕の骨拾ってくれる人がいる　無限
町中に求人ビラの夢をみる　宗明
あっけない操縦桿は妻が取る　行男
あっけなく酒にも負けて死に給う　螢
あっけない幕切れを見る痴話喧嘩　敬之介
終の日はパートナーへも有難う　孝男

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

大安日にも救急車霊柩車　洋
大きすぎ列から外される胡瓜　たもつ
大空に抱かれ味方も敵もない　ミツ子
大海の匂いを知っている子亀　潔
大声で呼ぶから大声で返事　庸佑
大きい目大きな胸にプチ整形　きよみ
紙雛を飾る園児の目の高さ　巳代一
ひな祭りいけず顔した官女達　弘直
愛惜の沖へゆらゆら流し雛　欣之
内裏さま残してローンまだ続き　弥生
雛人形一年分の息を吸い　肇
一日の騒ぎまとめたゴミ袋　ひさ乃
鳩尾の辺りで騒ぐ男の火　秋雄
騒いだら夢がこわれてしまいそう　ますみ
騒ぐんじゃねえと切りたくなる啖呵　とみを
マスコミが騒ぐ弱者を糧にして　ダン吉
切り札を握った男騒がない　幸生
騒しい頃が良かった侘住まい　欣子
バブル期の胡坐今更付け重く　宏子
修羅越えたあぐらの父の底ぢから　民
神ならぬ身活断層の上にあぐら　万亀の
胡坐では居れぬ年金削られる　シマ子
戦争の話胡坐で聞かれない　千里
慈悲だろうひと雨ごとに芽吹くもの　柳伸
円満は文殊の知恵に活かされる　東雲
説明書読めば読むほど縺れてる　加津子
奔放な自由を捨てて滝凍る　半蔵門
雪解けへほほえむ僕と土と花　一風
安心を一つ見つけた春の赤　森子
泥に根を沈めて清し蓮の花　宏至

南大阪川柳会　吉川　寿美報

ほんわかと夢がひろがるちひろの絵　萬的
平山の流沙浄土に手を合わせ　直子
ドカの描くバレーシューズへ夢無限　朝子
夢二画く女の好きな月見草　ひさ乃
フェルメール余韻を残す少女の瞳　志華子
睡蓮をそだててモネのファンです　千梢
大津絵の鬼は憎めぬ笑顔持つ　清成
すぐわかる絵に本人の癖が出る　民代
大器ほど潮はゆっくり満ちて来る　宏
器では計りきれない孫の伸び　シマ子
土器一つ幾千年の夢を馳せ　なぎさ
答から逆算器小さすぎ　東雲
受けて立つ網の器量を見せつける　庸佑

手のひらの器ですくう命の灯　珠美
着替えたら器に見えるから不思議　頂留子
名器ではないが夫婦の飯茶碗　柳弘
愛燦燦母の大きな受け皿よ　寿美
春風がくらの扉を開けさせる　柳伸
蜂の巣を許して蔵の人嫌い　雅文
くら並ぶ町へさがしに行くロマン　重人
嫁三代たんす並んだ故里の蔵　叡子
広辞苑敬遠してる電子辞書　度
がみがみの頑固親父を遠ざける　弘泰
敬遠のボールは見えるように投げ　敏幸
敬遠の方におにぎり褒められる　日出子
恋文に押し花添える山男　桃花
恋文より百万本のバラがよい　千里
ホワイトデー恋の返事もそっと添え　遠野
たった一行あなたは僕の太陽だ　たもつ
利口ぶる女に来ないラブレター　章久

川柳ねやがわ　平松かすみ報

旅の宿 湯舟にうつを流しとく　とし子
初孫のつるり湯舟の腕の中　れい子
じいちゃんの昔話を聞く湯舟　修
薬草の湯舟に浮かぶ鬼の首　恵子
湯舟など難民夢の夢だろう　三峰
湯舟まで追いかけてきた社の電話　庸佑
逃げ足の早い男は風を読む　朝子
逃げられた上に慰謝料迫られる　仁清
言い逃れせずに去り行く背が広い　沙置子
風船の逃げた方から春がくる　度

逃げそびれ今も女房の柵の中　弘一
ポケットが多過ぎいつも狼狽える　勇太朗
ポケットで離婚届けがあくびする　博泉
ポケットで君の心をあたためる　ルイ子
孫 魔法信じポケットたたいてる　日出子
ドラえもんと同じポケット欲しい僕　利昭
ポケットであの日のもみじ栞する　茜
急患にテキパキナース皆無口　高栄
マスクした患者あふれているロビー　三郎
介抱をしてもされても気を遣う　順三
病院から早く飛びたい千羽鶴　波留吉
病院で今日の安心確かめる　勲
病院で可愛い女医が待ってくれ　弘風
退院の笑顔明るく春を呼ぶ　一炊
病院で手術の痕を比べ合い　かすみ
生命線長いだけです病んでいる　冬葉
ワンマンもわが葬式は仕切れない　たもつ
アメリカさんの傘少しずつ穴が開く　亜成
八十まで入れますよとやかましい　一風
行事いろいろ鼻唄歌うカレンダー　洋

川柳大阪　高木信酔報

初春の挨拶まずは仏前に　楽子
宝くじ当たりを招く福娘　すがお
初詣でこぼれるほどの願い事　功
しっかりと挨拶出来る子に育て　川童
進まないはずだ打算がからみつき　重人
お利口な鏡は何も喋らない　一歩
オッスオッスと男同士が挨拶し　敏

人情と紙風船は飛んでいる　照月
呑み過ぎた朝を鏡にしかられる　鉄心
楽しげに子等の挨拶こだまする　柳昌
えべっさんもう好い加減起きてんか　かよこ
私だけこんな御馳走ええやろか　美花
松過ぎてズボンでおどる小銭かな　司
突風へ向かう男の土根性　洛酔
挨拶は社会人への第一歩　兵庫
餅つきの音も聞こえぬこの景気　建
一升瓶にごめんやっしゃの盗み酒　章久
メエメエと羊が平和音頭とる　三十四
達筆な人に見られてすぐむ筆　春蘭
ええやろと言っても嫁はん知らん顔　利昭
事なかれ主義が招いたエゴ社会　宏
女房が鏡ふいてる顔の皺　隆司
お早うで妻の機嫌がよう分かる　笑風
変わる世にままごとごっこの老い二人　喜楽
もうええやろ止めたら肥えたダイエット　柳宏子
ええやんか俺の過去など青テント　民子
お早うさん素直に言える子の笑顔　柳弘
人生は上塗りだけの一夜漬け　青道
三面鏡閉じて女将の顔になる　まつお
挨拶は抜きにしようよ酒さめる　信酔

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

制服のお礼うれしい春の絵馬　重人
村起こしいつも祭礼やっている　巴子
礼服を借りて代読する祝辞　萬的
札出して礼も言わずに返したで　都代子

トラブルの中であれこれ妻を知り　千津子
巡査まで呼びタマちゃんのことで揉め　石舟
トラブルを越えれば後は屋台酒　郁子
看板の役者交代大慌て　玲子
玉砕のはずが永らえ喜寿迎う　禄骨
砕かれた夢いつまでも追い続け　知香子
噛み砕きすぎて話が判らない　見清
限界を悟り我が手で砕く夢　求芽
ライバルの決め球見事打ち返す　庸佑
ダイヤ婚めざし健脚山登る　春
桃の花少し老いたる女雛連れ　啓生
お雛さま私八十越えました　英子
世界中平和でないと家計揺れ　慶子
梅の香に心誘われ一めぐり　和子
府県議の調査費を知り驚いた　久太郎
今更に熟睡出来ぬ看護癖　タミ
波吼えて砕けて強くなれと言う　〆女
生きておればいい事もある靴をはく　蛙
春寒し戦争だけは止めてんか　寿美子
反戦のウエーブ地球二回り　実
反戦のビラ配る瞳が澄んでいる　正坊
いつの間に見事なダンスなさる妻　則彦

川柳塔きゃらぼく　福代　天雀報

知覧には平和を守る神がいて　邦彦
たった一人の福は内鬼は外　杏
風邪引くなひくなと耳に言いきかす　千絵
カラーチャート生きざまの色選びだす　寿々子
弟へゆずるセーター母の指　すみえ
窓の外風がウインクして行った　ゆき
作り笑いここは温室だったのか　ふみ
愛子さまの絵本童話に移る日も　なみ
結んで開いて無心になれぬまだならぬ　富美子
自動ドア乗っても開かぬもどかしさ　千春
玄関に蝋梅香り春うらら　八重子
パソコンが走り置き去りにされている　玲子
草原の匂いムンムンする土俵　千代
目をつむる一語いち語に春の音　てい子
もう春ですね楽しい話だけしよう　田鶴
窓の自由を奪って物を置いている　日枝子
春の陽を呑み込んで吐くいい日和　繭
ヘアカラーして気力で生きるバスに乗り　瑞枝
孫という架け橋支えに和を結ぶ　初枝
お元気ねお陰様でと薬包紙　春枝
才能も寿命のかべにおしい人（石垣花子さんをしのんで）　清人
私を大きくかえた古時計　恵子

岬川柳会　八十田洞庵報

疑った過去を鏡に塗り込める　令子
スタイルがよかった写真セピア色　年子
けなるいとけだるい祖母が使い分け　昌夫
少子化で優遇される子沢山　里子
スタイルの世相読んでか暗き色　みやこ
自分なりのスタイル固執して孤独　勇
ケータイが居座り茶の間失語症　蛙城
スタイルを気にして味気ない男　俶子
善人顔一切ひめてまぎれ込み　勝
スタイルへチャイナドレスにある自信　洞庵
福笹に笑顔を添えて帰り道　茂平
町役場様式惑うお年寄り　富美子

くろぼこ川柳会　前坂なお美報

会合に女子の香りが和まさせ　伝平
女いちずの愛つらぬいて春は来る　富子
安物を買わされ舵を見失う　静生
冷凍庫安い安いと詰められる　悦子
大黒柱父の背中と同じいろ　みち子
合併の都市に基づく国づくり　小生
ノックアウトで投手面目丸つぶれ　かつみ
わたくし流の面目を立てている　螢
湯上がりに飲んだビールの旨いこと　ふみ子
夫が焚く薪の湯　腹の芯に来る　賀代子
ぎりぎりを守る女の土俵際　奈美
おんななんてとおの昔に捨てました　つや子
僕に値を付けたらとても安かろう　一揆
傷ついた名刺を安く売っている　帆雀
法律に基づく国の刑と罰　(米)幸子
浮き草も基づくことは知っている　はるお
面目を気にしてダルマ起きあがる　遊子
湯煙の上がる我が家が待っている　涼子
虚勢張りお湯を沸騰させ過ぎる　美智子
面目も金もないから楽に生き　一眸
安いなあ米百俵が捨ててある　小鹿
春近し基づく舟はどこにいる　なお美
来世にも女に生まれたい私　(下)幸子
ぬるま湯を抜け出て欲しい願掛ける　和代

運命に基づき今日を生きている　あらた
柚子なげて曾孫とはしゃぐ冬至風呂　重忠
二人目のおんなが嫉妬して困る　公弘

川柳塔おおとり　原　みさを報

答はひとつ算式が違っても　螢一弘
計算のできぬ旅路に日が暮れる　風花
突風が吹いて計算狂わせる　雄々
打算ばかりするので恋が育たない　真一
百点を取ったさすがに私の子　彰雄
正解は一つ逆算念を入れ　幸次郎
御破算にしたいが出来ぬ訳言えぬ　紀子
計算が少し狂った三女です　舎人
農業の赤字ハウスがカバーする　和子
潤滑油をさすと計算好きになる　富貴子
帳尻の合わぬ出納今日もつけ　大鯰
父と母計算が合い仲がいい　宏章
さんすうは誰も一〇〇点取っていた　野草
計算は合わぬメロンの種を蒔く　道子
新築に金の算段やっと出来　仁子
残高を見ながら老後慾しむ　彩子
子離れが出来ず母の傘たためない　黙光
卒業は終生出来ぬ一行詩　孝子
卒業をさせてもらえぬ台所　義弘
葬式を卒業式と決めている　邦昭
幾たびの卒業を経て幕が降り　艶子
春を待つ心に春の彩を着て　清子
たのしみの花の種蒔き春を待つ　由多香
不況風老舗も荒い息づかい　せつ子
休刊さすが朝から物足りず　登美
頼られてさすがに絆重くなる　小生
エリートはさすが蛙は蛙の子　芙美
三十路さすが気になる婿さがし　みさを
ああれが踏み絵だったと今気づく

川柳さんだ　北野　哲男報

家族愛皆なの笑顔座が丸い　一弘
老い二人孫中心の昼ごはん　開子
司会者が中心になる披露宴　修
いとしさに名前も言えず頭文字　真由子
絵手紙に母の温もり届けます　千恵子
猫ねむる縁もほっこり春隣　雅司
思い出の道草帰る土いじり　一之
孫の絵で部屋はほっこり美術館　俊昭
デパートを素通りにする歳になり　歳子
帽子だけかぶる頭となり下がり　サクラ
没だった句を今一度日に当てる　章子
黙々と老婆耕す過疎の村　藤朗
コンクリの土手の工事に泣く蛍　朋月
一言がほっこり心に灯をともす　千代
生き方を青から黄色に出来ぬ性　哲男

富柳会　池森子報

湯豆腐とビール一杯この至福　和子
春の風恋のハンドル離さない　深雪
柚味噌の具と花菜で差し向い　明美
平均のコンマあたりで妥協する　浩子
まだ未練あってあっさり押さん判　鐘造
拡大鏡当てると僕も虫一匹　帆雀
握手するたびに拡がる蜘蛛の糸　ひろこ
ハンドルを持たなくなって太り出す　宏至
快調なハンドル米寿越えてきた　花梢
平均と言う安住の陥し穴　冬虹
バランスが崩れてバラが病んでいる　アキ
一本の赤鉛筆にある殺意　夕子
押し問答女の毬がよく弾む　紅紫朗
ハンドルの迷いは寒のもどりから　奈保美
ハンドルを握るとひとが変るボク　亮幹
一人言冬の深さを計ってる　扶美代
毒を持って女おんなでありつづけ　かなこ
平均という物差しに叩かれる　巳代一
昔ばなしに紙風船が熱くなる　初太郎
残された案山子に惜しみなく夕日　和代
世渡りの術を極めたヤジロベエ　一慧
風邪薬入れてととのう旅かばん　春蘭
旅に出てやっと分った旅の恥　洋介
平均を燃やすと軽い灰ばかり　哲矢
その人の度胸を試す崖っぷち　東雲
すみません貴方の靴が僕を踏む　さだを
高齢者ライフ拓こう青い鳥　勇
生きる道余白残している火薬　哲史
平均は声なき声の良識派　欣之
あっさりと言えば明日は晴れたのに　森子

ふくべむら川柳　村上　信子報

日本中拉致一色で泣き笑い　静子
披露宴ビデオ見る度泣き笑い　操子

ノーベル賞祖国日本の名を高め　つね
夫逝って四十年を泣き笑い　和甫
逝く日まで繰り返してる泣き笑い　昭恵
拉致家族祖国で生きる灯をともす　春恵
古里を呑んだダム湖の岸に立つ　寛子
夏枯れにダム懐しい村を見せ　信子
拉致帰国影よおまえもやつれたな　洋々
合併を決めて村長泣き笑い　はじめ

川柳エスポ　山本　三郎報

その人の心で決まる満足度　さくら
アンケートやや満足と旅行社へ　さち子
老い加速何回も鍵たしかめる　ルイ子
庭の木も春が来たよと子にメール　れい子
あなたと私　会話なくともいい時間　一幸
どこまでも求めてやまず満足の道　星花
さささやかな満足の日は早く暮れ　一炊
散歩道会釈で和む温い風　三峰
初夢の亡母はゆり根の丸さかな　とよ子
年金生活人の温みに飢えている　さとし
ねぎらいの言葉一つで疲れ飛ぶ　ゆき子
人生に満足と言う日々はない　昭一朗
何となく楽しい日々は君と居て　文子
サービスの恐さを知った受講料　はつよ
花だより心浮きたち気もそぞろ　みさと
無口でも心がかようちの妻　任宥
新築の宴我が世を謳歌する　髙栄
辞めた友本音を語る縄暖簾　政雄
寄り添うてやがて一つの影法師　仁清
凡夫婦互角に支え日々平和　団地
満足が梯子しだした好奇心　とし子
白い手が貴方が好きとビール注ぐ　三郎

高知川柳社　川竹　松風報

懐妊のお腹隠して高島田　かよ
節くれた手を隠したい訪問着　幸
働いた指です母よなぜ隠す　佳風
賞味期限切れた女のかくし味　功
無礼講見事な平の隠し芸　快風
早くやれみんな知ってる隠し芸　圭二
動揺を隠し美人の横に居る　孝雄
九十を越えたが三つ児にはなれず　竹萌
肩書きがとれた男でただの人　悦子
二男坊羊の目して脛かじる　成美
男女同権男の椅子も数が減り　典雄
初春の夢はでっかい年男　てるみ
妻が逝き男が自立した料理　京子
リストラは男の料理覚えさせ　美々
男でしょ言われ雑用頼まれる　哲史
結婚式男素顔で横に立ち　和江

川柳クラブわたの花　吉村　一風報

ほめられて愚痴閉じこめるのど仏　君江
議員さん閉会中が忙しい　(馬)宏
あたたかい話をのせて年賀くる　一風
心得る猫も甘える女正月　幸枝
無礼講騒いだ後に刺す視線　晴美
大騒ぎ半値バーゲン走ります　俊子
秋空に実る心は晴ればれと　恭一
気迫あふれてどこか年より若く見え　奈良司
車いすとなりの柿の番をする　友甫
恋人を探す大学受験生　正純
カラオケが採点をするまでになり　一道
CMチワワ大の大人が癒やされる　(本)たえこ
大の字になって味わう青畳　(赤)妙子
みどり児のにぎりこぶしにでかい夢　ますみ
てっちりを一人で食べる味気なさ　まさと
どっしりと胡床も妻の掌の上で　いっふみ
風邪ひいて電話の音を聞き流す　義明
鳥帰る空に落書きするように　春江
セピア色ぎっしり並ぶ大家族　順生
クラス会憧れの君孫自慢　知佐子
聞き上手昔話を弾ませる　美代子
始末して大きな夢のジャンボ買う　民
正座より胡坐がうまい鍋料理　明
拳骨でトントン孫の肩たたき　八寿子
話すうち若さが戻るクラス会　肇
仰ぎ見て松のこずえの雪落とす　(増)道子
丸投げで胡坐をかいた偉い人　宏至
騒ぐだけさわいですぐにねてしまう　ミツ子

倉吉川柳会　竹信　照彦報

ぐちゃぐちゃと言うまい今日は早寝する　京子
喜びの湧くこんだてに取りかかる　康子
老化してぐちゃぐちゃパズル絵にならず　日出子
台所三年前の時刻表　よしえ
テロ拉致をしたことされた事もない　かつみ

ぐちゃぐちゃの路地出るときは凍ってた　玲　坊
おちょくって喜ぶ夏目漱石氏　石花菜
戦争をする度テロは増えるのに　和　子
この地球デコボコにするテロリズム　龍　枝
ぐちゃぐちゃの炬燵の部屋が気持ちいい　賀寿恵
テロ起こさぬように遺言書いて置く　きみ子
親父より地震もひとつテロがある　秋　草
主婦の風邪三日もすれば大乱場　(前)喜美子
喜んで買った農地の悲鳴きく　重　忠
パパママが喜ぶための猛勉強　幸　子
つっかけはいてぐちゃぐちゃ戻る牡丹雪　螢
哀しみも喜びに代え報恩講　睦　子
葬式があると喜ぶカラスたち　完　司
足となる肌身離せぬ時刻表　玲　子
日に三度合図お腹の時刻表　和　枝
一日にバス三便の時刻表　ゆり子
大国のエゴが聞こえるぐちゃぐちゃと　十三男
失職の僕に無用の時刻表　(西)喜美子
骨だけはぐちゃぐちゃならず生きてきた　克　枝
親と子に時々狂う時刻表　次　男
安楽死これが最後の喜びか　雄　々
ハッカーにコンピューターが占拠され　悠　子
百姓は朝日夕日が時刻表　やえ
時刻表要らぬ山頭火の旅路　忠　良
美人でも落とす途中の厚化粧　照　彦

岩美川柳会　石谷美恵子報

ぴったりと影がひとつになるドラマ　忠　良
価値観がぴったりしたらゴールイン　孝　男
ぴったりと嵌めたパッキン涙漏れ　蟹　郎
百枚の諭吉ぴったり壷の中　和　枝
運命を変えたガラスの靴もある　節　子
ゆとりある服がぴったりなる不安　たぬ
枯れたのか死んでいるのか芽が出ない　螢
気分よく寝付かれそうだ芽も出よう　はるお
赤ちゃんのにぎりこぶしはフキのトウ　完　司
新芽にも異常気象の雪が舞う　公　乃
春雪に出かけた草芽くしゃみする　睦　子
芽ぶく春別れと出会いドラマ生む　照　子
戦争は続く地球が割れるまで　石花菜
幸せが続くと他人にねたまれる　季　芳
少々の風邪で晩酌止められぬ　静　生
男と女あってドラマはまだ続く　一　京
盛塩が干からび女将消えちゃった　重　忠
古代から地図塗り替えるのは女将　一　瑶
歩から金へと変身をした女将　一　粋
帯ポンと叩き女将の面になる　きみ子
あの店は女将で持っているらしい　雅　女
外人の女将着物がよく似合い　よしえ
ケイタイの三つを帯に差す女将　大　漁
女将から学ぶ泣くこと生きること　圭一郎
何一つ取柄はないが正直だ　かつみ
雨乞いが効きすぎ十日降り続く　裕　子
何んだって言えば貴男は気がすむの　希久代
正直で愚か友達ようけいる　美恵子

川柳藤井寺　髙田美代子報

兄弟が寄ると母さん生き返る　扶美代
母のつぐお茶の甘さがまだ出せず　美智子
涙目は母に貰ったものらしい　桂　子
母に会うただそれだけの子の帰省　春　蘭
かくし事母の目だけはこわかった　喜代子
苦情注文受付口はいつも母　かつみ
亡母の香り消えてはいない桐タンス　悦　子
料理好き母の居場所は台所　アヤ子
母の手を握り直した交差点　六　点
筆まめな母の便りが来ぬ不安　庸　佑
風呂敷に包み切れない母の愛　アキ
困ってる時だけ入る母の傘　鐘　造
老母といるひと日ひと日を噛みしめて　絹　歌
学歴が不思議がられる誤字脱字　重　人
発掘の土器の破片に古代文字　史　郎
ワープロに字を知らないと笑われる　栄　一
妻だから読める夫の崩した字　登志子
達筆の次でためらう奉賀帳　志　洋
誤字脱字なかから母の顔が浮く　敦　子
丸文字のレポートで取る博士号　一　筒
倦怠期妻という字を毒と書き　ロマン
几帳面な字がいう無心だからきく　みつこ
シングルと言う生き方にためらわず　婦美枝
ためろうたかたちのままの冷凍魚　瑠美子
ためらわず行けと背な押す春の風　昭　子
ダイエットへいつもためらう三杯目　耕　策
ためらいがあって最後の殻ぬげず　昌　子
ためらわず席に割り込む歳となり　雅　枝
ためらいが出入りしている古暖簾　ヨシ恵
さよならと書くには惜しい恋でした　美代子

翠洋会　　穴吹　尚士報

風紋千里ラクダと進むゴビ紀行　正雄
しみじみと金子みすゞの詩に酔う　桃花
ひょいと裏見てから心楽になり　伽羅
夢でいい初恋娘にあわせてね　東雲
残り火を優しく燃やす老いの母　蛙
進まねば明日の扉が開かない　みつ子
しみじみと終りよければすべてよし　春
表見て裏までのぞく刺しゅう展　会美
ノーベル賞日本の力見せつける　日の出
泣いた笑った日よ擦り切れたコンサイス　澄子
新聞を畳んで一日が終る　義
父の歳越えてまだ追う父の背中　理恵
自分史の表紙桜で埋めてやろ　孝一
江戸っ子の性に合わないぬるい風　石舟
考えがころころ変る遺言書　志華子
競馬新聞ルーペかざして読んでいる　叡子
しまい湯に今日の疲れをおいてくる　蕉子
何か一つポカをやってる昨日今日　さと美
結び目は見せず夫婦の表編み　真理子
今日も無事しみじみ浸る風呂加減　絹子
昇進の度に酸素が薄くなる　尚士
反戦の叫び無視してのろし上げ　富子
裏の顔見せずに苦労する女優　舞夢
もう一歩進めば明日見えて来る　昭
五年から三年日記にする弱気　恭昌
いくたびの挫折が打たれ強くする　正坊
金の要る相談だから来る子ども　照子

第18回国民文化祭・やまがた2003

川柳　作品募集要項

～悠久の流れ　心の豊かさを求めて～

一、**応募受付期間**　平成十五年四月一日㈫～六月三十日㈪（当日消印有効）

二、**応募規定**

(1) **作　品**　一人各題二句詠（未発表作品に限る）

(2) **応募料**　一人につき一、〇〇〇円（但し、海外投稿者及び小・中・高校生は無料とします。）

(3) **応募方法**　山形県実行委員会作成の「募集要項」をご覧の上、所定の応募用紙を使用してご応募ください。

(4) **応募先**　〒993―0011　山形県長井市館町北五―十　第18回国民文化祭長井市実行委員会事務局「文芸祭」川柳係

三、**宿題・選者**（事前投句）一般　選者　ダム＝平井　吾風（千葉）　ゲーム＝大場　可公（福岡）　米＝佐藤　岳俊（岩手）　民　謡＝竹森　雀舎（大阪）（事前投句）ジュニア　選者　ダム＝小松原爽介（兵庫）　ゲーム＝波多野五楽庵（青森）　米＝近藤　季男（愛知）（当日投句）選者　紅＝小金沢絞子（東京）　ゆとり＝早川　双鳥（山口）　山脈＝秋山　静舟（静岡）第二次選者　吉岡　龍城（熊本）　今川　乱魚（千葉）　礒野いさむ（大阪）　塩見　草映（愛媛）　西來　みわ（東京）

四、**賞**（予定）**文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・山形県知事賞　第18回国民文化祭山形県実行委員会会長賞・山形県教育委員会教育長賞・長井市長賞・第18回国民文化祭長井市実行委員会会長賞・長井市教育委員会教育長賞・山形県川柳連盟賞**

五、**発表会場**　川柳大会（入賞発表、表彰式、当日句、選評）　平成十五年十月十二日㈰　10時30分～15時30分　長井市民文化会館　合同大会（上位賞の表彰式、記念講演会）　平成十五年十月十三日㈪　10時00分～12時10分　上山市体育文化センター　入選作品は作品集として刊行し、応募者全員（小・中・高校生の部は入選者）に無料で配布します。

六、**問い合わせ先及び募集要項請求先**　第18回国民文化祭山形県実行委員会事務局　〒990―0041　山形県山形市緑町一丁目九番三十号　TEL　〇二三―六二六―一八〇〇　FAX　〇二三―六三二―六三一〇

七、**主催者**　文化庁・山形県・山形県教育委員会・長井市・長井市教育委員会・㈳全日本川柳協会　山形県川柳連盟・第18回国民文化祭山形県実行委員会・第18回国民文化祭長井市実行委員会

柳界展望

□第52回西大寺会陽川柳大会は、2月23日岡山市西大寺ふれあいセンターで開催された。本社関係者秀句は次のとおり。

森が消えて魚が消えてそして　河内　天笑

大声で笑ってひとり住んでます　河内　月子

□第12回播磨文芸川柳大会は、3月16日133名の出席で開催された。

〈秀句〉

二千年の節目にともす命の灯　小林　妻子

青春が写真に残るセピア色　古川　奮水

〈佳作〉小林妻子・大石あすなろ

□「いなば温泉郷湯けむり川柳」は、4503句のうち次の句が選ばれた。

〈鹿野温泉地賞〉

荒れた手の母をいたわる鹿野の湯　田中　正坊

〈佳作〉牧野芳光・古久保和子・上地登美代・田村邦昭（本社関係者分）

□「ふあうすと」誌友に与えられる作家賞が決定

〈平成14年紋太賞〉

小池しげお

わいわいと食べると美味しくなるみかん―他9句

★豊中もくせい川柳会は、二〇〇二年度の年間優秀賞を決定、4月の総会で表彰した。ベスト5は、①田中正坊②河井庸佑③阿萬萬的④都倉求芽⑤藤村〆女、秀句賞は都倉求芽の各氏。

▼出　版▲

○竹原川柳会では、故石原伯峯氏による39年間に亘る会員の句の鑑賞の抜萃を、『川柳たけはら鑑賞』として4月17日に発刊　序文は小島蘭幸会長　A5判・162頁

▼人　事▲

■天笑主幹は第3回春はくろぼこ川柳大会選者として、4月6日鳥取県浜村行

■いずも川柳会は新役員を次のとおり決定した。

顧問―原章峰・金村青湖

会長―尼れいじ　副会長―竹治ちかし・森茂美　事務局長―吉岡きみえ

■さえきやえさん（同人名簿P10・7段目）は、**佐伯**やえと改名

新同人紹介

水野黒兎（みずのこくと）
―薫風・直次・正三郎推薦

平尾菜美（ひらおなみ）
―天笑・公弘・はるお推薦

前坂なお美（まえさかなおみ）
―天笑・公弘・はるお推薦

森川あらた（もりかわあらた）
―天笑・公弘・はるお推薦

▽訂正とお詫び△

3月号＝P55上段12行目、有頂点→有頂天

4月号＝P1下段4行目、六十五才→六十五歳　P100中段8行目「卵」→「たまご」　P100中段18行目、たず子→**加津子**

○**常任理事会**は101頁に掲載しています。

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳サークル卯の花	15日(木)正午から 遠い・万歩計・じっくり・宵 自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8　川島諷云児
城北川柳会	17日(土)午後1時から 猫・人形・訛り・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8　神夏磯典子
岸和田川柳会	17日(土)午後1時半から 拭う・値下げ・伸ばす・袴	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610—85　芳地狸村
川柳会梨花	17日(土)まで 男子・緑・正・啄木・雑詠	投句先 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4—268—205 坂田和歌子
川柳ねやがわ	18日(日)午後1時半から 緑・デザイン・色彩・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	18日(日)午後1時半から 凝る・ルージュ・仲直り 自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	19日(月)午後1時から 選ぶ・染める・ナイフ・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801　田中正坊
川柳クラブわたの花	23日(金)午前10時から 歩・湿る・境界・雑詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
京都塔の会	24～25日(土・日)　**吟行** 券・宿る・見物・当日雑感	(4月号 P.122参照) 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
東大阪市川柳同好会	24日(土)午後6時から 追う・ロボット・重い・女	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
はびきの市民川柳会	25日(日)午後1時から 追う・地球・フィルム 「くんくん」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳ふうもん吟社	25日(日)午後1時から 信・スキャンダル・愛したの	JR鳥取駅構内　シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京
川柳塔みぞぐち	26日(月)午後7時半から 五・呼ぶ・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
南大阪川柳会	28日(水)午後6時から 内臓・煮・ぬう・熱愛	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

5 月 各 地 句 会 案 内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	1日(木)午後1時から しかし・楽・時雨	船橋フロムワン（船橋商店街内） 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼　崎 いくしま	2日(金)午後1時から うっとり・道具・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	3日(土)午後1時から 横・写す・雑詠	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池　森子
倉　吉 川柳会	3日(土)午後1時から 魚・手・美しい	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐津支部	6日(火)午後1時半から 自然・サイズ・けが	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13　宗　水笑
堺川柳会	10日(土)午後1時から 焼く（共選）・動物 ふ・く・い（折り句）	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3 河内天笑
打　吹 川柳会	10日(土)午後1時から 面目・そろそろ・湧く	倉吉市上灘町　上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川柳塔 まつえ	10日(土)午後1時半から 化粧・薫る・レール	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22 三島淞丘
川柳塔 みちのく	10日(土)午後4時から 狂う・鏡・あっさり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川柳会	11日(日)午後1時から 掟・削る・気分・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室（近鉄山本駅） 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	11日(日)午後1時から 面影・オープン・あいまい 「ある（連帯詞）」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	12日(月)午後1時から 不意・辻・だぶる・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2—82—308 西口いわお
ほたる 川柳 同好会	13日(火)午後1時から 足・振り・一寸	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1—7—5 田辺正三郎
尼　崎 尾　浜 川柳会	13日(火)午後1時半から 胸・流れる・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス㊽番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太

編集後記

☆表紙裏に案内している暑中見舞広告のご協力よろしくお願いします。7月号掲載なので、5月締切りではピンとこず、忘れられることがあるようです。一人でも、一団体でも多くの申し込みをお待ちしています。

☆ある日曜日、朝刊を見ていると、30面の3割・31面の2割・34面の4割を結婚相談所の広告が占めていた。うち2つは株式会社組織であった。我々が結婚適齢期の頃は、年頃になれば家庭を持つのが当然、という意識を持たされていたから、周囲の世話好きのカモにされ、結婚したカップルが多かったようだが…。

☆最近は若い人の生き方に様々な選択肢があり、個人の価値観で選べるようになった。結婚・非婚もその中に含まれる。親にとっても息子や娘はせいぜい2、3人だから、結婚せず同居してもお互に快適である。勤務の都合で一人暮らしでも、家電製品やコンビニのお陰で、何の不自由もない。

☆しかし、実際に「結婚したくない」人の数は約5%。だから、世話好きが絶滅に近い現在、結婚相談所が企業として成り立つわけである。とはいえ、年齢が高くなるほど結婚に安易な妥協はせず、今30過ぎの女性の3人に1人、40代男性の6人に1人が独身なのだそうだ。

☆生涯の大半を平凡な主婦として過してきた私は、ふと、他に違う生き方を選べていたら、と思わぬでもない。けれど今や見果てぬ夢。せいぜい課題吟のフィクションの範囲で、楽しむことにしよう。（ふ）

ひとこと

健康と川柳

五年前に一ヶ月以上にわたり入院したことがある。見舞の柳友は異口同音に「ゆっくりと川柳と取り組み、たくさんの句が出来るでしょう」と言われた。しかし症状の痛みと早く全快して退院したい気持ちが先行し、全く作句する気になれないのだ。ベッドの上では頭脳の回転が鈍くなり、視野も狭くなり多くの語句が思い浮かばないのだ。川柳は健康な時にこそ心に余裕があり、思考が充分に発揮され良い句となるものと思う。

健康から良い川柳が生まれるのであれば、健康に充分留意をし川柳を継続したい。句会では八十代・九十代の大先輩が出席されて居りますが、皆さんが健康に見え、改めて健康の大切さを実感して居ります。（菊地　政勝）

★のっけから私事で恐縮ですが、わたくし白内障の手術をすることに決めた。決めたと言うのは美しい眼科医から手術をしよう、した方がよいと言われたのではない。歳相応にだれもがなることで急になったのでもないし、こんなものかで生活してきたでしょうとのこと。もともと二親の体質を受け目はよくない。眼鏡屋で乱視気味と言われ、かくなった次第なり。

★眼科医いわく。世の中の諸々が明るくはっきり見えると人生観が変わりますよと。さて、「人生観」を辞書でひくと〝人生とその有する意味の理解・解釈・評価または思想上の態度〟とある。今は〇・七で人様のお顔は覚えづらいが、山は青く紅ばらは赤く白百合は白く見えているつもり。でもより鮮やかになったらわたくしの人生観どうなるか楽しみにしている。

★さて、さきに手術をされた友達に聞くと着るものの色のとり合わせが変わる、白髪になったと思い知る、家中の埃が目立つことなど恐ろしや恐ろしや。

★これで良いのさ癖のわたくし、相変わらず出た所勝負で過ごすことだろうが、編集のお仕事に少しでもプラスになればと埒もないことも考えている。文字どおり明るい世に乾杯。（よ）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**7月号**）　地名　　姓・雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

きりとりせん

作品募集

7月号発表（5月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　奥田みつ子選
愛染帖（3句）　波多野五楽庵選
茴香の花（3句）　政岡日枝子選
課題吟（3句）「あきらめ」　久谷まこと選
「古」　刈田泰司選
「まつわる」　米澤儵子選
初歩教室「公園」（3句）　三宅保州担当

8月号
課題吟「鱗」「耳」「このごろ」
初歩教室「気」

栞忌　本社5月句会

とき　5月6日（火）午後5時半・6時半締切
ところ　アウィーナ大阪　4階
―開会時間及び会場にご注意下さい。
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
兼題「おまけ」　加島由一選
「二人」　福井桂香選
「ぷんぷん」　藤田泰子選
「答え」　山本希久子選
「跳ぶ」　河内天笑選
席題　1題　当日発表（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円

本社6月句会　6月6日（金）

兼題「好き」「譲る」「とことん」「戻る」「痒い」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・茴香の花・一路集（課題吟）への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

夜市川柳募集

第12回「満つ」　奥田みつ子選
ハガキに3句　5月末締切
投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

定価　八百円（送料76円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇三年（平成十五年）五月一日発行
編集兼発行人　河内權治
印刷所　美研アート
〒545-0005　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六　ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（六）六六九一―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成十五年五月一日発行（毎月一日発行）

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584-0023
TEL 0721-25-7210　FAX 0721-25-9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号 〒103-0021
（日本橋川村ビル4F）
TEL 03-5255-5158　FAX 03-5255-5159
http://www.koki-envelope.com

医療法人社団

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科（内科・外科）
放射線科
ホスピス

診療時間　月～金 9：00～17：00
土　9：00～13：00

電話 大阪(06) 6771－4861(代)
http://www.yukawa.or.jp

〒543-0033
大阪市天王寺区堂ヶ芝２丁目10－２
ＪＲ大阪環状線桃谷駅徒歩３分

雑誌　05703－5